

## 詩篇「半神獣」の背景と意義

——半神獣の詩人・ヴィクトル・ユゴ——

Si je n'étais songeur, j'aurais été sylvain.

[Les Contemplations ; I. xxxvii. v. 20]

杉 山 正 樹

### 創作まで

一八五九年、英仏海峡にあるゲルスゼイ島でユゴが迎える四度目の春である。八年前、ルイ・ボナバルトのクーデタに反対し、当時の金で首に二万五千フランの賞金<sup>1)</sup>をつけられてパリを追われ、プレス・コード（フェーデ法）に身辺の危険を感じてブリュッセルから家族共々、英領ジェルセイ島に移り、そこで約三年の年月を過した後、ゲルスゼイに渡って来たのである。皇帝の位に就いたナポレオン三世に対する憎しみも、パンフレット「小ナポレオン」と詩集「膺懲」を書き上げて以来、一時的、外面的な激しさは次第に影をひそめ、どこか体の奥深くに定着し、血肉で

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

養われながら、ひそかに成長を続けて来た。

こうした日々、以前書いた詩句の断片を整理していると、祖国の事、パリに残して来た幾多の愛人、幼い頃の想い出などが心に浮び、氣持の和ぐ事も屢々であった。しかし、何にもまして忘れられないのは、若くして夫と共にセーヌ河で溺死した最愛の娘、レオポルディーヌの事である。五三年に、回転テール<sup>(2)</sup>の仲立ちで、彼岸の娘と話し合つてからは、ひとしお死者に対する親しみの念が増し同時に己れの抱き続けて来た世界観、宗教観などを冥府にいる偉人らと語り合う事も出来、それらに一層の確信を持つに到つた。当時、祖国フランスは英国と同盟を結び、ロシアに對抗していた。クリミア戦役を終らせるため、ナポレオン三世は一八五五年、自らヴィクトリヤ女王を訪問し、その返礼に今度は英国女王がナポレオン三世を訪れるべく、ドーヴァー海峡を渡つた。その時、ロンドンに亡命していたフェリックス・ピアットなる仏人が、女王はこの訪問で、「キャロンベール(ナポリの將軍、一八〇九—一八九五)を風呂に入れ、シャンパンを飲み、ジェローム(ナポレオンの三世)に接吻をした。」という不敬な公開状を発表し、これをジュールセイ島の亡命仲間が出している新聞「人」が掲載したために、編集長などが捕えられるという事件がもち上つた。ユゴはこの事件で追放令を受けた人々の弁護に立つて、自ら彼らと同じ運命を選び、一八五五年十月末日に、ジュールセイ島を離れ、隣りのゲルヌゼイ島に渡つた。それから四年間、ジェルセイ島で聞いた精霊の声は詩となり、見事に諸世紀の壁を描き出したのである。

五六年の春、パリとブリュッセルから同時に出版された詩集「観想」は、亡命中の詩人に対するフランス国民の敬愛の念が少しも衰っていない事を証明した。詩集「観想」の出版者であり、ブリュッセル時代の亡命仲間であり、また文学者であるエツセルは、詩集の成功に氣をよくして、同年夏、ゲルヌゼイ島にユゴを訪れた。その時、詩集「観想」に収められている「亡霊の口の語りし事」の如き哲学詩は、却つて詩人が「パトモスのジョクリス」などと

皮肉られる口実を敵に与えるのみで、一般大衆に受入れられるには余りにも難解すぎるの故をもって、ユゴがこの詩集の表紙に予告した、黙示録風な長詩篇「神」及び「悪魔の最後」の発表は暫く見合わせるように、という忠告をした。その代り、詩人が話の中で洩らした「小叙事詩集」の構想に、この友人は賛意と激励を惜しまなかった。ユゴの叙事詩的な才能は、コルディエの寄宿学校で、ヴェルギリウスの「アエネーイス」に養われ、「東邦」詩集の「雷火」など、初期の詩にも明らかに見られたからである。詩人は既に「エムリョ」、「ロランの結婚」など、この「小叙事詩集」に収める予定の詩を多く書き上げていた。

一八五七年からの二年間は、叙事詩集「諸世紀の伝説」のための年であった。五七年五月十七日、エッツェルは「神」と「悪魔の最後」の出版は、とうてい受諾し難い事、及び「小叙事詩集の方を急いで欲しい、<sup>(4)</sup>」という旨の手紙を送っている。同年九月十一日に正式の契約がなされ、詩人の具体的な構想も、ほぼまとまった。その年の暮から翌五八年春にかけて、哲学詩集「ろば」と「至高なる憐み」を書き上げ、さて後は「諸世紀の伝説」と題名を改えらる「小叙事詩集」の補足、編集に専念しようとしていた矢先き、癩癩に犯され、生死の境をさまよわなければならぬ破目になってしまったのである。幸いにして、病は三カ月で癒え、この遅れを取り戻すために、五九年春まで、海を見渡す仕事部屋「望楼」Look-out に閉じこもった。特に五九年一月から三月までの間に、補足しなければならぬ世紀をうめるための数篇の詩を創作している。その中の一つが、「十六世紀、ルネッサンス——バガニスム」という表題の下に置かれた詩篇「半神獣」であった。かくて、九月二十六日に「諸世紀の伝説」第一輯が世に問われたのである。

詩篇「半神獣」は諸世紀の中の十六世紀全体を占めている。それは中世の暗いキリスト教の束縛から人間の尊厳を取り戻すためにギリシヤ・ラテンの古典文化を再評価した時代であり、新しい人間の誕生の時期である。このルネッ

サンスを描くために、舞台をオリンポスの山にとり、人間、即ち半神獸の勝利と、暴君、即ち邪惡なる神々の敗北を描き出しているのである。

創作にとりかかったのは、五九年始めて、完成は同年三月十七日とされているが、実はそれ以前に書いた三つの断片を利用しているのである。<sup>(5)</sup>この三つの断片は後に破棄されてしまったらしいので、それらが何時書かれたものであるかは詳かでない。ユゴはある詩句が頭に浮ぶと手許にある封筒、手紙の裏、新聞、芝居、音楽会のプログラム、通知状、名刺などの余白に手あたり次第書きとめておく習慣で、睡眠中にふと心に浮ぶ詩句も半睡半醒の状態で手許の紙に書きとめ、翌朝、夜の収獲をお倉に入れていたのである。<sup>(6)</sup>このようにして書かれた夥しい断片が整理され、書き更められて、幾多の詩篇が成立しているのであるが、これらの中から、三つの断片を取り出し、一篇の「半神獸」を作りあげようとしたのは、少くとも五七年以後の事であり、——五七年末の構想の中に此の詩篇は見出されない<sup>(7)</sup>——恐らくは五八年の病が全快した後の事であろう。ここで問題の三つの断片とは、それぞれ、オリンポスの神々の集りの中に連行された半神獸の氣も失わんばかりの驚愕——これは第一部、「青空」の部分であり——世界創造の要約及び古代生物の恐ろしい描写——これは第二部「暗黒」に相当する（但し、二七〇—二九〇行及び三九六—四三三行はなかった）ものである。

この「半神獸」の原稿には、殆んど加筆・抹殺の個処が見られず、ために全部ではないにしても、大部分はあらためて清書されたものであって、ただ数枚の原稿の裏や余白に、一回抹殺され、それから清書し直されている跡がある<sup>(8)</sup>ので、或いはそれが以前に書かれた断片に当るものであるかも知れない。

この詩篇は、プロローグと、それぞれ天の状態に模した、それ自体象徴的な題、「青空」、「暗黒」、「薄明」、「星空」との四部分に分たれている。テーマは、オリンポスの神々の前に引き出されて茫然とした半神獸が、遂には、歌の力、

詩の魔術によって、現世の最大の権力者であるジュピテルを膝まづがせる、というものである。ここに見出れるのは、古代の異教の思索家の思想でもなければ、ルネッサンスのユマニスムでもない。ユゴは自分自身を、そして自分の哲学を古代に借りた神話に事よせて展開しているのである。

## プロローグ

Un satyre habitait l'Olympe, retiré

Dans le grand bois sauvage au pied du mont sacré ;

Il vivait là, chassant, rêvant, parmi les branches ;

[Prologue. v. 1—3]

〔大意〕 ある半神獣が、聖なる山の麓、未開の大森林にひきこもり、オリンポスの山を住いとしていた。彼はそこで、狩をし、夢想しつゝ、木の枝の間で生活をしていた。

この半神獣は、林野に住む天と地の息子であり、夢想家で音楽の名手でもあった。フィリップ・ヴァン・ティゲムは、ユゴの半神獣と一八四〇年に出版されたモーリス・ドゥ・ゲランの人馬神との相似を指摘しているが、ルコント・ドゥ・リールの古代詩集の中に収められている詩「パン」の主人公とも甚しく酷似している。ユゴはしかし、satyre, faune, agipan, sylvain, chèvre-pied などの単語を無差別に、この森林の住人を表わすのに用い、その形体は「毛むくじやう」で「角が生え」「下半身が羊で」「びっこ」で「山羊の蹄を持っている。」という不恰好なものである。しかもこの半神獣は、

Nuit et jour, poursuivant les vagues formes blanches,

Il tenait à l'affût les douze ou quinze sens

Qu'un faune peut braquer sur les plaisirs passants.

[Palogue. v. 4—6]

〔大意〕 日夜、漠たる白い姿を追い求め、半神獸が通り行く快楽に向け得る十二もしくは十五の感覚を、待伏せ場所で持ち続けていた。

この半神獸は、五五年に書かれた「ホラチウスについて」の中に見られる半神獸とはほぼ同じである

...Et se glisser dans l'ombre, et s'entourer, lascif,

Aux blanches nudités des nymphes peu vêtues,

Le faune aux pieds de chèvre, aux oreilles pointues !

[Les Contemplations ; Liv. I, XIII, A propos d'Horace, v. 56—58]

〔大意〕 影の中に忍び込み、殆んど何も身にまとうていないニンフ達の白い裸形に、淫りにも酔い痴れている、山羊の脚、尖った耳の半神獸

ユゴが女体の裸形、女の脚の白さに惹かれる気持は、幼い頃からの様々の事件と、父親から受継いだ強力な肉欲とに依るもので、一生、詩人の頭から離れなかった幻想である。

クリシィ街二十四番地に住んでいた頃、母はヴィクトルをモン・ブラン街の学校に通わせた。しかし当時彼はまだ三才だったので、他の生徒より可愛がられ、特別に取扱われていた。朝、校長先生の娘のローズ嬢の部屋に連れて行かれると、ローズ嬢はまだ床の中にいる事が屢々で、そういう時には、ヴィクトルを自分の近くのベットの<sup>3</sup>上に腰かけさせた。ヴィクトルは、こんな時、お嬢さんが起きて靴下を履くのをじっと見つめていたのである。

...Rose défit sa chaussure,

Et mit, d'un air ingénu,

Son petit pied dans l'eau pure ;

Je ne vis pas son pied nu.

[Les Contemplations : Liv. I, XIX, Vieille chanson du Jeune temps. v. 25—28]

〔大意〕 ローズは履きものを脱ぎ棄て、あどけない様子で、その小さな足を清らかな水の中に入れた。でも僕はその裸の足を  
見はしなかつた。

軍人であつた父レオポルドが、各地に転々として居を換えねばならなかつた事と、父母の仲が悪く、母はヴィクトルを生んで間もなく、一八〇三年六月に同郷のラ・オリ將軍を愛するようになり、父はエルベ島滞在(一八〇四年)以來、カテリーヌ・トマという愛人と同棲していたので、ヴィクトルは生れて以來、殆んど父と一緒に暮した事がなかつた。

一八一一年春、ラ・オリ將軍は反ナポレオン運動の謀議に参加したかどで罪に問われ、捕えられてしまつた。愛する人を失つて、支えを奪われたユゴ夫人は、当時、スペインのアヴィラ及びセゴヴィアの総督であつた夫に、子供と共に合流するため、パリを離れバイヨンに向つて出発した。そこで一軒の家を借り、グリラの出没する物騒な道中と共にしてくれる輜重隊を一ヶ月も待たねばならなかつた。その隣家には十四、五才になる、まるで棒のようなデリケートな白い皮膚をした、細っそりとした体つきの一人のブロンドの髪がいた。ヴィクトルは、二人の兄に置き去りにされてしまうと、よく庭で彼女に本を読んで貰つた。しかしそんな時、ヴィクトルは後ろに立つて、少女の鈍い光沢を放つ、透き通るような肌を見つめるのに一心になつて、その声を聞いてはいなかつた。肩掛が外ずれて、左右

に開いている時には、太陽の熱い照返しで金色に染まった円やかな乳房が、薄明の中で、静かに起伏するのを、幼いユゴは奇妙な幻惑の入り混じった乱れた気持で見つめていたのである。「時として、こうゆう時、彼女は不意に、大きな青い目をあげ、『まあヴィクトル、聞いていないの?』という事があった。私は完全にどきまぎしてしまい、顔はほてり、身体がふるえた。……私はまだ一回も、自分から口づけをした事はなかったのです。私を呼んで、『さあ、キスして頂戴!』と言ったのは彼女でした。』<sup>(5)</sup>

... Pour lui traduire un psalme, bien souvent

Je me penchais sur son livre à l'église ;

Si bien qu'un jour, vous le vîtes, mon Dieu !

Sa joue en fleur toucha ma lèvre en feu.

[Les Contemplations. Liv. I, XI, Lise, v. 33—36]

〔大意〕 あの女おんなに聖書の詩篇を訳してあげるために、教会でよく彼女の本の上に屈みこみました。おお神様よ、ある日、あな  
たは御覧になりました、花のような彼女の頬が、火のような私の唇に触れたのです。

父と母との間には依然として険悪な空気が漂い、翌十二年には再びパリに戻り、十四年に、兄ウヂェヌと共にコル  
ディエの寄宿学校の寄宿生となった。ある日、若い舎監のフェリッククス・ビスカラが、恋人のロザリ嬢と一緒に、ヴ  
ィクトル、兄ウヂェヌをノートル・ダム寺院の頂上に連れて行ってくれた。その時、ヴィクトルはロザリ嬢の後から  
階段を登り、その脚をしげしげと眺めたのである。<sup>(6)</sup>「すべてのシエリュバンが、浴室の窓から覗き込もうとして、う  
ろつき廻る」年頃で、好色な気質を受け継ぎ、エロチックなホラチウスやマルチアアリスに入り浸っている青年が、



女体の幻影にうろつきまわられたのは、当然の事である。

*J'avais seize ans, bel âge où tous les chérubins*

*Rôlent, tâchant de voir par les vitres des bairis...*

*L'âge que vous aviez, mon André, quand vous étiez*

*Un beau matin, du fond de son réduit obscur...*

*Sortir du lit Myrrha, qui s'appelait Clarisse ;*

*Bref, je fis comme vous, mon doux André Chénier,*

*Et j'appliquai mon œil aux fentes du grenier.*

[*Dernière Garbe. LXXV. À André Chénier*]

〔大意〕 僕は十六歳だった。すべてのシェリユバンが浴室のガラス窓の中を覗き込もうとして、うろつき廻る美しい年令、お、僕のアンドレよ！ あなたが或る朝、暗い小屋の奥で、クラリスと呼ばれるミラが、ベッドから出て来るのを見た時のあなたの年令、要するに、僕の優しいアンドレ・シェニエよ、僕はあなたと同じようにしたのです。僕は目を屋根裏部屋の割れ目に押しあてたのです。

ユゴは、一生、何もまどわぬ女の前、乳房、バラ色の脚をひそかに眺める快樂にあきた事は、一度もなかった。森野の精のように、彼は野生的な美女を、森の中で洗濯をてしている女を覗き見たのである。屋根裏部屋の貧しい学生であった頃、彼は隣りの天窓や『屋根裏部屋の割れ目』から、着物を脱いでいる女中を、ひそかに眺めていたのである。

*L'été, par des chaleurs que note Réaumur,*

*Qui ne s'est installé dans quelque angle de mur*

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

*Pour regarder sortir du lit des cuisinières ?*

*Femmes, nous vous guettons de toutes les manières,*

*Nous vous espionnons et nous vous contemplons.*

*Qui donc n'endurerait le supplice des plombs,*

*Pour voir Suzon, Suzon au bain vaut Artemise,*

*Entrer dans sa baignoire ou changer de chemise ?*

*J'ai fait, vers dix sept ans, ce rêve gracieux,*

*Que je voyais Hébé, la grisette des cieus,*

*Mettre sa jarretière et dégraffer sa guimpe*

*Dans les mansardes d'ombre et d'azur d'Olympe.*

[Océan : LIV.]

〔大意〕夏、レオニジュール（寒暖計の發明者）が記録する程の土用の最中でも、料理女たちがベッドから出てくるのを眺めるためには、部屋の隅で、じっとしていなかった者があるだろうか？ 女よ、僕らは、あらゆる遺方で、君達の隙をうかがっているのだ。僕らは君達をひそかに探り、じっと眺めているのだ。シュゾン、——浴みをするシュゾンはアルテミスに価する——が浴槽に入ったたり、下着を替えたりするのを見るためには、鉛弾の刑に堪えられないような者がいるだろうか？ 私は十七歳の頃、有難い夢を見た。天界の浮気女エベがオリンポスの閣と蒼穹の屋根裏部屋で、靴下止めをつけ、肩掛のホックを外しているのを眺めるという有難い夢。

これが彼の生涯を通じての鍵となる主題となったのである。あまりも貞潔な青春は、罪を悔悟しない「覗き見をする人」を作ったのである。

二十才で、アデル・フーシェと結婚するや続けさまに五人の子供をもうけ、これに疲れ果てた妻は、この『酔い痴れたブドー收穫人』と、肉欲の激しさを共にする事が出来なかつた。

Tout craignait ce sylvain à toute heure allumé.

[Prologue. v. 26]

〔大意〕 四六時中、炎を燃やしているこの半神獣を、すべてのものが恐れていた。

非常に親しはずの

La bacchante elle même en tremblait ;

[Prologue. v. 27]

〔大意〕 バッカスの祭女までがそのためにびくびくしていた。

そして又、

#### Les nappées

S'allaient blottir aux trous des roches escarpées ;

[Prologue. v. 27—28]

〔大意〕 谷の泉のニンフらは、険しい谷の洞窟に身を隠しに行つてしまひ、

静かな場所で孤独を求めているコダマの精も、一人では心細いので、

Echo barricadait son antre trop peu sûr ;

[Prologue. v. 29]

〔大意〕 コダマの精はあまり安全でない洞窟の入口を閉ざしてしまつた。

しかし、この半神獣は、己れの肉体の力にひきずられ、常に興奮してはいるが、一方、蒼穹を、神を求める聖なる心

の所有者でもあったのである。

Pour ce songeur velu, fait de fange et d'azur,

L'andryade en sa grotte étrait dans une alcôve ;

[Prologue, v. 30—31]

〔大意〕 泥と蒼空で作られているこの毛むくじゃらな夢想家のために、木の精は、洞窟の中の一室奥にある寝所にいた。

一般に、ユゴは一八三三年二月の、ジュリエットの征服までは妻に忠実であったという伝説が流布されているが、詩人が、妻アデルに同床を拒まれた一八三〇年秋から、一八三三年二月まで、果して他の女性なしに過せたか否かという事すら疑わしいのである。

一八三〇年代の初めには、妻アデルとサント・ブーヴの裏切りで心に深い傷手を負い、その上、文学上の友も、詩に劇に名声をほしいままにする詩人に対する嫉妬からだんだん離れて行き、心から話し合える友が少なくなっていた。結婚当初の喜びは悲しみに変わりこの悲しみが彼の視線を内面に向わせ、自信満々たる「崇高なる子」の時代に別れを告げさせたのである。嘗て、アデルと共に恋し、共に文学の道にいそしんだ兄ウヂェーヌの事は、常に頭から離れなかった。兄は一八二二年十月十二日、ヴィクトルとアデルの結婚式の夜、嫉妬に狂い突然発狂したのである。この恐ろしい運命がヴィクトルにとっては、生涯拭い去る事の出来ぬ悲しみと漠然たる後悔の念となった。詩歌の面でも、また恋愛の面でも兄と争い、兄を敗者にしてしまったとはいえ、これは決して罪を犯したという事にはならないし、過失を犯した事にもならない。だが、兄の発狂は一つの妄執となって、ユゴにとりついてしまったのである。死者よりも死んでいる兄を、サン・モリスの病院に訪れるのが怖いような気持で、殆んど見舞にも行かなかったヴィクトルではあるが、兄を忘れる時は一瞬もなかった。自分の体内に巢を作ってしまったこの苦しみから逃れるため、

そして兄の恋したアデルの不貞が惹き起した苦惱から逃れるために、ニンフを追い求めたのである。

ジュリエット・ドゥルエを得てからの満たされた生活も長続きせず、却って、一度食べた禁断の木の実が、詩人の食欲を増進する結果になってしまった。一八六二年のユゴの手帖には、「ジュリー、一八三六年以来断えてなし。」と記されている。<sup>9)</sup>ジュリーの征服が一八三六年とすれば、詩人とジュリエットの天国は三年しか続かなかった事になる。当時、ロワイヤル広場にあった、ユゴのアバルトマンには、直接ヴィクトルの書齋に通ずる隠し階段があって、ジュリエット以外の女達が部屋に通され、次々と詩人の魅力に屈服していった。ジュリエットはポルト・サン・マルタン座の女優、ジョルジョ嬢やドルヴァル夫人を、そして、オペラ座のバレリーナ、リロン嬢までを警戒しなければならなかった。誘惑しようと狙っていた婦人達は、殆んど抵抗しないこの男に飛びかかって行つた。役を欲しがる女優、コケットな、熱し易い社交界の娘達、駆け出しの女流作家達<sup>10)</sup>……。

文学の面では、相変らず嫉妬と悪意が詩人を取り巻いていた。サント・ブーヴ、ヴィニ、ギュスターヴ・ブランシュ、ニザールなどは完全に敵側に廻ってしまった。詩人は、ラマルチーヌが歓呼の声に包まれてアカデミーに入るの指をくわえて見ていなければならなかった。このような凱歌を挙げるには何と程遠い事か……彼は一八三五年三月一日、『彼の立琴に垂れ下がっている』既に『切れている』絃を想い、心の底をのぞかせる一通の手紙(一八三五年八月十六日、妻宛)の中で次のような唸き声をあげている。『何と多くの面で私は崩壊してしまつたことだらう。』と。しかし、斗いをあきらめ、女体に逃避するばかりではなかった。光栄が駄目なら名譽を、真の偉大が手に入らぬのなら、人を教え導く偉大を、と貧乏な追求を始めていた。屈辱的な三回の落選を経て、四十一年、アカデミーの扉を押し破つた時には、抒情詩をあきらめ(もはやその年齢ではなかった)。芝居までも(ビュルグラーフは失敗であった)放棄し、ただ秀れた政治家としての生活を身につける事のみを目標にしていた。ただし、ラマルチーヌのように野党

の道を通ってではなく、王の好意にすがり、王から受ける尊敬を利用して、であった。勿論、美しいオルレアン公妃、エレーヌの力添えもあったのであるが、詩人は、一八四五年の春、上院に議席を得る事が出来、永年の念願をかなえたのである。

…Peuples ! écoutez le poète !

Écoutez le rêveur sacré !

Dans votre nuit, sans lui complète,

Lui seul a le front éclairé

[Les Rayons et les Ombres. I. Fonction du poète, v. 277—280]

〔大意〕 人々よ、詩人の言に耳を傾けよ、聖なる夢想家の言を聴け！ 彼なくしては、全き闇であるあなた方の夜に、彼のみは光に照された額をもっているのだ。

この頃、詩人は毎年夏になると、ジュリエットを連れて、あちこちを旅行する慣わしであった。野や森の中では、偉大なる詩人も野性にかえり、フォーンヌの本性を表わすのである。

一八三六年、ブルターニュ地方の旅行の途次で。

六月二十二日、フジエールにて、

「…メイエンヌからジュブレールに行きました。そこにはシーザーの野営地があって、スカートの事など全然気にもせず、困いを身軽に飛びこえながら、私に新鮮なバラや古い煉瓦を渡してくれる、世界一可愛らしい娘さんの案内で歩き廻りました……」

一八四〇年には、ライン地方に旅し、ディナンから道中の愉快な事件を妻へ書き送っている。

八月三十一日、リエージュの、ディナンにて、

「二・三人の大きな美しい娘さんが一本の高い梅の木に登ってその実を盗んでいました。なかの一人は、その木の大きな枝の上に乗っていましたが、その優美な格好たるや、道行く人などは完全に眼中にないといった態で、馬車の屋上席の旅人達に、何かしら、地上に降り立ちたくなるような、漠然とした欲望を抱かせるのでした。」<sup>(13)</sup>  
四三年には、ピレネ山脈、スペインへ旅して、幼き日のバイヨンの少女の想い出に浸り、亦乙女達の海水浴を眺めたりした。

七月二十五日、ビアリッツにて、

「…村の娘達やバイヨンの美しい出稼ぎの娘たちは、屢々、穴のあきすぎたサージの下着を身につけて水浴びをしているのですが、その穴が何を人目にさらし、下着が何を隠すのかを、たいして気にしていません。」<sup>(14)</sup>  
また、ありあわせの紙片には、こんなふう<sup>(15)</sup>に誌したりしている。

「ブドー取り入れの季節だった。私達が通って行く道から、短いスカートをはき、地面に屈み込んで、とりわけ、第一音節まで丸見えの、取り入れの乙女達が見られた。」<sup>(16)</sup>

はだしで洗濯をしている女達も、ユゴの眼を惹きつけるものであった。<sup>(16)</sup>  
「…三人の乙女が膝まで水につかり、小川の中で下着を洗っていた。」

*Elle était déchaussée, elle était décoiffée,*

*Assise, les pieds nus, parmi les joncs penchants ;*

*Moi qui passais par là, je crus voir une fée,*

*Et je lui dis : Veux-tu t'en venir dans les champs ?*

[*Les Contemplations*, I, XXI, v. 1—4]

詩篇「半神獸」の背景と意義(杉山)

〔大意〕 その娘は靴も帽子もぬいで、倒れかかった藪の中に、裸足で坐っていた。そこを通りがかった私は、妖精を見ているのかと思った。そして私は彼女にいった、「野原に行きませんか？」

Sournois, pour se jeter sur elle, il profitait

Du moment où la nymphe, à l'heure où tout se fait,

Éclatante, apparaît dans le miroir des sources ;

Il arrêtait Lycère et Chloé dans leurs courses ;

Il guettait, dans les lacs qu'ombrage le bouleau,

La naïade qu'on voit radieuse sous l'eau

Comme une étoile ayant la forme d'une femme ;

Son oeil lascif errait la nuit comme une flamme ;

.....

Si l'eau murmurait : J'aime ! il la prenait au mot,

Et saisissait l'Ondée en fuite sous les herbes ;

.....

Son bras, toujours tendu vers quelque blonde tresse,

Fraversait l'ombre ; après les mois de sécheresse,

Les rivières, qui n'ont qu'un voile de vapeur,

Allant remplir leur urne à la pluie, avaient peur

De rencontrer sa face effrontée et cornue ;

Un jour, se croyant seule et s'étant mise nue



Pour se baigner au flot d'un ruisseau clair, Psyché  
L'aperçut tout à coup dans les feuilles caché,  
Et s'enfuit, et s'alla plaindre dans l'empyrée ;  
Il avait l'innocence impudique de Rhée ;  
Son caprice, à la fois divin et bestial,  
Montait jusqu'au rocher sacré de l'idéal,  
Car partout où l'oiseau vole, la chèvre y grimpe ;

[Prologue. v. 33—40, v. 50—51, v. 59—71]

〔大意〕 危険にも、ニンフを襲うのに彼が利用していたのは、物皆すべてが沈黙し、ニンフが、きらびやかに泉の鏡に姿を見せる時であった。走っているリセールとクロエを捕えた。白樺が影を落している湖の中でつけ狙ったのは、女の形をしたお星様のように、水の下に輝いて見える水の精。彼の好きな眼は、夜毎、炎のように彷彿い歩いていた。……水に愛を囁かれば、本気にし、草の下に逃げて行く水の精を掴えた。……プロンドの編毛の方に常に差し伸べている彼の腕は、闇の中を縦横に走った。数カ月の乾燥期の後、陽炎陽炎のヴェールしかかけていない川が、雨にその壺を満たしに行く時に、彼の厚かましい、角の生えている顔に、出会う事を恐れていた。ある日、プシケ（アムール愛の神の妻）は、誰もいなく思つて裸になり、澄んだ小川の波に浴みしようとした時、彼が木の葉のかげに隠れているのを急に見つけて、一目散に逃げ出し、天上の神々に訴えに行った。彼はレー（地の原始神であり、サチュルヌの妻、その「不身持な無邪気さ」は羞恥の女神生誕以前のものである）の不身持な無邪気さをもっていた。彼の、同時に神性でもあり、獣性でもある気まぐれは、理想である聖なる山に登つていった。というのは、鳥が飛んでいる処には、どこにでも、そこには山羊も這い上るからである。

森の中、田野の中で、こんなに沢山のニンフを眺めた半獣神の詩人、ユゴは、青春時代の「有難い夢」を半ば現実  
に掴んだような気になっていたが、背後には恐ろしい運命が隠されていたのである。

このスペイン旅行の前に、春結婚したばかりの最愛の娘、レオポルディーヌ、即ちシャルル・ヴァクリ夫人を、ルーヴルに訪れ、七月九日の丸一日を、若夫婦の傍で過し、その後、もう一度パリに帰り、ジュリエットを伴つて旅へ出発したのである。旅は無事に終りに近ずき、アジャン、アングレームを経て、ロシュフォールに到着、その周りを取り囲む沼沢地帯を長時間かかつて横切つた時、ジュリエットは、ユゴが疲れている様子を見て、スピーズ村の《カフェ・ド・リヨロプ》に入つて休むように詩人にすすめた。九月九日の午後三時頃である。そこで、何という事なしに、ふと取り上げた、九月四日付の《世紀》紙上に恐ろしい記事を見出した。九月四日に、レオポルディーヌがセーヌ河で、乗っていた舟が転覆したために、夫と共に溺死をしたというのである。何という事だ。ユゴは雷に打たれたように、顔面は蒼白になり、目の前が真暗になつてしまった。眼から溢れ出る涙は頬を濡らし、手は、心臓が胸から飛び出すのを防ぐかのように胸の上で固く握られていた。

一刻も早く家族の許に帰らねば、と気ばかりあせるが、投宿していたヨーロッパ・ホテルで、夕方の六時まで、馬車の出発を待たねばならなかった。その時間を利用して書いた妻への手紙。

「おお、可哀そうなお前、泣かないでおくれ、諦めよう。あれは天使だったのだ。神様にお返ししよう。悲しい事だが、あの子は、あまり倅せすぎたのだ……」<sup>(17)</sup>

パリに向う馬車の中で、苦悩と顔つき合わせながら、手帖を取り出し、心に想い浮ぶままの詩句の断片を書きつけた。

*Je suis, lorsque je pense, un poète, un esprit,*

*Mais sitôt que je souffre, hélas ! ja suis un homme !*

*Nous aimons nos enfants bien plus qu'ils ne nous aiment.*

*Quand tu la contemplais, cette Seine si belle,*

*Rien ne te disait donc : ce sera ton tombeau.*

(28)

〔大意〕 私は考えている時には詩人、精霊だが、苦しい想いに悩まされると、悲しいかな、すぐ人間になるのだ。

私達は、子供達が私達を愛してくれるより、ずっと彼らを愛しているのだ。

お前が、こんなに美しいセーヌを眺めていた時、何もお前にいいはしなかったか？ 「これがお前の墓になるだろう」  
と。

パリに帰って来てからも、苦悩が彼を責めさいなんだ。この精神の極度の混乱の中にあつては、男が感覚の変化や激しさの中に忘却を求めるのは当然である。「ヴィーナスを凝視するブラクシテレスの前でヴェールを脱ぐアテナイの娘達と一緒に、美のコンクールに合格するかも知れない」といわれた程、美しかったジュリエットの肉体も、十年の間に、色あせてしまつていた。彼女の代りに詩人の肉体を満足させていたのは、女優や文学にかぶれた娘達であつた。

一八四四年の始めには、若いプロンドの女性がユゴを支配し始めていた。常に濡れているような瞳を伏目勝にして、この美人はレオニ・ドネといい、落ちぶれてはいたが、正統な貴族の出である。十八才の時、家を飛び出し、凡庸な才能の画家、フランソワ・テレーズ・オーギュスト・ビヤールの許に走り、後に結婚をした。夫妻はサモワに近いセーヌ河のほとりに邸宅を借り、一八四二年頃には、多くの芸術家の訪問を受けた。詩人は、ナポレオンの嘗ての愛妾の一人、フォルチュネ・アムランというナポレオン最良の老嬢にビアル夫人を紹介されたが、四三年は劇、「ピュ

ルグラーヴ」上演、スペイン旅行、レオポルディーヌの死と事件が相継いで起つたため、サモワを訪れる機会は少かつた。娘の死に打ちひしがれた苦しみから逃れるため、仕事や公務（アカデミー及び宮廷への出仕）で気を紛らそうと務めたが、更に新たな恋……単なる肉欲の満足だけではない……によつても苦しみから脱れようともがいた。こうして、ビアル夫人に対する頻繁なる訪門が始まったのである。

Oh ! dis, te souviens-tu de cet heureux dimanche ?

— Neuf juin ! — Sur les rideaux de mousseline blanche

Le soleil dessinait l'ombre des vitres d'or.

Il te nommait son bien, sa beauté, son trésor.

Tu songeais dans ses bras. Heures trop tôt passées !

Oh ! comme vous méliez vos âmes, vos pensées !

[Toute la lyre. VI, XLVIII, 25 juin 1844, v. 1—6. t. II, p. 161.]

〔大意〕 さあ、言つてごらん。あの幸せな日曜を憶えているかい？ 六月九日。白いモスリンのカーテンに日の光が黄金色の窓ガラスの影を描き出していた。

彼は君を、幸なる君、美しの君、無二の君、と呼んでいたね。君は彼の腕に抱かれて夢見ていた。あまりに早く過ぎ去つた数時間よ！ おお、君達二人は、何とお互の魂を、心を交ぜ合わせていた事か。

一八四五年七月五日の夜明け方、ユゴがサン・ロシュの人目につかないアルバトマンでビアル夫人と密会しているところを、嫉妬に狂つた夫の要請で出動した警官に襲われ、詩人と画家の妻は姦通現行犯という事で、逮捕された。詩人は直ちに上院議員に対する法の不可侵性を主張し、その場で釈放されたが、ビアル夫人は、サン・ラザールの

牢獄につながれる事になったのである。

Ce feune débrallait la forêt de l'Olympe ;

Et, de plus, il était voleur, l'aventurier.

[Prologue. v. 72—73]

〔大意〕 この半神獣はオリンポスの森の装いを、すべてはいでしまった。しかも、そのキ、彼は泥棒だった。この冒険家は。

パリ中は、このスキャンダルに湧きに湧いた。ユゴが上院に議席をもつ事に反対だったパスキエ侯やドガーズ侯は、かんかんになって怒り、王が自ら、詩人の上院議員たる資格を剝奪すべきだと主張したが、王は逆に、火消し役を買って出た。まず画家ビアールを招いて、ヴェルサイユ宮殿の壁画の注文をして、この訟訴を撤回するようにと説得し、ユゴには暫くパリを離れるように忠告した。が実際には、詩人はサン・タナスターズ街のジュリエットの家で蟄居していたのであり、更に驚くべき事には、ユゴの持つて来る新聞しか読まず、殆んど外出しないジュリエットは、この事件を知らなかったのである。

八月十四日に、ビアール夫妻の正式な離婚が成立し、釈放されたビアール夫人は、元の名のレオニ・ドネに帰り、亡命まで、詩人の第三の妻として過す事になったのである。

ジュリットには、レオポルディヌより二つ年下の娘がいて、<sup>(21)</sup>四五年には十九才になっていた。暗い幼年時代を過し、一八三六年以来、サンマンデの、マイル及びアロー夫人の寄宿学校の寄宿生となり、木曜の面会日に母が逢いに来てくれる事を除けば、家庭的雰囲気の中で過せるのは、サン・タナスターズ街の母ジュリエットの家を訪れる、月二回の外出日だけであった。一八三九年の神秘的な結婚——ジュリエットは、無数のニンフを従えた、この半神獣の肉体

に關する貞節には、もう殆んど期待をかけていなかった。三九年十一月一日、ジュリエットはユゴに宛てた手紙に、次のように書いた。「…私があなたにお願いする命より大切な事、それは、愛による私達の結婚の精神の上での挙式なのです。私は私の愛が脅かされる処なら、何処までもあなたの後を追って行きたいと思ひますし、法律によつてはあなたの妻になれない以上、精神と心によるあなたの妻になりたいと思つております……」ユゴはこの願いを、ジュリエットが再び舞台上に立たないという保証と引きかえに、一八三九年十一月十七日から十八日にかけての夜に、かなえてやり、神の前で、ジュリエットとクレールを絶対に見棄てない事を誓つた——この神秘的な結婚以来、ユゴはクレールを自分の子と考へ、また遇して来た<sup>(25)</sup>。当時、クレールはサン・マンデの学校に助教員の資格で残り、そこで、初級教員資格試験を受ける準備をしていた。ユゴは一度ならず彼女の机の上に身を屈めて助言を与へ、フランス語の眞の授業を授けた。クレールの傍にいと、レオポルディーヌの傍にいたような錯覚に落ち入るからでもあった。クレールは一八四六年二月十九日の第一次試験には見事にパスしたが、三月二日の第二次には失敗をした。彼女の落胆は大きく、自殺を図つたため、もともとこわれ易かつた彼女の體質は「奔馬性肺結核」におかされ、三カ月後にはレオポルディーヌの後を追つて逝つてしまつた。

*Quoi donc ! La vôtre aussi ! La vôtre suit la mienne !*

*O mère au cœur profond, mère, vous avez beau*

*Laisser la porte ouverte afin qu' elle revienne,*

*Cette pierre là-bas dans l'herbe est un tombeau !*

[*Les Contemplations, Liv. VI, VIII, Claire. v. 1—4*]

〔大意〕 何だつて？ あなたのも！ あなたの娘も私の娘の後を追われたのか！ 情愛深い母親よ、あの娘が帰つて来るようにと扉を開けておいても何にもならないのですよ。この石は、彼方の、草の下では、一つの墓なのです。

このジュリエットの悲しみは、詩人のそれと相通じ、お互によく似た立場に立った二人は、前にも増して親近感を抱きあつた。

… Elle s'en est allée avant d'être une femme ;

N'étant qu'un ange encor ; le ciel a pris son âme

Pour la rendre en rayons à nos regards en pleurs,

Et l'herbe sa beauté, pour nous la rendre en fleurs.

Les êtres étoilés que nous nommons archanges

La bercent dans leurs bras au milieu des louanges,

Et, parmi les clartés, les lyres, les chansons,

D'en haut elle sourit à nous qui gémissons.

[Les Contemplations. Liv. V, XIV, Claire P. v. 27—34]

〔大意〕 あの娘は一人前の女になる前に行ってしまった。まだ天使でしかなかったのに。天は彼女の魂を奪って行き、涙にもる私達の眼差しに光の彼女を返してくれるのだ。そして草は彼女の美を奪い、私達に花のあの子を返してくれるのだ。

私達が天使長と呼んでいる星に満ちた存在が、讃歌の真只中では彼女を腕に抱いて、優しく揺り、そして光、立琴、歌に囲まれ、天上から、彼女は呻き声をあげている私達に微笑みかけているのだ。

クレールの遺骸は、一度は静養先であったオートウイユに葬られたが、その最後の願いをきき容れて、サン・マンデの学校の近くに七月十一日、正式に埋葬された。詩人は此の葬列に参加し、参列し得なかったレオポルディーヌの葬儀を偲んで、眼前で埋められてゆく柩は、ジュリエットの娘のものなのか、或いは、彼自身の娘のであろうかとい

う幻覺に襲われた。<sup>(25)</sup>

愛する二人の娘に先立たれ、詩人、劇作家、アカデミー会員、上院議員、しかも王の寵臣であるヴィクトル・ユゴは、地上で呻き声を上げていたのである。日々の華かな生活も何の役にも立たなかった。とすれば、わずかな慰みは、肉体でしかなかった。一八四七年から亡命までの間、彼は新鮮なる女体をむさぼるようにして食べた。

友人、エミール・ジラルダンの愛人、エステル・ギモンに続いて、詩人テオフィール・ゴーチエ、画家シャセリオ、それに自分の息子シャルルの三人を向うに廻してヴァリエテ座の女優、アリス・オズイを征服した。オズイについて、ユゴは次のような挿話を自らの手で書いています。

一八四八年の二月革命の日、群集でどった返すコンコルド広場で、「緑色のピロードの帽子を被った美しい娘さんが魅力的な脚の上に、スカートを無闇に捲くり上げて<sup>(26)</sup>」のを見た詩人は夜食をとり、オズイの家に立寄った。折しも居合わせた情夫シャセリオの前で、アリスは服の前を開け、「詩人達が歌い、銀行家が買いに来る素晴らしい乳房の一つを<sup>(27)</sup>」詩人に見せ、「テーブルに足をのせて、まくれた服が、透き通る絹の靴下をはいた世界で一番美しい足をガーターの所まで見せてくれた。」と<sup>(28)</sup>。

その他、大根女優ジョゼフィヌ・ファヴィル、社交界の花形ロジェ・デ・ジュネット夫人、窃盗の前科のある女優志願のエレーヌ・ゴサン、女流詩人ルイズ・コレ、情熱の女ナタリー・ルヌー、火遊びの好きなロール・デプレ、コメディ・フランセーズ座員シルヴァニ・プレシィ、自称伯爵夫人デュ・ヴァロン、及びその娘テオドリヌ、悲劇女優ラシエル、等々が詩人のニンフになっていたのである。<sup>(30)</sup>

レオニ・ドネは、離婚後、その日暮しの惨めな生活に落ち入り、同情を寄せるユゴ夫人の援助などを受けていたが、遂に、ユゴ夫人と共同の敵ジュリエットに、詩人から受け取った最も熱烈な恋文を、小包にして送り届けた。一八五



一年六月二十八日、これを受けとったジュリエットは、天地も動転せんばかりの驚愕のため、真剣になって、詩人の訣別を決意した。詩人は、当時、クレールという名の少女とも密かに通じていたが、この名が、詩人にジュリエットとの神秘的な結婚を想い起させはしなかったであろうか？ ジュリエットの決意を知って驚いたユゴは、レオニとの離別を誓い、三九年の誓いを再び繰返しはしたものの、その実、年老いた恋人の目を盗んではレオニの許に通い続け、その帰りにクレールとの密会を重ねていたのである。これが、もう一度、ジュリエットの耳に入ったら、もはや破壊以外の道はなかった筈であった。折良く、五一年十一月二日のクー・デタがすべてを一掃してくれた。レジスタンス委員に選ばれたユゴが、身の危険を冒し、危い場所に入出するようになった時、我が身を忘れて詩人の身辺を護ってくれたのはジュリエットであった。彼女無くしては、詩人の生涯も、或いは、その時に終っていたかも知れないのである。とも角、亡命という巨人が詩人を政治家の多忙な生活と漁色に明け暮れた日常に終止符を打ち、再び思索と詩作の生活に導いてくれたのである。

*Hercule l'alla prendre au fond de son terrier,*

*Et l'amena devant Jupiter par l'oreille.*

[Prologue. v. 74—75]

〔大意〕 エルキュールは、巢窟の奥に半神獣を捕えに行き、ジュピテルの前に耳を掴んで、連れて行つた。

## 第一部 青 空

エルキュールに捕えられた半神獣が、ジュピテルを始め、諸々の神々が住むオリンポスの山頂、天上の世界にひき

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

立てられて来た時、その黎明の美しさにただ茫然としてしまふのである。

Quand la satyre fut sur la cime vermeille,

Quand il vit l'escalier céleste commençant,

On eût dit qu'il tremblait, tant c'était ravissant !

Et que, rictus ouvert au vent, tête éblouie

A la fois par les yeux, l'odorat et l'ouïe,

Faune ayant de la terre encore à ses sabots,

Il frissonnait devant les cieus serrens et beaux ;

Quoique à peine fût-il au seuil de la caverne

De rayons et d'éclairs que Jupiter gouverne,

Il contemplant l'azur, des pléiades voisin ;

Béant, il regardait passer, comme un-essaim

De molles nudités sans fin continuées,

Toutes ces déités que nous nommons nuées.

[Le Bleu. v. 76—88]

〔大意〕 半神獸は、朱色に輝く山頂に到着し、天上に連なる梯子が始まるのを見た時、身体を震わせているようだった。それ程、それはうっとりさせられるものだったのである。口を風に向って大きく開け、頭は、視覚、嗅覚、聴覚に同時に眩惑されてしまい、木靴にはまだ土をつけたままの半神獸は、静かな、美しい空を前にして、おののいているかのようだった。ジュピテルが支配している光線と閃きの洞窟の入口に、やっと辿り着いたばかりだというのに、彼は、スバル星座の近くにあつて蒼穹をじっと見つめていた。ぼかんと口を開け、絶え間なく続く、柔かい裸形の群のような、雲と呼ばれている女神すべてが、

通つて行くのを凝視していた。

特に、この最後の二行は、フェルナン・グレッグが指摘しているように、朗々たる響きといい、リズムといい、また「e」の音が交叉し、繰返され、続々と現れる雲の様を、絶妙とも云える音楽で描き出している。<sup>(1)</sup>

C' était l'heure où sortaient les chevaux du soleil ;

Le ciel, tout frémissant du glorieux réveil,

Ouvrait les deux battants de sa porte sonore ;

Blancs, ils apparaissaient formidables d'aurore ;

Derrière eux, comme un orbe effrayant, couvert d'yeux,

Éclatait la rondeur du grand char radieux ;

On distinguait le bras du dieu qui les dirige ;

Aigülon achevait d'atteler le quadrige ;

Les quatre ardents chevaux dressaient leur poitrail d'or ;

Faisant leurs premiers pas, ils se cabraient encor

Entre la zone obscure et la zone enflammée ;

De leurs crins, d'où semblait sortir une fumée

De perles, de saphirs, d'onyx, de diamants,

Dispersée et fuyante au fond des éléments,

Les trois premiers, l'œil fier, la narine embrasée,

Secouaient dans le jour des gouttes de rosée ;

Le dernier secouait des astres dans la nuit.

[Le Bleu. v. 89—105]

〔大意〕 太陽の馬の出発の時だったのである。天空は、この光榮に満ちた眼覚めに身が震えるのを感じながら、よく響く、その扉の二つの開き戸をあけつつあった。それらは、皓々と輝き、曙の光を浴びて恐ろしい様相を呈していた。その後には、数々の視線に包まれ、身の毛もよだつ球体のように、光り輝く大馬車の円のみが閃光を放っていた。かれらの先導となる神の腕が、はつきりと見られた。北風アキロンは四頭立の二輪馬車を鑿駕し終った。炎を上げている四頭の馬が黄金の鞍を立てた。かれらは、その最初の歩みを進めながら、暗い地帯と炎を上げている地帯との間で、まだ後脚で立ち上っていた。真珠、サファイア、メノウ、ダイヤの、散り散りに、物質の根元の奥底に逃げゆく煙が一条立ち昇っているかのように見えるそのたてがみから、始めの三頭は、誇らしげな眼、燃えるが如き鼻の孔をして、露の滴<sup>しずく</sup>を目の光の中に振り飛ばしていた。最後の一頭は、夜の闇の中で、星々を揺っていた。

だがこの一隅には、恐ろしい武器を持った神々が見張っていた。半神獸は、内心の驚愕と恐怖を隠そうともせず、一面に敷きつめられた敷物のような青空を一步一步、引き裂くようにして、耳を掴まれたまま歩いていく。

Il boitait, tout gêné de sa fange première ;

Son pied fourchu faisait des trous dans la lumière,

La monstruosité brutale du sylvain

Étant lourde et hideuse au nuage divin.

Il avançait, ayant devant lui le grand voile

Sous lequel le matin glisse sa fratche étroite ;

[Le Bleu. v. 127—132]

〔大意〕 彼は、地上からつけて来た最初の泥に妨げられ、びっこをひいていた。偶蹄の足は光の中に穴をあけていた。というのは、この半神獸の荒々しい奇怪さは、神の雲には重く、またおぞましかったからである。彼は目の前に、朝が、その爽かな

星をその下に滑り込ませる大きな被いをつけて、進んでいた。  
突然、半神獣は光の波に身を屈めると、彼の眼を覆っていた夜の被いが急に取られ、恐ろしい神々の歓楽の場面を見ただのである。

Sur douze trônes d'or que Vulcain cisela,

A la table où jamais on ne se rassasia,

Ils buvaient le nectar et mangeait l'ambrosie.

[Le Bleu. v. 138—140]

〔大意〕 神々は火と金属の神ヴェルカンが彫金した黄金の十二の王座に坐り、決して満腹する事のないテーブルについて、美酒を飲み、不老長寿の食物を食へていた。

これらの神々が、ネクターの美酒を酌み交す盃は、

…une coupe d'or

Pure à mouler dessus un sein de jeune fille.

[La Légende des Siècles : IV. Entre Géant et Dieux. IV. Le Trian. I. Sur l'Olympe, t. I. p. 67]

〔大意〕 乙女の乳房の上で鑄られた純金の盃

であったろうし、食べているものは、オリンポスの神々を不老長寿にしたといわれているが、傲れる神々は、又、

Ils décorrent l'amour, l'âme, la chair, la femme,

Le bien, le mal, le faux, le vrai, l'imensité.

.....  
Comme ils savourent

La gloire d'être grands, d'être dieux, d'être seuls !

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

[Opus. cit. p. 66—67]

〔大意〕 愛を、魂を、肉を、女を、善を、悪を、虚偽を、真実を、無限を貪り食べている。……彼らは、偉大であり、神々であり、彼らだけである光榮を、何とゆっくり味わっている事か！

これらの神々の間でも、ヴェニユスとジュピテルが特に光り輝いていた。

Vénus était devant et Jupiter au fond.

[Le Bleu. v. 141]

〔大意〕 ヴェニユスは前に、ジュピテルは奥にいた。

Cypris, sur la blancheur d'une écume qui fond,

Reposait mollement, nue et surnaturelle,

Ceinte du flamboiement des yeux fixés sur elle,

Et, par moments, avec l'encens, les cœurs, les vœux,

Toute la mer semblait flotter dans ses cheveux.

[Le Bleu. v. 142—146]

〔大意〕 キプロス島生れのヴェニユスは、溶けゆく水泡の真白き上に、物憂げに、一糸まとわず、この世にあるとも思われず、釘づけにされた眼の炎に取囲まれて、休息していた。時としては、芳香、心、願いと共に、海全体が、彼女の髪の毛の中に揺れ浮んでいるようであった。

ニゴは、このヴェニユスの姿を描きながら「テレーズ家の宴」で帆立貝の中に艶めいて姿を現わしたヴェニユスを想起しなかつたであろうか？

…*Colombine dormait dans un gros coquillage,*

*Et, quand elle montrait son sein et ses bras nus,*

*On eût cru voir la conque, et l'on eût dit Vénus.*

[*Les Contemplations, Liv. I, XXII, La Fête chez Thérèse, v. 34—36*]

〔大意〕コロンビーヌは大きな貝殻の中で眠っていた。そして彼女が、一糸まとわぬ胸と腕を見せた時、帆立貝を見たのかと  
思われたし、ヴェニエヌのようでもあった。

美の女神の後には、すぐジュピテルが現れる。ユゴはこのジュピテルの肖像を欠かす訣にはいかなかった。これこそは、詩人自身の天上界に於ける肖像であるのだから。

Jupier aux trois yeux songeait, un pied sur l'aigle ;

Son sceptre était un arbre ayant pour fleur la règle ;

On voyait dans ses yeux le monde commencé ;

Et dans l'un le présent, dans l'autre le passé ;

Dans le troisième errait l'avenir comme un songe ;

.....

Selon qu'ils s'écartaient ou s'approchaient, au gré

De ses décisions élémentes ou funèbres,

Son pouce et son index faisaient dans les ténèbres

S'ouvrir ou se fermer les ciseaux d'Atropos ;

La radieuse paix naissait de son repos,

Et la guerre sortait d'un pli de sa narine ;

Il méditait, avec Thémis dans sa poitrine,

Calme, et si patient que les soeurs d'Arachné,

抱纏「斗婁蘇」の蜘蛛を模倣（参三）

Entre le froid conseil de Minerve émané

Et l'ordre redoutable attendu par Mercure,

Fiaient leur toile au fond de sa pensée obscure.

[Le Bien. v. 147—151, et v. 162—172]

〔大意〕 三つの眼をもつジュピテルは、片足で鷲を踏んまえ、夢想していた。その王杖は、花の代りに規律をもっている一本の木であった。彼の眼の中には、始められた世界が見られた。一つの眼には現在が、もう一つの眼には過去が。そして第三の眼には未来が夢のように彷彿していた……彼ら（ギリシャの初めの教化者で、栄光を与えられたカドムスと、義父を殺し、その上ジュノンに恋して永久に廻っている火の車に縛りつけられたイグジオン）が、彼の寛大な、或いは不吉な決定のままに、お互いに遠ざかったり、近ずいたりするに従って、彼の親指と人差指とが、闇の中で、人間の運命の糸を切るアトロポスの鋸を開かせたり、閉ざさせたりしていた。光り輝く平和は、彼の休息から生れ、戦争は、彼の鼻の皺から出て来た。彼は、胸に抱いている正義の女神テミスと共に、静かに、非常に辛抱強く想を廻らせていたので、クモに変えられたアラクネの姉妹達は、ミネルヴァから出される冷酷な意見と、メルキュールが待ちうけている恐ろしい命令の間において、彼の知り難い考えの奥で、巣を張っていた。

半神獸は、これらの神々の前に、山をも割るといふエルキュールの手に耳を掴まれ、天の青い石畳の上で、突き放されたのである。

… Et l'on vit apparaître le faune,

Hérissé, noir, hideux, et cependant serein,

Pareil au bouc velu qu'à Smyrne le marin,

En souvenir des prés, peint sur les blanches voiles ;

L'éclat de rire fou monta jusqu'aux étoiles,



Si joyeux, qu'un géant enchainé sous le mont  
Leva la tête et dit : « Quel crime font-ils donc ? »

[Le Bleu. v. 212—218]

〔大意〕すると、船乗りが、トルコの港スミルヌで、草原の想い出にと、白帆の上に書いてゆく、毛むくじャらの山羊に似て、毛が逆立ち、真黒で、ひどく不恰好な、だが平靜な半神獣の姿が現れるのが見えた。気違いじみた洪笑の爆発が星々に達する程、天上高く登って行つた。それがあまりにも陽気な笑だったので、山の下に繋がれている巨人が頭をもたげ、「一体、彼らはどんな悪事をしているのであろうか？」といつた。

詩人は、レオニ・ドネ、即ち前ピアール夫人との姦通現行犯として現場を襲われた時に浴せられたバリ中の嘲笑を思い起してはいなかったであらうか？

Les déesses riaient toutes comme des femmes ;

Le faune, haletant parmi ces grandes dames,

Cornu, boiteux, difforme, alla droit à Vénus ;

L'homme-chèvre ébloui regarda ses pieds nus ;

Alors on se pâna ; ……

[Le Bleu. v. 231—235]

〔大意〕女神も皆、ただの女達のように笑つていた。これらの高貴な婦人達の中で喘ぎながら、角を生やし、びっこで不恰好な此の半神獣は、まっすぐヴェニユスの処に行つた。その羊人は、目もくらむ思いで、その裸足の脚をじつと眺めた。その時、皆は腹を抱えて笑つた。

神々の抱腹絶倒が、このならず者の半神獣を救つたのである。

—Fanne, dit Jupiter, le grand amphictyon,

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

Tu mériterais bien qu'on te changéât en marbre,  
En flot, ou qu'on te mit au cachot dans un arbre ;  
Pourtant je te fais grâce, ayant ri. Je te rends  
A ton autre, à ton lac, à tes bois murmurants ;  
Mais, pour continuer le rire qui te sauve,  
Gueux, tu vas nous chanter ton chant de bête fauve.  
L'Olympe écoute. Allons, chante.》

[Le Bien. v. 250—256]

〔大意〕——半神獸よ、と偉大なるアンフィクテオン会議員であるジュピテルが言った。たしかにお前は、大理石に変えたり、波に変えたり、或いは又、木の中の牢獄に閉じこめるに値するところなのだ。しかし、笑わせてくれたのだから、お前を赦してやろう。私はお前を、お前の洞窟へ、お前の湖へ、囁いているお前の森へ返してやろう。だが、お前を救った笑いを続けられるように、ならず者よ、我々にお前の鹿子色の獣の歌を歌ってくれ。オリンポスが聴いているのだ。さあ歌え！

山羊の脚の半神獸は、エルキュールが洞窟に入ってきた時に壊してしまった野笛が無くては、簡単に歌う事が出来ない、まず、エルキュールの横暴さに非難を浴せた。メルキュールが貸してくれたフリユートを持つと、眼前の神々を全く無視した顔付で、神秘的な歌を歌い始めるのである。

## 第二部 暗 黒

Le satyre chanta la terre monstrueuse.

L'eau, perfide sur mer, dans les champs tortueuse,  
Sembla dans son prélude errer comme à travers  
Les sables, les graviers, l'herbe et les roseaux verts ;  
Puis il dit l'Océan, typhon couvert de baves,  
Puis la Terre lugubre avec toutes ces caves,  
Son dessous effrayant, ses trous, ses entonnoirs,  
Où l'ombre se fait onde, où vont des fleuves noirs,  
Où le volcan, noyé sous d'affreux lacs, regrette  
La montagne, son casque, et le feu, son aigrette,  
Où l'on distingue, au fond des gouffres inouïs,  
Les vieux enfers éteints des dieux évanouis.  
Il dit la sève ; il dit la vaste plénitude  
De la nuit, du silence et de la solitude,  
Le fronnement pensif du sourcil des rochers ;

[Le Noir. v. 279—293]

〔大意〕 半神獣は怪物のような大地を歌った。海上では逆巻き、野の中では曲りくねって流れる水は、彼の前奏曲の中では、砂、砂礫、草や緑の葦の間を流浪するかのよう彷徨しているように見えた。次に彼が口にしたのは、誕まみれの旋風である海、次いで、地下倉、そっとさせる下部、洞穴、漏斗状の窪地のある陰惨な大地。そこでは闇が波になり、暗黒の川がそこへそそぎ、恐ろしい湖の下に洗んだ火山が、兜である山と、羽飾りである火を懐かしみ、前代未聞の淵の奥底には、消え去った

神々の、火の消えた昔の地獄を識別する事が出来るのだ。彼は樹液を語った。彼は、到る処に広く充満している、夜、静寂、孤独を、考え深げに眉をしかめている岩々を口にした。

ヴィクトル・ユゴは一八〇九年からの約二年と、一八二二年からの約一年を、フィアンティヌの古い僧院で過した。「子供の頃の自分自身が目に見えるようだ。よく笑う元気な小学生で、この庭の広い緑の小径で、兄達と遊び、駆けっこをし、笑いこけている。そこで私の幼時の幾年かが流れ去ったのである。昔は修道女達の塀で囲まれた庭であったところで、上には、ヴァル・ド・グラースの黒ずんだ円屋根の鉛の頭が聳えている。」<sup>(1)</sup>

この広大な庭が、詩人の真の教師となり、彼に自然を教えたのである。

*J'eus dans ma blonde enfance, hélas ! trop éphémère,  
Trois maîtres : — un jardin, un vieux prêtre et ma mère.*

*(Les Rayons et les Ombres ; XIX. Ce qui se passait aux Feuillantines vers 1813. v. 19—20)*

〔大意〕 ああ、あまりにも短かった私の金髪（金髪）の幼時に、私は三人の先生をもっていた。それは庭と老いた僧（僧）と母であった。この庭で、エゴは美しく、又恐ろしい自然を学びとったのである。彼はそこで、金鳳花（金鳳花）、雛菊、猿日草などの可憐な草花を愛し、りすなどの動物が小鳥を捕って食べ、小鳥は虫を、虫はお互いに殺し合い、食べ合うのをまざまざと見たのである。

*... Lorsque j'étais enfant, envié par les mères,*

*Libre dans le jardin et libre dans les bois,*

*Et que je m'amusaïs, errant près des chamnières,*

*À prendre des bourdons dans les roses tremières*

[Toute la Lyre, V. V. n. 21—25. t. II. p. 16]

〔大意〕 僕が世の母親たちに羨まれる子供で、庭の中、森の中で自由だった頃、また、僕が茅屋の近くを彷徨い歩きながら、立葵の花の中の蜂を、急に花を指で閉めてしまつて、捕えて喜んでいた頃。

これら、森羅万象の殺戮戦が、この早熟な子供を夢の世界に誘つたのである。ユゴ兄弟は、父親から、時として精神を錯乱させるような、大きな想像力を受け継いでいたので、その庭にある古井戸の中には、色黒く、毛むくじやらで、ぬるぬるし、膿の入っているかさぶたが一杯ついている怪物が住んでいと想像し、これを「壘」と名づけ、お互いを怖がらせては喜んでいた。

父親から受け継いだ、この狂気の幻想が、一八二二年に、兄ウヂェーヌの発狂の原因となつた事は、疑う余地もない事である。後年、ヴィクトル自身も、発狂の恐怖に襲われる事が屢々あつたが、その人並みはずれた体力と、数え切れぬ程の情事に助けられ、発狂をまぬかれたのである。詩人は、幻想の世界について、次のように書いています。

「すべての夢想家は、己れの内に、この想像の世界を持っている。この夢の頂が、あらゆる詩人の頭蓋骨の下にあるのは、山が空の下にあるのと同じ事なのである。これは幻想の筆舌に尽し難い動きに満ちた、縹渺とした王国である。……一時的にか、または幾分かの不条理な心的傾向は、個人にも、又一国民にとつても、決して稀な事ではない……」<sup>(3)</sup>

「時として、一つの時代が狂気である事がある。ルネッサンスは三世紀に亘つて、ヨーロッパに異教の狂気を与えた……」<sup>(4)</sup>

「ただ、この事を忘れてはならない。即ち、夢想家は夢よりも強くなくてはいけない、という事である。さもない

くば危険である。可能は、どんなものか良く判らぬような神秘的な怒りがなければ、現実には近づかないものなのである。ある頭脳が幻想に嚙られてしまう事だって、有り得るのだ。……」<sup>(5)</sup>

「我々が人の精神の上に投影されたその影を見せている夢想のこの岬を、古代オリンポスは殆んど目に見えるものにしてれていた。オリンポスの中では、夢の頂が現れる。人間の思考に個有の幻想は、一度もこれ程までには、思いのままの形にはなし得なかった。神話の夢は、形式決定によって、殆んど手でさぐれるものになった。<sup>(6)</sup>」

これは、ユゴの神秘主義である。

詩人がフイアンティースで見出したもう一つのもは、聖書である。

…*Nous montrions pour jouer au grenier du couvent.*

*Et là, tout en jouant, nous regardions souvent*

*Sur le haut d'une armoire un livre inaccessible.*

*Nous grimpdames un jour jusqu'à ce livre noir ;*

*Je ne sais pas comment nous fimes pour l'avoir,*

*Mais je me souviens bien que c'était une Bible……*

…*Nous l'ouvrimes alors tout grand sur nos genoux,*

*Et dès le premier mot il nous parut si doux*

*Qui oubliant de jouer, nous nous mîmes à lire.*

*Nous lames tous les trois ainsi, tout le matin,  
Joseph, Ruth et Booz, le bon Samaritain,  
Et toujours plus charmés, le soir nous le relames.*

[*Les Contemplations. V. X. Aux Feuillantes. v. 7—12. et v. 16—21*]

〔大意〕 僕は遊ぶために、その僧院の屋根裏部屋に登って行った。そして、そこで遊びながら、屢々洋服筆筒のついている近づき難い一冊の本を眺めていた。

僕はある日、この黒い本の処までよじ登って行った。僕は、どんな風にして、それを手にしたか、わからない。しかし、それが聖書であった事は、よく憶えている。……

当時僕達の膝の上で、はともて大きかったその本を開けた。すると、それは、始めの言葉から僕は、とても甘美なものに思われたので、遊ぶのも忘れて、読み始めた。

僕は、このようにして、三人揃って、朝から、ヨセフ、ルツとボアズ、善良なサマリヤ人の事を読み、そして夜には、いつも、ずっと魅了されてしまつて、読み返した。

聖書は詩人にとって、数限りない靈感の湧き出る泉であつた。しかし、彼は決してキリスト教徒ではなかつた。幼年時代を母だけに育てられたので、ユゴは母の宗教を受け継いだ、……といふのは、母ソフィーは、特に何の宗教も持っていないのであり、強いていへば、ヴォルテール流の、極めて合理的な信仰、つまり、撰理なき神への信仰があつただけなのである。このような母に育てられ、生れるとすぐ、軍人だつた父の任地の後を追つて、各地を転々

としなければならなかったヴィクトルは、洗礼すら受けていなかった。彼が受けた唯一のカトリック教育といえ、マドリッドに於ける、貴族学校存学中のそれだけであるが、反抗期にあったヴィクトルの感受性をどれだけ動かしたかは疑問である。

一八二〇年からの数年間は、シャトーブリアンとラ・ムネの直接の影響下にあつて、カトリックに傾いたが、それも所詮は文学の上だけの事であり、キリスト教の正確な教理を誰にも教えられぬままに、自由に聖書を読み、自己流の解釈を下し、そこに詩の靈感を汲みとっていたのである。しかし、この事は、詩人が何の宗教も持たなかった事の証しにはならない。ユゴの魂は、真底から宗教的であつた。彼は神の存在を信じていた。このような心的傾向は、いわば先天的なものであり、かなり早くから、詩人というものは、神から直接に委任されて、世の先導をするものだ、という理念を持っていたのである。この理念は、十九世紀始めから、ロマン派の詩人には一般的なものであつた。シャトーブリアンは、「ルネ」（一八〇五年）の中で、

「これらの歌人は神の種族であり、彼らは天が地に対する贈物として卓越した唯一の才能を持っているのである。……彼らは神々の如く語り、……死について驚嘆すべき思想をもっている。」

と述べている。同じ思想から、ヴィニイは、哲学小説「ステロ」（一八三二年）と劇「チャッタートン」（一八三五年）を、ラマルチースは、詩「天使の失墜」（一八三八年）を書いている。ユゴ自身も、一八二一年には、既に「革命の中の詩人」を書き、詩人の使命を説いている。

*Le mortel qui un Dieu même anime*

*Marche à l'avenir, plein d'ardeur ;*

*C'est en s'élançant dans l'abîme*



Qu'il en sonde la profondeur.

Il se prépare au sacrifice ;...

[Odes et Ballades, Livre 1<sup>er</sup>. Ode 1<sup>er</sup>. Le poëte dans les révolutions. v. 71—75]

〔大意〕 神自身が活動力を与える人間は、情熱に身をたぎらせて未来へ向つて進むのだ。彼は、深淵の中へ自ら飛び込んで行って、その深さを測っているのだ。彼は、自らを犠牲にする心構をしているものなのだ。

また、恐らくユゴは、非常に早くから、自分の救世的な役割への信仰を証明するために、宇宙の概念、宇宙開闢論を作り上げようと努力していたに違いないのである。一八五三年には、完成すれば「解明論」と題される筈だった、未完成の著作に二、十五年前にとりかかった、と断言している。<sup>(8)</sup> 詩集「秋の木の葉」の中の「山上で聞く事」或いは「夢想の坂」<sup>(10)</sup> というような詩篇が、この神秘的苦心を解き明してくれるのである。彼はその後、靈魂の神秘、物の神秘に関する瞑想につきままとわれていた。一八三〇年以前に、既に詩人の思考の中で一つの形をなしていた詩人自身の象徴「オランピオ」<sup>(11)</sup> が、一八三〇年の始めには、目に見える此の世界と、それを超越している他の世界との関係を考え始めていたのである。彼は、真の世界は隠されていて、我々の感覚の届かない所にあるので、人は神の許に行く事が出来ない。故に、無限の真実を夢想する者にとって、現世の幻滅が何になるのだ、と考えた。これは、一八三〇年以前の自負の時代が去り、最愛の妻アデルと親友サント・ブーヴの裏切りが、そして、その妻を、ひそかに深く愛していた兄ウヂェーヌの発狂の想い出が、更に、批評家達の辛辣な誹謗が、孤独になった詩人の眼差しを、心の奥に向けさせたからなのである。

« Où cent flèches, toujours sifflant dans la nuit noire,

    S'enfoncent tour à tour,

Chacun cherchant ton cœur, l'un visant à la gloire,

詩篇「半神獸」の背景と意義 (杉山)

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

三八四

*Et l'autre à ton amour !*

[*Les Voix intérieures. XXX. A Olympio. v. 37—40*]

〔大意〕そこには（お前の人生には）百本の矢が、真暗な闇の中を、いつも風を切る音を立てながら、かわるがわるに深く突きささり、その一本一本はお前の心臓を探し求め、一本はお前の榮光に、他の一本は、お前の愛に突きささるのだ。この幻の友の忠告に対して、オランピオは答えるのだ。

《*Pour juger un destin il faudrait connaître*

*Le fond mystérieux ;*

*Ce qui git dans la fange aura bientôt peut-être*

*Des ailes dans les cieux !*

[*Ibid. v. 113—116*]

〔大意〕運命を裁くには、その神秘なる奥底を知る必要があろう。泥の中に横たわっているものでも、間もなく、おそらくは、天上に於いて翼を得るであらう。

そして更に、

《*Ne me console point et ne t'afflige pas.*

*Je suis calme et paisible.*

*Je ne regarde point le monde d'ici-bas,*

*Mais le monde invisible.*

[*Ibid. v. 225—228*]

〔大意〕私を慰めるのは止めてくれ、君自身も悲しまないでくれ。私は平静で安らかな気持なのだ。私が眺めているのは、この下界ではなく、目には見えぬ世界なのだ。

この未知の世界と結びつくために、詩人は最もつましい、最も人間的な手段、「祈り」に頼ったのである。

ヴィクトル・ユゴ夫人は、「ヴィクトル・ユゴを語る」<sup>(12)</sup>の初稿の数行に、——これは決定稿では削除されたが——こう述べている。

「……彼は、夜お祈りをする事を一度も欠かした事はない。魂を天空に逃がし、神秘と語ろうという無限への旅は、一日が終った時、彼にとつては己むに止まれぬものであり、仕事が終わった時には、御褒美なのである……」<sup>(13)</sup>

このユゴの内面の危機と時を同じくして、一八三〇年の革命が起った。この革命によって、貧民階級の問題がクローズ・アップされ、社会悪の問題が姿を現わし、色々な疑問が一層大きくなり、哲学、宗教の悪にまで問題が進み、到る処に、不安、疑惑、流言蜚語が充滿していた。ほんのわずかな動揺にも敏感に高い響きを発する「響くこだま」<sup>エコー・ソニール</sup>が、これらの息吹きを感じないわけはなかった。詩人は希望に生きる人ではあったが、同時に疑を懐く人でもあった。深く考える事は疑を懐く事である。スペインの諺に曰く「考えるは疑う事なり」と。

*Quand un matin le sort, qui nous a dans sa serre,*

*Nous mettant face à face avec notre misère,*

*Nous jette brusquement, lui notre maître à tous,*

*Cette question sombre : —Ame, que croyez-vous ?*

*C'est l'hésitation redoutable et profonde*

*Qui prend, devant ce sphinx qu'on appelle le monde,*

*Notre esprit effrayé plus encor qui' ébloui,*

*Qui n'ose dire non et ne peut dire oui !*

[Les Voix intérieures. XXVIII. Pansar, Dudar, v. 9—16]

「大意 ある朝、爪でしかと我々を掴んでいる運命が、我々を、我々の惨めさの面前に置き、急に、我々すべての者の主であるその運命が、この測り知れぬ質問、「靈魂よ！ 君は何を信じているのか？」——を投げつける時世界と呼ばれているこのスフィンクスの前で、あえて「何も信ぜず」ともいえず、「何ものかを信ず」という事も出来ぬ、眩惑されているより更におびえている我々の精神を襲うのは、恐しく、深い躊躇である。

一八三三年、始めは、一時の欲望を満たすだけのつもりであった詩人と、詩人からよい役を貰うだけのつもりであったジュリエット・ドゥルエ嬢が、真心から愛し合うようになる。詩人はこの女優の過去に深い嫉妬を感じて苦しみ悩んだ。彫刻家ブラディエ、イタリヤの彫刻家バルトロメオ・ピネリ、劇場支配人、フェリッククス・アレル、三流文士アルフォンス・カール、画家で舞台装置家のシャルル・セシャン、ロシヤ貴族のドゥミドフ公爵という多数の男性を遍歴して来たジュリエットは、相変らず贅沢な品物を欲しがり、莫大な借金を詩人に隠し、債権者の取り立てが激しくなると、進退きわまると、一つ一つそれを打ち明けるといふ有様だったのである。ユゴは彼女の過去を憎んだ。のみならずジュリエットの不手際も手伝って、彼はこの女優の現在までも疑うようになっていた。何の関聯もなく、幸福の絶頂から絶望のどん底に突き落され、彼女の過去を根ほり葉ほり糾問しては、口喧嘩になり、荒々しい言葉で、お定まりの、愛の終局を宣言しては、またすぐ詫びるといった事の連続で詩人は極度に疲れていた。このような危機の連続は、一八三四年八月二日に、ジュリエットが、長い間隠していた借金を告白した事から、殆んど決定的な危機に到達した。ユゴは彼女への援助を拒み、彼女は自殺をしようか、あるいは、まだ二人で救う事が出来るかも知れないこの恋を救うために、一時姿を隠そうかと迷った挙句、後者を選んだ。その翌日、ジュリエットは、娘のクレール・ブラディエを連れて、 prest の近くに住んでいる姉の家に身を寄せるために、パリを出奔した。詩人は、その後を追いかけるようにして、詫びと後悔と愛を書き綴った手紙を送り、ジュリエットは途中の宿場宿場から、これまた

愛の手紙を詩人に書き送った。ユゴは、ジュリエットの借金を支払うだけの金を何とか苦面し、八月九日には恋人の後を追ってブルターニュに向った。 prestで馬車を棄て、彼女を説得するのに苦勞はいらなかった。詩人は自ら捕われの身となったジュリエットと共に、パリに帰って来た。以後、ユゴはジュリエットの未来と共に過去をも一緒に受入れようと決心をしたのである。禁足生活と教育がすぐ始められた。彼はジュリエットを自分の夢に合わせた鋳型に入れて、愛の光で正しく導き、自分だけに縛りつけ、神様のように彼女を作りかえようとした。彼女の忌むしい過去は、たとえ借金という形で残っているものを清算する事は出来たとしても、全部消してしまふ事は不可能である。とすれば、一つの奇蹟が必要である。ジュリエットは、真心から罪の贖いを誓い、特に眞実の愛によって、偽りの愛で汚された自分を再生させる事を誓ったのである。ユゴは彼女を信じ、すべてを純化する愛の炎で二つの魂を銚け合らし、彼女と共に彼も又狭量な偏見や、薄汚ない嫉妬を見下せる高所に登っていったのである。このようにして、一日また一日と、新しい過去が古い過去の上に積み重ねられて行つた。

この贖罪の理論は、本質的に神秘的なものである。愛が力を持つためには、絶対でなければならぬ。故に、己れの罪を贖わんとする者は、愛の前に従順でなくてはならない。また、苦惱が人を清らかにし、強固にするという法則を、詩人は未だ公けに発表されていない、次のような対聯の句で表わしている。

*Fais passer ton esprit à travers le malheur.*

*Comme le grain du crible, il sortira meilleur.*<sup>(17)</sup>

〔大意〕 お前の精神を、不幸の中をくぐらせなさい。穀粒が篩を通ると、もっと上等になって出て来るであらうように。

ジュリエットは、エシキエ街のアパートを離れ、家具などを売ったり、差し押えさせたりして、借金の一部の返済にあて、バラディ街の三部屋のアパルトマンに移り、そこで一年八カ月ばかり過した後、ユゴのロワイヤル広場の

家に程遠からぬ、サン・タナスターズ街に家を見つけて、そこに移り住んだ。そこで、ジュリエットは家事一切を自らの手でやりとげ、詩人の下着を繕ったり、着物を縫ったり、或いはまた、原稿の清書にいそしんで詩人の良き助手となり、支出を切りつめて、忠実にその記録をつけたりする、以前とは打って変った清らかな生活が始まったのである。

ユゴ一家は、一八三一年以来、夏になると、「デバ」紙編集長ルイ・フランソワ・ベルタンのビエール渓谷の中のレ・ロッシュの邸に滞在する習慣であった。三四年の危機の直後には、ユゴがレ・ロッシュに滞在している間は、メッスの農家の一部屋を借り、そこにジュリエットを住わせる事になった。彼女と共に見る丘、木々、草花、小鳥、泉すべての自然は生き生きと輝き、生命あるもののように二人に話しかけて来た。時として、森の真中で二人が身をひそめる木の葉の部屋の中で、ユゴはジュリエットに、二人の自負の支えとなる精神的な教訓を授ける事があった。

「私は一生涯、あなたの優しい心尽しの言葉と、教えの言葉を耳から離しません。あなたは私に自然と自然を通して神の偉大さと慈悲とを説き明かして下さいました……」<sup>(15)</sup>

詩人のパンテイスムの思想が、ここにははっきり見られる。

一八三六年、ユゴはユダヤ神秘教徒アレクサンドル・ウエイルと親交を結び、両者の関係は、一八五二年、ユゴがブリュッセルに亡命し、ジェルセイ島に渡る前まで続いた。このアレクサンドル・ウエイルという神秘教徒は、一八三〇年にパリに出て来たアルザス生れのユダヤ人で、始めは詩人の崇拜者の一人として彼に近づいたのである。ウエイルは、その著「忘備録への緒言」(一八九〇)の中で、次のように述べている。

「……私は、青春時代には、詩人の熱烈な心酔者であり、彼に現代ドイツ文学とその歴史の生き辞引として仕えたので、彼は私に好意を持ち、私にパリのサロンへの短かい夜の訪問のお供を許してくれた。」<sup>(16)</sup>

この二人は、共通している血氣盛んな肉欲の強さで結ばれ、ユゴが狩獵の神としてサロンに君臨したとすれば、ウエイルはおそらく勢子かお供の役を果したに違いないのである。

「ユゴは」と彼はいつている。「女というものを、その魅力を、またその危険を非常によく知っていた。ドイツの大学街の飲食店でよく口にされるゲーテの少し猥褻な詩句を彼に引用したり、神秘教の女性に関する門外不出の金言を二・三引用すると、彼は私に、決して忘れる事の出来ない、恋に関する正確な観察と、偉大なる獨創性の刻印をきざみつけた忠告を与えた。」<sup>(16)</sup>

ウエイルのユゴに対する成功の秘密は、エホバの前では無に帰する習慣をもっているユダヤ人だけが為し得たように、己れを無にして、詩人の自尊心をくすぐったのである。このようにして、ユダヤの神秘教の奥儀に達した友を持って、詩人の神秘主義的思考体系が徐々に組立てられて行く事になるのである。だが、その思考体系がまだ完全に熱さない内に、いくつかの外的な事件が、彼を瞑想や夢から引き離してしまった。

一八三七年三月、狂氣の兄ウージェーヌが此の世を去り、五月末には、王位継承者であるオルレアン公と、エレヌ・ドゥ・メ克蘭ブルール姫の御成婚の盛大な祭典がパリで開かれた。その祭典は、六月十日、ヴェルサイユ宮殿で、両殿下が主宰される、博物館の開館式で終る事になっていた。このヴェルサイユ宮殿の儀式は、在職の高官達と肩を並べてそこに姿を見せたいと望んでいた文学者の間の対抗意識を一段と激しくした。新聞雑誌は、文学者に差し出された招待状の数の少なさに抗議をした。ヴィクトル・ユゴは、その少い招待状を受けた一人であったが、始めは、これを丁重に断った。しかし、オルレアン公直筆の手紙で再度招待をされ、これを受ける決心をした。ユゴは、この事を決して後悔しなかった。若い妃殿下が、詩人を、大層魅惑的な好意をあらわにして歓待し、あまつさえ、彼に、パリで始めて訪れた教会が「彼の教会」即ち、ハードル・ダム寺院であると告げたり、またビエーヴルの、つつましい教

会についての詩の一節までも暗誦し、彼に讚美の言葉を惜しげもなく浴びせたからである。ユゴは完全に征服されてしまった。と同時に、彼の胸の中に眠っていた政界への野心が、火のように燃え上ったのである。

ヴィニイは「チャッタートン」で大成功を収め、ラマルチーヌが下院を征服しつつある時に、ユゴは己れの価値を一体どういふふうにして確認しようとしただろうか？ 財産も地位もないユゴには、ラマルチーヌのように下院を征服する事は不可能であった。しかし上院はどうであろうか？ 欠員が出来た場合には、特定の団体から上院議員を補充する権限が王に与えられていたのである。そういう団体、例えばアカデミーの如き団体に所属するとすれば、どうであろう？ 一八三〇年に、ラマルチーヌが、このクラシックの金城湯池に穿った穴の割れ目から、彼自身も、もぐり込む事が出来ない筈はない、と考えていた詩人に、オレルアン公妃の厚意は正に百万の味方を得たのにも等しく感じられたのである。だがアカデミーの門はなかなか破れなかった。三六年には、既に二回落選の憂き目にあっていた。だが、人々の精神の代表者である詩人は、物質主義と金権主義にのぼせあがっている時代を救う義務があるのだ。二回の失敗に屈する事なく、四十年に更に一回の失敗を経て、四一年、遂にアカデミーの門を押し破った。詩人の入院式には、オレルアン両殿下の臨席という異例の景物までつき、その上、ユゴの初演説は殆んど政治の事で終始したのであった。

一八四三年夏、レオポルディーヌの悲劇的な死が、詩人を完全に打ちのめしてしまった。始めはただ諦観の中に身を潜める事のみを想った。「あきらめよう！ あの子は天使だったのだ。神様にお返しするのだ……」<sup>(18)</sup>しかし諦め切る事は出来なかった。死というものが、青春に、そして美しいものに襲いかかるなどという事があってもよいのか？

*Es-tu belle ? Va-t'en. Es-tu joyeuse ? Meurs.*

*O sinistre destin des roses !*



〔大意〕 お前は美しいか？ 行ってしまいなさい。お前は楽しいのか？ 死んでしまいなさい。おおバラの不吉な運命よ！

当然の事だが、逝った娘と残され者の年令を知らず知らずの内に比べているのだった。

… *Et pourquoi ce vent qui m'oublie et l'emporte,*

*Elle, la feuille verte, et moi, la feuille morte ?*

… *Hélas, ô dure mort, pourquoi me l'as-tu pris ?*

*Pourquoi ses cheveux noirs, et non mes cheveux gris ?* (20)

〔大意〕 ……して何故に、私を忘れ、あの子を連れて行くこの風なのか？ 娘は緑の若葉であり、この私は枯れ葉だというのに！

……悲しい事だ、おお非情な死よ！ 何故お前はあの子を私から奪って行ったのだ？ 何故、私の灰色の髪の色でなく、あの子の黒髪なのだ？

この悲歌の中から、それでも一縷の希みが生れて来た。レオポルディーヌのいる、彼岸の世界、神様が静かに支配している平和な世界に目をむける事だ。そこで、きらきら光りを放っているのは、

*Les purs hymens chantant les purs épithalames*……

*Les oiseaux échappés, les enfants envolés*……

〔大意〕 清らかな祝婚歌を歌う純な結婚、……逃げた小鳥、飛び立って行った子供達、……

そこに隠されているのは

… *Ces douleurs que rien ne console et n'apaise,* (21)

*Et qu'on entend pleurer dans toute la maison.* (22)

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

〔大意〕……何物によつても慰められず、鎮められない苦惱、家の中から涙にかきくれているのが聞えて来る苦惱。

この天上界のレオポルディーンヌに呼びかける父の声。

*Comme on suit du regard le vol d'une colombe,*

*Comme à l'horizon noir sous la brume enfoui*

*On cherche une lumière à l'heure où le jour tombe,*

*Je me tourne vers toi, mon ange évanoui!*

(22)

〔大意〕眼で「羽の鳩の飛翔を追い、霧の下に隠された地平線に、日が落ちる時刻に一条の光を求めるように、私はお前の方に顔を向けているのだ、おお消え去った天使よ！

レオポルディーンヌはこの父の声を聞いていた。

*Voix entendue la nuit.*

*Mon père, Dieu par qui tout persiste et tout change,*

*Nous donne, pour sortir des terrestres tumeurs,*

*Des ailes à tous deux ; mais quel mystère étrange !*

*A toi des ailes d'aigle, à moi des ailes d'ange !*

(23)

*Tu deviens grand, illustre et puissant ; moi, je meurs.*

〔大意〕

夜聞えた声

お父様、あらゆるものを永続させ、あらゆるものを変えてしまう神様が、地上の騒音から解き放って下さるために、私達二人に翼を下さったのです。しかし何と不思議な神祕でしょう。あなたには鴉の翼を、この私には天使の翼を下さったのです。あなたは偉大で、秀れた力強い人になり、私は死んでいくのです。

この時から、天上のレオポルディーンヌと地上の詩人との神秘的な対話が始まるのである。天上へ行けば、娘に会え

るといふ救いが、大きな期待を持たせてくれた。

*Tout espérance en nous prend la forme adorée*

*De ceux que nous pleurons.*

〔大意〕 期待のすべては、私達の心の中では、私達がその死を悼んで涙を流している人々の愛しい形をとっているのだ。

だが、何故神様は、このような苛酷な試練を詩人に課するのか？ ユゴにはやはり、判らなかつた。心が落ちつくに従つて、ユゴは始めから考を直して見た。

スペインに旅立つ際、例年になく家族の者、特にレオポルディーヌとの別離に心の痛みを感じた。新婚早々の夫の優しい、揺り籠のような腕の中に託して行く新妻レオポルディーヌは、幸福の絶頂にあるといつてよかつた。新しく生れ出る生命も胎内に宿していたのである。それにしては、何と忌わしい予感だつたのだらう。

九月に入つて、帰路、フランスに足を踏み入れてから、一つの妄想が彼に付きまとつた。四日の午後、セーヌ河で、レオポルディーヌが夫の腕にすがりつきながら、水底に沈んで行つた頃、詩人の胸には不吉な詩句が浮んでいた。

*O mort ! mystère obscur ! sombre nécessité !*

*Quoi ! partir sans retour ! s'en aller comme une ombre,*

*S'engloutir dans le temps ! se perdre dans le nombre !*

*Quoi ! quitter tous les biens que le ciel nous donna,*

*La maison où l'on vit, le vieil ami qu'on a,*

*Sa femme, ses enfants, fleurs du toit qu'on habite,*

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

*Quitter son cœur, son sang, ses amours, comme on quitte*

*La pierre où l'on s'assied quelques instants le soir*

*En passant dans un lieu qu'on ne doit plus revoir!*

(2)

〔大意〕 おお死よ、不可解な神秘！ 陰惨な必然！……何たる事か！ 帰る事のない出発！ 亡霊のように行ってしまう、時の中に呑み込まれるのだった！ 数の中に失われてしまうのだった！……何たる事！ 天が私達に下さった宝物を、生活をしている家を、古くからの友達を、住んでいる屋根の下の花である妻や子供達を放棄する事とは！ 自分の心臓も血も恋も棄て去る事だった！ 恰も二度と見る事のない場所で、夕方通りがかりに、少しの間、腰を下ろす石の許を去って行くように。

誰がこんな絶望的な詩を歌わせたのであろうか？ 愛しいレオポルディーヌの待っているル・アーブルに近づくにつれて強くなるこの圧迫感は何だったのだろうか？ 八日に訪れたオレロン島の印象も暗いものだった。

「私の心の中には死が宿っていた。」

「あの夜は、すべてのものが私にとっては陰気であった。」

「まるで、この島は海中に臥した大きな柩のように思われた。」

それから、ユゴは、レオポルディーヌの死の時の状況も、よく考えてみた。

舟は九時に出発する事になっていたが、その時レオポルディーヌは全然支度が出来ていなかった。少し疲れていたのに、ヴィルキエに残り、留守居番をしている積りだったのである。だが舟は、河岸を離れるとすぐ、荷が軽すぎて安定を欠くために岸に引き返し、そこにあった大きな石をバラストに積み込んだ。その時、軽い後悔の念と、自分の意隨に恥しさを感じていたレオポルディーヌは、モスリンの白い市松格子の上着を急いでひっかけ、乗船したのである。

目的地のコードベックに着いたのが予定の時間より遅く、帰りを急いだので、陸路の方が早く帰れるだろうと、訪

門先の公証人が、わざわざ馬車を仕立ててくれたが、これを断り、同じ舟で帰る事にした。公証人ビジールも同乗する筈であったが、舟が安定を欠き、流れの上でひどく「踊っている」のを見て彼は、陸路をとる事にした。それでも無事にヴィルキエの別荘のすぐ近くまで来た時、突風にあおられて舟が横転し、泳げない妻を助けようとした夫ヴァクリーは、妻を抱えて四度び水面に姿を見せながら、遂に水面下に妻もろ共没し去ったのである。<sup>(26)</sup>

この事件の最中にも、神様は、三度までも助かるチャンスを与えて下さりながら、三度目に遂に彼女を天国に召したのである。何とむじい神の要求であらう。

O Dieu ! Je vous accuse ! ...

Dès que vous nous savez absents, vous nous guettez ;

Vous pénétrez chez nous comme un voleur qui rôde,

Vous prenez nos trésors et vous les emportez ;

.....

Vous avez emporté dans votre ombre glacée

Ainsi qu'un tourbillon tout ce qui m'était cher.

Je contemplais mon ange ! elle s'est effacée,

Hélas ! comme le pli d'une onde sur la mer ! ...<sup>(27)</sup>

[大意] おお神よ、私はあなたを譴責する。.....

あなたは、私達が放心していると知る、と、すぐ私達をつけ狙います。あなたは私達の家に、うろつき廻る泥棒のように入り込み、私達の宝物を取り、それらを持って行ってしまいます。.....あなたは、あなたの冷たい影の中に、つむじ風のように、私にとって大切なものを持って行ってしまわれました。私は私の天使をじつと見つめていました。彼女は消えて行ってしまいました。ああ悲しい事に、海の上の波の騒ぎのように。

一時的なものにせよ、そうでないにしろ、又、子供っぽいものであるにせよ、心の奥底深くからのものにせよ、彼の神への反抗は真剣なものであった。ヴィルキエの劇的な最後の情況が、彼に自分は神が特に指名して選び出した生贄であると思ひ込ませた。自分の不幸の無実を証明するものは一つもないのである。いったい、いかなる罪を犯したというので、こんなに打ちのめされなければならないのであろうか。彼の意図は、いかなる場合にも純粹であつたし、過ちを犯したとしても、人間の弱さの当り前の限度を超えてはいないのである。詩人が、

*Expliquant la nature à l'homme qui l'ignore,*

*Eclairant toute chose avec votre clarté ;*

[*Les Contemplations. Liv. IV, XV, A Villequier. v. 91—92*]

「大意」 それを知らぬ人に自然を解き明し、あなた（神）の光ですべてのものを照し出す

役を引き受けた以上、このような報いを期待していなければならなかつたのであろうか？ 神は、神意を此の世に伝える詩人達には、喪の黒い冠と不幸の戴冠式とを強制する事によって悲しい特權、即ち天と地とのかけ橋になる事を強要するのであろうか？ 詩人は、この恐ろしい宿命を垣間見たのである。一八四三年九月二十三日、兄弟を失つたばかりの友エドゥアル・チェリに、次のように書き送っている。

「共に涙を流し、共に希望を抱きましょう。死はいくつかの啓示を持っています。又、心臓を切り開くような大きな打撃は精神をも開かせてくれるのです。光は、苦惱と同時に私達の心の中をも貫き通すのです。私についていえば、私はもう一つの生命を信じ、それを待っているのです。」<sup>(28)</sup>

一八四四年七月九日に、シャルル・ド・ラクルテルに宛てた手紙には、次のように書いています。

「……不幸というものは光明です。私は心に痛手を受けてから、何と多くの物事を、私の内部や外部に見た事でしよう。至高の期待は深い憂いの中から出て来るものなのです。」

この日付、即ち惨劇の十カ月後には、詩人は心をかき乱したあらゆる感情の遍歴を終えたように思われる。

…Maintenant, ô mon Dieu ! que j'ai ce calme sombre

*De pouvoir désormais*

*Voir de mes yeux la pierre où je sais que dans l'ombre*

*Elle dort pour jamais ; ……*

…Je viens à vous, Seigneur, père auquel il faut croire ;

*Je vous porte, apaisé,*

*Les morceaux de ce cœur tout plein de votre gloire*

*Que vous avez brisé ; ……*

*Je conviens à genoux que vous seul, père anguste,*

*Possédez l'infini, le réel, l'absolu ;*

*Je conviens qu'il est bon, je conviens qu'il est juste*

*Que mon cœur ait saigné, puisque Dieu l'a voulu !*

*[Les Contemplations. Liv. IV, XV, A Villequier, v. 13—16, v. 21—24, v. 33—36]*

〔大意〕 おお神様、私は何かよく判らないながらも落着きを得ましたので、その墓石の闘の中であの子が永遠の眠りについてる事を私が知っている墓石を、これからは私自身の眼で見る事が出来るようになりました今、……

私は、主よ、信じなければならぬ父たるあなたの許にまいます。私は心静かに、あなたの栄光に満ち、あなたが傷つけたこの心のかけらをあなたの許に持ってまいります。……

あなただけが、敵かな父よ、無限を、現実を、絶対を所有なさっていられる事を、私は膝まずいて承認します。神が  
お望みになった以上、私の心が血を流した事が、正しく、当然の事である事を承認致します。

これは神から科せられた苦悩を受入れた、という事であり、悲しみ歎きながらも、自由に涙を流す事を許して貰いたいという願いでもあった。というのは、人間の涙は神への反抗の印とはなり得ないからである。しかし諦め、すべてを投げ出してしまったわけではない。

…*Ne vous irritez pas que je sois de la sorte,*

*O mon Dieu ! cette plaie a si longtemps saigné !*

*L'angoisse dans mon ame est toujours la plus forte,*

*Et mon cœur est soumis, mais n'est pas résigné.*

[*Les contemplations. Liv. IV, XV, A Villequier. v. 137—140*]

〔大意〕 私がこのような人間である事をお怒り下さいますな、おお神様！ この傷はこんなに長い間血を流しておりました。私の魂の苦悩は、相変わらずこの上もなく強く、私の心はおまかせてありますが、しかし放棄したわけではありません。

完全に己れを放棄し、諦観の境地に立つためには、まず理解しなければならぬ。一八四三年と四四年には、娘の死がユゴを神祕の扉の前に置き去りにしてしまった。この扉の隙間から漏れて来る微々たる光を捕える事が出来、或は出来たと信じたのは、尚後の事である。癒えたように見えた心の傷は、内部で、人知れず血を流し続けていたので



あり、彼が神祕の世界を凝視し続けていた事は疑いを差しはさむ予地がない。四五年五月のピアール夫人との姦通事件のスキャンダルが、数年前から手がけていた「ジャン・トレジャン」——後の、「レ・ミゼラブル」——に彼を没頭させた。

一八四六年、ジュリエットの一人娘であり、ユゴにとって、亡きレオポルディーヌの化身ともいうべきクレール・ブラディエの死が二人に襲いかかった。

クレールの生前、詩人は、レオポルディーヌの霊に向つて、こんな詩の断片を書いている。

*Dis, veux-tu que je sois comme le loup farouche,*

*Que je ne parle plus à personne ici-bas ?*

*... Que jamais un enfant ne me fasse sourire ?*

*(Si je baise au front une felle fille native)* <sup>(28)</sup>

*Seras-tu pas jalouse au fond de ton tombeau ?*

〔大意〕 さあ、いってごらん、お前は私が野性の狼のようで、この世では誰にも話しかけなくなり、ある一人の子が私を微笑ませるなどという事が決してあつてはならぬと望んでいるのかい？（もし私が純真な美しい娘さんの顔に口づけしたら）お前はお墓の奥で嫉妬しないだろうか？

クレールの葬儀に参列した帰り、即興的に作られた短い詩の中では、人間の儂なさに殆んど絶望したような感情を表明している。

*... On se sent faible et fort, on est petit et grand ;*

*On est flot dans la foule, âme dans la tempête ;*

*Tout vient et passe ; on est en deuil, on est en fête ;*

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

*On arrive, on recule, on lutte avec effort……*

*Puis, le vaste et profond silence de la mort. 1*

[*Les Contemplatifs. Liv. IV, XI, v. 16—20*]

〔大意〕人は己れを弱くもまた強くも感ずる。人は小さくて大きいものだ。人は民衆の中の波であり、嵐の中の靈魂なのだ。すべては来、そして過ぎ去る。喪に服している人、お祭り騒ぎの人。人は到着し、後退し、努力して斗う……それから死という広大な深い沈黙！

二年経ち、三年経っても、彼の苦悩はぬぐい去られなかった。落ち着きを取り戻した詩人は、この苛酷な運命に降伏したように見えるが、それは強制された不自然なものであり、全的な自己放棄、諦観と混同されてはならないのである。彼は、うなだれた頭を再び上げ、創造主の意図や、宇宙の秩序を更に近くから調べあげようとするようになった。その頃、二つの読書が彼にその勇気を与えたのであろう。即ち、A・スーメ及びパウール・ロルミアン翁の「ヨブ記」の韻文訳と、パスカルの読書である。一八四二年に、ヴィクトル・クーザンは王室図書館で「パンセ」の原稿を発見し、アカデミーに対して「パンセの新版の必要性について」という注目すべき覚書を提出した。この新版は、一八四四年に碩学プロスペル・フォージェールの配慮で出版されたばかりの処で、フォージェールは、「幸せを知る事に関する人間の無力さ」を力説し、その精神、その心情の憐れさを強調する、不安な、ロマンチックなパスカルを紹介したのである。<sup>(31)</sup>この根本的な人間の惨めさは、創造主の命令でなくて、何であろう。人間が苦しむのは神が望んでいるからなのである。何故なら、多分神は、この苦悩を必要としているからなのである。不幸と悪とが宇宙の均衡に必要なのだと想像しなくてはならないのであろうか。とすれば、詩人の苦悩は望まれ、準備されたと考えるのも無理のない事である。ただその理由が知りたい、と心から思った。それは、何時かは我々に啓示されるものであろうか？

それを希望する事も出来るし、又せねばならないのである。詩人が完全に絶望の淵に沈潜しなかった唯一の理由は、これなのである。それ故、彼の心の中に一種の宇宙開闢論が徐々にスケッチされていった事は否定し得ない。かくして、政治生活の多忙の明け暮れの間にもユゴの哲学は少しづつ形を成し、一八五一年暮の、ナポレオン三世のクーデタによる亡命の時期が始るのである。

この亡命がヴィクトル・ユゴを自分自身に返したのである。亡命がなかったら、後年の真の偉大さの核を形成する詩作も政治家としての多忙に邪魔されて、なし得なかったであろうし、宇宙の神秘を探る彼の執拗な神秘的な思索もなされなかったであろう。彼は亡命前の数年間、全く己れを無にして過してしまったのである。亡命による思索の時間の増大が、やがて神秘的な叙事詩人としての有終の美を飾る事になるのである。

ジェルセイ島にいた頃、パリで流行していた「回転テーブル」<sup>(32)</sup>が、ジラルダン夫人の訪門でユゴ一家に紹介された。若かりし頃のエミール・ドゥ・ジラルダン夫人、即ちデルフィヌ・ゲイ嬢は機智に富んだ女流作家で、自由主義サロンに君臨していた美貌の持ち主であったが、今や、彼女を遠からず彼岸の国へ連れ去るに違いない癌に冒され、その上、極めて親しい友をなくしたばかりなので、鬱陶しげな黒づくめの服装で、一八五三年九月六日の火曜日に、ジェルセイ島に上陸して来た。夫人は降霊術を熱心に研究し、テーブルの媒介によって、自分と呼んでいると思われる彼岸の世界を熱心に覗き込もうとしていたのである。

彼女は「ここでは、テーブルをなさっていらして？」と早速ユゴ一家に尋ねたが、詩人は懷疑を表明し、ユゴ夫人は、以前息子のシャルルや亡命中のユゴ一家の秘書役を果しているオーギュスト・ヴァクリーと共に、パリから教本を取り寄せ、何回も実験してみたが常に失敗した、と告げた。にも拘らず、その熱烈な信者は最初の晩から、効果的な遣り方を教えたくて我慢し切れず、夕食を急がせた。その重要な点は、テーブルが「動くだけではなく、話をす

る」という事であった。つまり、テールブルが動いて、その脚が床を打ち、その打つ音の数が夫々アルファベットの文字を表わし、それで単語を綴り、文を作っていくのである。はつきり一つだけ打つのは肯定を、二つは拒絶、もしくは否定を意味していた。

だがこの実験は最初の晩から失敗を続け、出発の前々日、最後の実験を試みた。この時、十五分の後、ジラルダン夫人とヴァクリーの手の下で、少し後にはシャルル・ユゴとル・フロ將軍（亡命仲間）の手の下で、テールブルが振動し始めたのである。ジラルダン夫人は、遂にテールブルに現われた精霊に向って質問をする。

——あなたは誰？——娘です。死んでいるの。

「一同はヴィクトル・ユゴが失った娘の事を考えていた。」と記録には誌されている。その後暫くの間、娘の霊と言葉を交した後、この会議は終ったが、母親は感動と涙の谷間に落ち込み質問を口に出す力もなかった。ヴィクトル・ユゴは、その時までは最も強く回転テールブルに疑を抱いていたが、この夜、即座に、しかも際限もなく打ちのめされてしまった。それ以後、マリン・テラスに於いては毎晩、無数のシーンを見せる神秘的な、幻影的な光景が展開されるのである。ヴィクトル・ユゴとその家族は、このシーンの無意識の作者であると同時に魅入られてしまった見物人でもあった。二年の間、殆んど毎晩、詩人は彼岸の使者と相談をしていた。<sup>(32)</sup>

この彼岸からの使者との会話によって、詩人の内の混然として、まだ形を成さない哲学が体系を与えられ、その体系にもとずいて幾多の詩句が生れた。それは、二篇の哲学詩、「神」及び「悪魔の最後」であり、詩集「観想」の中の黙示録風と呼ばれる諸詩篇であり、しこうして「諸世紀の伝説」でもある。かくの如く、ユゴの生活の曲線は、彼の思想のカーブと一致しているのであり、これを要約すれば次の如くなる。

1、一八三〇年以前の行動と自負の時代には、魂が目覚める前の自己に対する盲目的な確信。

2、一八三〇年代の家庭危機と失意の時代には、自己への確信の動揺と魂の闇を感じ、そこから抜け出すのに、ジジュリエットを始めとする多くのニンフ達を必要とした。オランピオの誕生。

3、一八四三年のレオポルディースの死による危機には、詩人の救世主的役割への思索と、その結果である政治活動、ならびにレオニ・ドネを初めとする女性の肉体による危機の克服。この間に受けた大きな打撃が詩人の神秘的な世界観を作り上げる最大の要素の一つになった。

4、亡命の生活と一八五三年から五五年に到るマリン・テラスの回転テーブルによる啓示が対応し、この時代にユゴの哲学は体系が整い、最後の安心立命への時代と続いてゆくのである。

ユゴの精神状態は、生れつき原始的であり、その最も重要な特徴は、副次的な原因には無関心であり、すべてを神の靈魂の代理者、即ち、精霊、魔力、妖術などの仲介によって説明しなくてはならぬと考える事である。少し此の表現を強めれば、この種の人は到る処に精霊を見ているといえよう。

第二の特徴は、細部に於ける表面上の矛盾には全く無関心であり、様々な仮説を勝手に作り上げ、それをすべてに適用する事である。

第三は、人間よりも下等な自然、即ち動物、植物、鉱物に到るまで、人間と血のつながりがあるという感覚である。更に、おそらくより根本的な特徴は、ユゴの精神の中では、表現と表現されたものが同一視されている事である。

ユゴにとって、想像は現実を明らかにするためのものであり、イメージも、更に比喻に到るまで、物に外面的につけられた装飾ではなく、その本質の表現である事を目的としているのである。

*Le père promontoire au chapeau de nuées.....*

[*Les Contemplations. Liv. V, XXIII, Pasteurs et Troupeaux. v. 40*]

〔大意〕雲の帽子を被った牧人である岬

は、岩の中に閉じ込められた精霊であり、波の中に閉じ込められている

… *des moutons sinistres de la mer.*

[*Ibid. v. 46*]

〔大意〕海の不吉なる羊

の番をしているのである。原始の精神は抽象にまで高まると、このように物と言葉とを混同してしまうのである。神は言葉によって創造する。神が発した言葉は創造された物なのである。

*Car le mot, c'est le Verbe, et le Verbe, c'est Dieu.*

[*Les Contemplations. Liv. I, VIII, Suite. v. 110*]

〔大意〕というのは言葉、それは言魂であり、言魂は神なのである。

ユゴの原始的な感性は、物みなすべての中に、靈魂、即ち神を見ていた。

*Tout est plein d'ames.*

[*Les Contemplations. Liv. VI, XXVI, Ce que dit la bouche d'ombre, v. 45*]

〔大意〕すべては靈魂に満ちている。

一般に、その本来の意味では、パンティスムは、神秘主義ミステイシズムでは有り得ない。つまり、パンティスムは世界に自己同化をするが、唯一の神には自己同化をしない。これに反して、神秘主義は、自己と唯一の神との区別を排除するものであるのだからである。パンティスムの主張によれば、世界が、即ちそれに同化した自己が、一つの魂の中に住む事は出来ないのである。しかし、ユゴはこの二つの感性を結び合わせてしまった。つまり、彼にとって、神は世界であ

り、又神は一つの個性を持ったものでもあったのである。それで、彼の神は、パンティスムの神の如くに漠然としており、同時にカトリシスムの神の如くに個人的な、人格的な神であったのである。このような概念の理論的な矛盾は彼には全然通じないのであって、そこがユゴの原始的な感性のしからしむる所なのである。彼は神とは、そうゆうものだと感じたのである。いわゆる

「神を感じるのには心情であつて、理性ではない、これが信仰というものである。理性にはなくて、心情に感ぜられる神。」<sup>(33)</sup>

なのである。

彼はこのような神の姿をどこで得たのであろうか。それは、幼い頃のフィアンティーヌの庭であり、マリウスがコゼットを見染めたルクサンブル公園であり、旅で見た自然であつた。

「生命、樹液、暑気、瘴気が満ち溢れていた。森羅万象の下に、その源泉の巨大さが感じられた。愛に貫かれたこれらの息吹きの中に、反射と反射の往き来の中に、光の驚くべき濫費の中に、流動する黄金の際限のない流出の中に、尽きる事のないものの浪費が感じられた。そして、その光線の背後には、焰の幕の後のように、無数の星の所有者である神が、かすかに認め得られるのであつた。」<sup>(34)</sup>

そして、いかなる論理から、この神を肯定したのであろうか？

「ちよつと沈黙の後、老人は空の方に指をあげていった。」

『無限は存在する。無限は彼処にある。もしも無限に自我がないとすれば、自我というものが、無限を限ることにならう。無限は無限ではなくなるだろう。即ち無限は存在しなくなるだろう。然るにそれは存在する。故にそれは一つの自我を持っている。この無限の自我、それが神である。』<sup>(35)</sup>

このような論理は、ユダヤの神秘教のそれであり、それを彼は、アレクサンドル・ウェイルから知らず知らずの内  
に教えられていたのである。ユダヤ神秘教の神は、パンティスムの神ではない。何故なら、その神は人格的であるか  
ら。しかし、その神は全てのものの中に存在するのだから、ユダヤの神秘教はパンティスムである。ユゴにとつても、  
ユダヤ神秘教にとつても、そこに矛盾はないのである。<sup>(36)</sup>ユゴの下した結論は、無限の自我であった。神は自我をもち、  
しかも無限である。ユゴはこの二つの言葉を大切にした。しかし、理解しようとする気はなかった。彼にとつて、こ  
れは事実なのであり、その事を主張しているだけなのである。

詩人の世界観の中心をなすのは、神は必然的に不完全なものを作るという思想である。

*Il le fit radieux, beau, candide, adorable,*

*Mais imparfait, sans quoi, sur la même hauteur,*

*La créature étant égale au créateur,*

*Cette perfection, dans l'infini perdue,*

*Se serait avec Dieu mêlée et confondue,*

*Et la création, à force de clarté,*

*En lui serait rentrée et n'aurait pas été.*

*La création sainte où rêve le prophète,*

*Pour être, ô profondeur ! devait être imparfaite.*

*Donc, Dieu fit l'univers, l'univers fit le mal.*

[Les Contemplations. VI, XXVI, Bouche d'ombre. v. 52—67]



〔大意〕 神はそれ（善の象徴である重さのないもの、即ち最初の被造物）を輝かしく、美しく、無垢な、愛すべき、しかし不完全なものにした。さもなくば、被造物が、神と同じ高度で、創造者と同じ価値をもってしまい、この完全なるものは無限の中にうずもれて神と混じり合い、混同されてしまった事であろう。そして万物は、光に満ち溢れるのあまり、神の中に再び戻ってしまい、存在し得なかつたであろう。予言者が夢想する聖なる森羅万象が存在するためには、おお深遠なる者よ！ 不完全でなければならなかつたのである。それ故、神は宇宙を作り給ひ、宇宙が悪を作つたのである。

この論理の出発点は、神はすべてであり、すべては神に属しているという理念である。創造とは、ものの中に一つの不完全さを導入する事による神の一部の分離なのである。この不完全さは神の意志による一種の解放であり、この事がなければ、神は孤独のまま過さねばならないのである。かくの如く、すべてが神なのである。がしかし、多かれ少かれ物質に蔽ひ隠された神なのである。この隠蔽の度合が多いか少ないかによつて、神に遠く存在するか近くに存在するかという万物の位置づけ、即ち万物の段階が決定され、そこに「存在の梯子」と呼ばれている階段が形成されるのである。つまり、その梯子の中で、神の隠蔽の度合の少いものが高所に、それが多いものは低所へと位置せしめられるのである。

神の隠蔽というこの不完全さが万物を構成しているものであり、あらゆるものの中には、神と物質、即ち善と悪が見られるのである。それ故、肉欲も神の力ではあるが、ある程度悪でもあるのである。しかし逆に見て、悪の中にも必ず神は存在しているのである。そして進化の目的は、すべての悪の中にあるこの神、即ち善を抽出する事なのである。悪そのものの中にも善の原則は含まれているのであって、この悪が万物を神から引離す事によつて、ものを創り、それに自由を与えたのである。それ故、進化の最終段階に於いて、神に、自由な、光榮に包まれたものを附与するのは悪なのであり、又それ故に悪が存在しない時には、神は孤独であつたのである。つまりただ善のみが存在する

とすれば、善は存在しないに等しいと同じく、神のみが存在するとすれば神は存在しないのに等しいのであり、神が存在するためには、悪が必要だったのである。それ故に、あらゆるものは赦される権利をもっている。あらゆるものは悪を含むが故に、神に対するその役割を立派に果しているからである。さて、この役割の中には苦悩も含まれている。苦しみ悩んで、己れの中の善を、即ち隠蔽されている神の隠蔽の度を少くすれば、それだけ、万物の梯子の中でより高い位置を得て、そこで再び肉体を与えられるであろうし、悪を続け、ますます神が隠蔽されれば、彼は、下等な位置に置かれ、そこで再び肉体を与えられて、更に苦しまなければならない。これが再生の理論への信仰である。そして、この避け得られない、しかも非情な賞罰は、ただ罰するただけに為されるのではなく、正しい道に連れ戻し、高めるために為されるのであり、悪の中に含まれている善の原則、即ち悪からの解放、即ち「自由」というこの原則を、という事はつまり自由そのものを万物の中から引き出すためになされるのである。そして、段々増大する自由そのものが、進化の目的なのである。以上の如きが、ユゴの哲学の骨子であり、世界観である。

オリンポスの山麓では、「四六時中炎を燃やし」、「白い漠たる形を追い求めて」いた半神獸は、オリンポスの神々の前で、まず万物の梯子の最下位に在る、怪物のような大地や、海の原始の姿を歌ったのである。万物を構成しているものは全て、散在している神の靈魂の破片なのである。

*Tout, comme toi, gémit, ou chante comme moi ;*

*Tout parle. Et maintenant homme, sais-tu pourquoi*

*Tout parle ? Écoute bien. C'est que les vents, ondes, flammes,*

*Arbres, roseaux, rochers, tout vit !*

*Tout est plein d'âmes.*

[Ibid. v. 45—48]

〔大意〕 すべてのは、お前と同じように唸き声を上げ、あるいは私のように歌っているのだ。すべては喋っている。今や、人間よ、お前は何故もの皆すべてが喋るかを知っているか？ よく聴け。それは、風も波も炎も、木も草も岩も、すべてが生きているからなのである。すべては靈魂に満ちている。

しかして、まず、神と人間との間には、

*Ces êtres, dieux pour nous, créatures pour Dieu.*

[La Légende des Siècles. LVIII. 20<sup>e</sup> Siècle. II. Plein ciel. v. 353. t. II. p. 307]

〔大意〕 我々人間にとつては神であり、神にとつては被造物である存在、

つまり、首天使がいて、これが「亡霊の口」となって、詩人に話しかけて、宇宙の神秘を詩人に説き明かしてくれるのである。この首天使は神から分離された存在というだけの事で、まだ悪の要素は混入していないのである。

*L'être créé, paré du rayon baptismal,*

*En des temps dont nous seuls conservons la mémoire,*

*Planait dans la splendeur sur des ailes de gloire ;*

*Tout était chant, encens, flamme, éblouissement ;*

*L'être errait, aile d'or, dans un rayon charmant,*

*Et de tous les parfums tour à tour était l'hôte ;*

*Tout nageait, tout volait.*

[Les Contemplations. IV, XXVI, Bouche d'ombre. v. 62—68]

〔大意〕 私達（首天使等）だけが記憶を持ち続けている時代には、洗礼の光に飾られた被造物は、栄えある光の翼に乗って、光輝の中を飛翔していた。すべては歌、芳香、炎、眩暈だった。黄金の翼となった被造物は美しい光線の中を彷徨い、すべて

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

の芳香を次々と訪れるものだった。すべてのものが遊泳し、飛翔していた。

この首天使が人類を善の方向へ神の方向へ導く役を担っているのであり、詩人はこの一人になろうとしていたのである。

次に、これらの首天使の中の或るものが、神に反抗して、失墜するが、これもまだ余りにも偉大なので、すぐ人類にまで落ちず、悪の天使が生れる。その長がサタンなのである。

*Il se vit devenir monstre, et que l'ange en lui  
Mourait, et le rebelle en senti quelque ennui.*

[*La Fin de Satan : I. III. p. 768 de l'édition de la Pléiade*]

〔大意〕 彼は自分が怪物になり、内なる天使が死にかかっているのを見た。そのためにその叛逆者は苦痛を感じた。

これは地上の一切の悪、権力を掌握して人間を支配する神々であり、オリンポスの神々はこのカテゴリーに入るのである。その下に人間、動物、植物、鉱物、渾沌と続き、それらすべては靈魂即ち神を持っている。そればかりでなく、人間の作った物の中にも靈魂が存在するのである。

*Alors l'aigle d'airain qu'il avait sur son casque,*

*Et qui, calme, immobile et sombre, l'observait,*

*Cria : «Cœurs étoilés, montagnes que revêt*

*L'innocente blancheur des neiges vénérables,*

*O fleurs, ô forêts, cèdres, sapins, érables,*

*Je vous prends à témoin que cet homme est méchant ! »*

*Et, cela dit, ainsi qu'un piocheur fouille un champ,*

*Comme avec sa cognée un pâtre brise un chêne,*

*Il se mit à frapper à coups de bec Tiphaine ;*

*Il lui creva les yeux ; il lui broya les dents ;*

*Il lui pétrit le crâne en ses ongles ardents*

*Sous l'armet d'où le sang sortait comme d'un crible,*

*Le jeta mort à terre, et s'envola terrible.*

[*La Légende des Siècles : XVII. IV. L'angle du casque, t. I. p. 374—375*]

〔大意〕 すると、彼が被っている兜の上の、静かに、動かず、沈みがちに彼を見守っていた青銅の鷲が叫んだ。「星を縋めた天よ、貴き雪の無垢な白さをまとった山々よ、おお、川よ、森よ、西洋杉、もみじ、楓よ、私はあなた方を証人とし、この男は悪人なりと宣言する」。そう云うと、つるはしを使う人が畑を掘り起し、牧人が斧で樫の木を打つように、その鷲は嘴でティフェーンを突き始めた。彼の目をえぐり、齒を砕き、燃える爪で、筋の中から出て来るように血がしたり落ちる兜の下の方頭蓋骨を捏ね混せて、死んだ男を地面に投げつけ、恐ろしげな様子で飛んで行った。

半神獣は、大地や海を歌った後、その一段上に位置する植物の靈魂について歌うのである。

Sorte de mer ayant les oiseaux pour nochers,

Pour algue le buisson, la mousse pour éponge,

La végétation aux mille têtes songe ;

Les arbres pleins de vent ne sont pas oublieux ;

Dans la vallée, au bord des lacs, sur les hauts lieux,

Ils gardent la figure antique de la terre ;

Le chêne est entre tous profond, fidèle, austère ;

Il protège et défend le coin du bois ami .

Où le gland l'engendra, s'entr'ouvrant à demi,

Où son ombrage attire et fait rêver le pâtre.

Pour arracher de là ce vieil opinâtre,

Que d'efforts, que de peine au rude bûcheon !

[Le Noir. v.294—305]

〔大意〕 水夫の代りとして小鳥等を、海草の代りには灌木の茂みを、海綿の代りには苔を持っている海の如き植物は、千の頭をもち、夢想している。風を一杯にはらんだ木々は忘れっぽくはない。それらは谷の中、湖の辺り、山々の上では大地の古代の姿を守り続けている。櫛の木は、就中高く、忠実で、峻厳である。それは朋友である森の隅を保護し、守っているが、その森の隅では、どんぐりが櫛の木を生むであろうし、そこではその影は牧人を惹き寄せ、夢想させている。そこから、老いた一徹者を引き抜くのに、力の強い木樵には、どれだけ多くの努力、どれだけだけの労力が必要であろうか！

ユダヤ人、アレクサンドル・ウェイルが、詩人に神秘教の女性に関する教義を教えたのである。ユダヤ神秘教の經典ゾールには、肉欲が非常に賢い方法で統制され、神自身の例によって、人格化されてすらいた。ユダヤ教は神に對してさえ、一人の妻、マトロナを認めていた。ユゴにとって、この肉欲の神性化は大歓迎以外の何ものでもなかった。肉欲は、彼にあっても自然にあっても神の力であるという、ひそかな感情を彼の作品の中に認める事は容易である。神があらゆるものの中に現存している以上、物質や肉体に付属している力は、神の本質に属するものなのである。ユゴの如き体質の人にとっては、自然の中の到る処に見出される肉欲が、それ自体、神性であるという事になるのである。しかし、肉欲も物質と結びつく事によって容易に悪になるのであり、肉欲の道具である肉体によって加えられる制限が、肉欲に悪の要素を混入してしまうのである。これら二つの事、欲望の健全さと、肉欲の中にある悪の要素

を、詩人は表現するのであるが、善と悪とがすべてのものの中に救いようのない程混合されているという観念の源は、肉欲に衝動と嫌悪を感じていた詩人の生理及び心理の中に見出されるのである。ユゴは、自然のあらゆるものの中に神性をもつ肉欲を見出してゐた。

*Vivez ! croissez ! semez le grain à l'aventure !*

*Qu'on sente frissonner dans toute la nature,*

*Sous la feuille des nids, au seuil blanc des maisons,*

*Dans l'obscur tremblement des profonds horizons,*

*Un vaste emportement d'aimer, dans l'herbe verte,*

*Dans l'autre, dans l'étang, dans la clairière ouverte,*

*D'aimer sans fin, d'aimer toujours, d'aimer encor,*

*Sous la sérénité des sombres astres d'or !*

*Faites tressaillir l'air, le flot, l'aile, la bouche,*

*O palpitations du grand amour farouche !*

*Qu'on sente le baiser de l'être illimité !*

*Et paix, vertu, bonheur, espérance, bonté,*

*O fruits divins, tombez des branches éternelles !*

[*Les Contemplations*, V, XVII, *Magistralque Doum*, v. 21—33]

〔大意〕 生きろ！ 増えろ！ 運まかせに種子をまけ。全自然の中に、鳥の巢の木の葉の下に、家の白い玄關に、深い地平線の薄暗い震動の中に、緑の草の中に、洞穴の中にも池の中にも、切り開かれた森の空地の中にも愛する事の広大な興奮が、そして黄金色の暗い星の静けさの下にも限りなく愛し、常に愛し、尚愛する事の広大な興奮がおののいているを感じるがいい。

大氣、波、翼、口を震わせろ、おお狂暴なる偉大な愛の鼓動よ！  
希望、善意、おお神性な果実よ、永遠の枝から落ちて来い！  
無限の存在の接吻を感じるがいい。しかして平和、幸福、

自然は、人の愛にすら参加するのである。

*La nature, sœur jumelle*

*D'Ève et d'Adam et du jour,*

*Nous aime, nous berce, et mêle*

*Son mystère à notre amour.*

*Il suffit que tu paraisses*

*Pour que le ciel, t'adorant,*

*Te contemple ; et, nos caresses,*

*Toute l'ombre nous les rend.*

*Clartés et parfums nous-mêmes,*

*Nous baignons nos cœurs heureux*

*Dans les effluves suprêmes*

*Des éléments amoureux.*

*Et, sans qu'un souci t'opresse,*

*Sans que ce soit mon tourment,*



*J'ai l'étoile pour maîtresse,  
Le soleil est ton amant ;*

*Et nous donnons notre fièvre  
Aux fleurs où nous appuyons  
Nos bouches, et notre lèvres  
Sent le baiser des rayons.*

[*Les Contemplations. II, XXIII, Après l'hiver. v. 41—60*]

〔大意〕 イヴとアダムの、そして日の光の双生の姉妹である自然は、私達を愛し、静かに揺すり、私達の愛にその神秘を混ぜ合わせている。

天がお前を熱愛し、お前をじっと見つめるためには、お前が姿を現しさえすれば事が足りるのだ。そして私達の愛撫を、影全体が返してくれるのだ。

光であり、香りである私達自身、自分達の伴せな心を愛の要素の至高の放射の中に浸しているのだ。

そして、心配がお前の呼吸を妨げず、私の責苦にならないように、私は恋人に星をもち、太陽はお前の愛しい人なのだ。

私達は、そこに口を押しつけている花に、私達の熱を与えているのだ。また私達の唇は光の接吻を感じているのだ。

これは人の肉欲が自然の肉欲を眼覚ますからなのであり、その逆も又有り得るのである。これは原始の人々の間には広くゆきわたっていた感情であり、彼らは大地の豊かな実りを欲するのあまり、田畑の中で肉欲に耽る事さえ稀な事ではなかった。イヴは自然の情欲に身をさらして、娠ったのである。

*Le beau couple innocent songeait silencieux.*

*Cependant la tendresse inexprimable et douce*

*De l'astre, du vallon, du lac, du brin de mousse,*

*Tressaillait plus profonde à chaque instant autour*

*D'Ève, que saluait du haut des cieux le jour ;*

*Le regard qui sortait des choses et des êtres,*

*Des flots bénis, des bois sacrés, des arbres prêtres,*

*Se fixait, plus pensif, de moment en moment,*

*Sur cette femme au front vénérable et charmant ;*

*Un long rayon d'amour lui venait des abîmes,*

*De l'ombre, de l'azur, des profondeurs, des cimes,*

*De la fleur, de l'oiseau chantant, du roc muet.*

*Et, pâle, Ève sentit que son flanc remuait.*

[*La Légende des Siècles : II. Le sacre de la femme. t. I. p. 37*]

〔大意〕 美しい清浄な夫婦は声もなく夢みていた。

しかしながら、星、谷、湖、苔の芽の表現し難い、優しい愛情が、天空の高みから日の光が挨拶をしているイヴの廻りで、瞬間毎により深くなって、身を震わせた。物や生物から祝福を受けた波から、聖なる森から、牧師である木々から出る眼差し、次第に物思いに沈んでゆく、尊敬すべく又愛らしい額のこの女の上にじっと向けられていた。愛の長い光線が深淵か

ら、影から、青空から、深みから、峯々から、花から、歌っている小鳥から、無言の岩から彼女の許に来ていた。

すると、イヴは蒼白になり、自分の腹が動くのを感じた。

これらの原始的な感覚がユゴの宇宙開闢論の出発点なのである。

「花月になると、その巨大な灌木の茂みは、格子の後ろで、四つの塀に囲まれ、自由にあらゆるものの発芽の仕事を秘そやかに言いながら発情期に入り、殆んど宇宙の恋の発射を希求している獣のように、朝日の光に身を震わせてくる。」

半神獣も、この自然の性行為を神々に説き明すのである。

Le sylvain raconta Dodone et Cithéron,

Et tout ce qu'aux bas-fonds d'Hémus, sur l'Érymanthe,

Sur l'Hymète, l'autan tumultueux tourmente ;

Avril avec Tellus pris en flagrant délit,

Les fleuves recevant les sources dans leur lit,

La grenade montrant sa chair sous sa tunique,

Le rut religieux du grand cèdre cypriote,

Et, dans l'âtre épaisseur des branchages flottants,

La palpitation sauvage du printemps.

[Le Noir. v. 306—314]

〔大意〕 半神獣はドドンヌ（エピールの町で一本の樫の木が、その葉のざわめきによって、又は枝にかけられた銅の容器の音によって神託を伝えたといわれ、シユピテルに捧げられた樫の森）、シテロン（ポニティの山で、伝説によればエディプ王はこ

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

ここで危機にさらされた）を、そしてエミユス（現在のブルガリヤ南方の国境をなしている山脈で現在ではバルカン山脈と呼ばれている。伝説によればオルフェが酒神祭女達に惱まされたのは、これらの山の上である）の深い谷間やエリマント（ペロポネス半島の山、エルキュールがジュノンの送った猪を退治した場所）やイメート（アテネ南部の山）の上で、騒々しい北風が苦しめているすべてのものを語った。テリユス（地球）と共に現行犯で捕えられた四月を、ベッドの中に泉を迎える川を、下着の下から肉肌をのぞかせている石榴の実を、破廉恥な大西洋杉の宗教的な発情を、そして、たゆたう枝の貪欲な繁みの中の春の野生の鼓動を語った。

かくの如く、創造の時、神は己れの一部をあらゆるものの中に置いたのであるが、次に来るのは、その万物の中の細分化された神の総合である。無限である神が、己れを限定してものの中に入り、一度びものが創造されると今度は、神は万物に内在する制限——神である無限が細分化されたのであり、無限の細分化は制限である——を取り除いて、神から分離したものを浄化し、再び神に附属せしめるのである。つまり神は失墜したものを、己れと同じ水準にまで高めようとするのである。これを妨害しているのは制限であるから、救いは解放、自由である。それ故、ユゴの哲学の一番大切な言葉は自由なのである。自由によってこそ、悪を克服出来るのである。

しかし、解放には、二つの収斂する行動が必要なのである。一つは神から出て、存在の中に滲透する積極的な善意で、他は存在が行う贖罪の行為である。神から来る此の善意は必然的なものである。というのは、制限、即ち悪が創造に必要なものである以上、悪は神に望まれたものであって、必然的にこの悪の一部を包含している全存在は赦しを受ける権利をもっているのである。すべての罪科を終局的に、そして全的に赦すために、神が善意を万物の中に滲透させるのであるなら、万物は逆に、神に対して贖罪をし、苦悩を提供して己れの役割を果たさねばならないのである。かくの如くして、神から出た万物は、最後には再び神に帰るといふ復権の思想が生れたのである。この神から来る善意と、全存在の贖罪とによって、悪即ち物質を段々に吸収し、消化し、変形し、最後には破壊してしまい、万物の中

に隠蔽されている神、即ち善そのものを取り出さねばならないのである。こうして、「万物の梯子」を昇り、遂に物質が完全に無くなった時に、神の許に迂りつくのである。この物質の破壊というのは、結局は死の役目なのであるが、その前の段階として、万物の貧食の役割が存在する。あらゆるものは他のものを貪り食いながら変形を成し遂げているのである。生物の生理的な機能である栄養物摂取と生殖とが、神性の中に置かれるのは当然である。これも又、ユコの宇宙開闢論である。

まず、植物は大地を栄養として摂取している。

La terre sous la plante ouvre son puits nocturne

Plein de feuilles, de fleurs et de l'amas mouvant

Des rameaux que, plus tard, soulèvera le vent,

Et dit : — Vivez ! Prenez. C'est à vous. Prends, brin d'herbe !

Prends, sapin ! — La forêt surgit ; l'arbre superbe

Fouille le globe avec une hydre sous ses pieds ;

[Le Noir. v. 316—321]

〔大意〕 大地は、風が後に運び去るであろう木の葉、花、樹枝の動く堆積が一樣に填まっている夜の井戸を開け、そして言う。「生きなさい。食べなさい。これはお前達のものだ。さあ食べなさい。草の芽よ、食べなさい、もみの木よ！」森が湧き出る。見事な木は、その足の下で怪蛇で地球を探っている。

ユコは、木の葉や花、木の小枝などは、地底から登って来る水液のものであると考えていたのであり、その水液を吸い上げて大きくなった木は、足の下で大地を、蛇のように曲りくねりながら進む根で探っているのである。しかし巨大になった木は大地からだけの栄養では、も早や充分でなくなりました。

Les arbres sont autant de mâchoires qui rongent  
 Les éléments, épars dans l'air souple et vivant ;  
 Ils dévorent la pluie, ils dévorent le vent ;  
 Tout leur est bon, la nuit, la mort ; la pourriture  
 Voit la rose et lui va porter sa nourriture ;  
 L'herbe vorace brooute au fond des bois touffus ;  
 A toute heure, on entend le craquement confus  
 Des choses sous la dent des plantes ; on voit paître  
 Au loin, de toutes parts, l'immensité champêtre ;  
 L'arbre transforme tout dans son puissant progrès ;  
 Il faut du sable, il faut de l'argile et du grès ;  
 Il en faut au lentisque, il en faut à l'yverse,  
 Il en faut à la ronce, et la terre joyeuse  
 Regarde la forêt formidable manger.》

[Le Noir. v. 336—349]

〔大意〕 木々は、身軽な、生命ある大気の中に散在する物の要素を齧っている同じ数だけの顎である。木々は雨を、風を食り食へる。木々にとつては、すべてのものがよいのだ。夜も、死も、腐敗がバラを見て、その食物をバラに持つて行く。飽く事知らぬ草は、繁茂した森の奥で食事をしている。いつも、植物の歯の下の物のはっきりしないバリバリという音が聞えている。遠く、到る処で、田園の無限の広がりが養牧しているのが見られる。木は総てのものを、力強い成長の中で変形させている。砂が、粘土が、砂岩が必要なのだ。それらは、乳香樹にとつて必要であり、また常緑樹にも必要であり、茨にとつても必

要である。そして陽気な大地は、恐るべき森が食べているのを、じっと眺めている。

このように植物は鉱物を、動物は植物や他の動物を、人はすべてのものを貪り食べ、結局は、うち虫に食われてし  
うち虫のである。これは「うち虫の叙事詩」のテーマでもある。<sup>(87)</sup>

次に無生物の中の靈魂を歌ふ。

Les blocs, ces durs profils, les rochers, ces visages  
Avec qui l'ombre voit dialoguer les sages,  
Guettent le grand secret, muets, le cou tendu ;  
L'œil des montagnes s'ouvre et contemple éperdu ;  
On voit s'aventurer dans les profondeurs fauves  
La curiosité de ces noirs géants chauves ;  
Ils scrutent le vrai ciel, de l'Olympe inconnu ;  
Ils tâchent de saisir quelque chose de nu :  
Ils sondent l'étendue auguste, chaste, austère,  
Irritée, et parfois, surprenant le mystère,  
Aperçoivent la Cause au pur rayonnement,  
Et l'Énigme sacrée, au loin, sans vêtement,  
Montrant sa forme blanche au fond de l'insondable.  
O nature terrible ! ô lien formidable  
Du bois qui pousse avec l'idéal contemplé !  
Bain de la déité dans le gouffre étroit !

Farouche nudité de la Diane sombre

Qui, de loin regardée et vue à travers l'ombre,

Fait croître au front des rocs les arbres monstrueux !

O forêt !

[Le Noir. v. 371—390]

〔大意〕塊の群、これらの無情な横顔、岩々、賢者と話をしているのを亡霊が見ているこれらの顔、これらはおし黙って、首を伸ばし、偉大なる秘密を窺っている。山々の眼が開かれ、夢中になって凝視している。これらの禿頭の真黒な巨人の好奇心が鹿子色の深みに危険を冒しに行くのが見られる。彼らは、オリンポスの知らない真実の空を探究している。彼らは何か赤裸々なものを掴もうと努力している。彼らは敵かな、貞淑な、峻敵な、苛立った、時としては神祕を急襲する拡がりを探究し、清らかな放射に発生の根元を、そして遙か遠方に、測り知られぬものに真白な形を見せている、裸の聖なる謎を見ている。おお恐ろしき自然よ、おお凝視された理想と共に芽を出す森の驚くべき絆きずなよ！星が溢れる深淵の中の女神の入浴よ！遠くから凝視され、闇を通して見られているにも拘らず、岩々の面前で怪物のような木々を成長させている沈み勝ちなディアヌ（狩の神）ディアヌはニュウの想像の中で植物創造の神になっている）の荒々しい裸形よ、おお森よ！

半神獸は、このように原始の自然の恐しさを歌い上げると、メルキュールから借りたフリユートを投げ捨ててしまふのである。

Le sylvain avait fermé les yeux ;

La fûte que, parmi des mouvements de fêvre,

Il prenait et quittrait, importunait sa lèvre ;

Le faune la jeta sur le sacré sommet ;

Sa paupière était close, on eût dit qu'il dormait,



Mais ses cils roux laissaient passer de la lumière ;

[Le Noir. v. 390—395]

〔大意〕 半神獣は眼を閉じていた。彼が受けとり、離れた横笛は激情の動搖のさなかでは、彼の唇をうるさからせていた。半神獣は聖なる山頂にそれを投げ棄てた。眼瞼は閉じていた。恰も眠っているかのようにだった。しかし褐色の睫毛は光を通過させていた。

神に由来する自然万物の肉欲、栄養摂取、そして生殖を歌った後、創造主が一番始めに創造した混沌を歌うのである。何故なら神の欲望は存在の中でしか表現されないからであり、事物の始まりは無限の中の性行為だったからなのである。

《Salut, Chaos ! gloire à la Terre !

Le chaos est un dieu ; son geste est l'élément ;

Et lui seul a ce nom sacré : Commencement.

C'est lui qui, bien avant la naissance de l'heure,

Surprit l'aube endormie au fond de sa demeure,

Avant le premier jour et le premier moment ;

C'est lui qui, formidable, appuya doucement

La gueule de la Nuit aux lèvres de l'Aurore ;

Et c'est de ce baiser qu'on vit l'étoile éclore.

Le chaos est l'époux lascif de l'infmi.

Avant le Verbe, il a rugi, sifflé, henni ;

註釋 「半神獣」の起源と發展 (後三)

Les animaux, aînés de tout, sont les ébauches  
De sa fécondité comme de ses débauches.

[Le Noir. v. 396—408]

〔大意〕 礼を捧げよう、渾沌よ、大地に光榮を！ 渾沌は一体の神であり、その挙動はものの要素である。しかし彼のみがこの聖なる名、本源を持つてゐるのだ。時の誕生の遙か以前、始めの日、始めの時より前に、眠れる曙を住居の奥深くに急襲したのは渾沌なのである。恐ろしくも、夜の口を曙の唇に優しく押しつけたのは彼なのである。しかし、この接吻から星が生じるのが見られたのである。渾沌は無限の好色な夫である。神の言葉以前には、吼え、鋭い啼き声を発し、いなないた。絵てのものの中で最初に生れた動物達は、彼の乱行の果ての、またその生殖力の果てのスケッチなのである。

さて、万物の梯子を段々と昇り、次に動物の靈魂を、富と権力に奢る神々に説き始める。

Fuissiez-vous dieux, songez en voyant l'animal !

Car il n'est pas le jour, mais il n'est pas le mal.

Toute la force obscure et vague de la terre

Est dans la brute, larve auguste et solitaire ;

La sibylle au front gris le sait, et les devins

Le savent, ces rôdeurs des sauvages ravins ;

Et c'est là ce qui fait que la thesaliennne

Prend des touffes de poil aux cuisses de l'hène,

Et qu'Orphée écoutait, hagard, presque jaloux,

Le chant sombre qui sort du hurlement des loups.》

[Le Noir. v. 409—419]

〔大意〕 たとえあなた方が神々であろうと、動物を見て夢想せよ！ というのは、それは光（即ち神）でもなく、といって悪でもないのであるから。大地の総ての判然としない漠然たる力は、動物即ち儼かな孤独なる幼虫の中に存在するものである。頭が灰色の巫女はその事を知っている。又予言者達、人里離れた窪地をうろつき廻るこれらの人々がそれを知っている。そこそはテッサリヤの魔法使いの女に、ハイエナの腿の毛の束をとらせ、オルフェに、恐ろしい顔をして、殆んど嫉妬して娘の吼え声から出るメランコリックな唄を聴かしたものである。

では、存在の梯子の中に於ける人間の位置はいかなるものであろうか？ 詩人はこの点を特に研究した。ユゴは人間が猿から進化したものだというダーウインの説には心の底から憤慨をしていた。万物が贖罪の行為と、神から来る善意とによって、内在する隠蔽された神、即ち靈魂の、隠蔽の度が少くなり、梯子を一段一段昇って行く神に向つての上昇は前述した通りであるが、悪をなす事によって、内在する神の隠蔽の度を多くする靈魂の下降の流れもあるわけで、このように下降する靈魂はより下等な肉体の中に閉じ込められるのである。

*Puis, tout alla s'aggravant ;*

*Et l'éther devint l'air, et l'air devint le vent ;*

*L'ange devint l'esprit, et l'esprit devint l'homme.*

*(Les Contemplations. VI, XXVI, Bouche d'ombre. v. 73—75)*

〔大意〕 それから、すべては重くなって行った。靈氣は空氣となり、空氣は風となった。天使は精靈となり、精靈は人となった。

この下降の流れの中で人間が過失を犯したとすれば、その人の靈魂は動物の肉体の中に、或いは更に下等な植物や鉱物の形の中に閉じ込められる。しかして、動物は贖罪の時間が終ると再び人間となるのである。それ故、動物はすべて人間から失墜したものであって、動物である猿から人間が出来たのではない。嘗て人間であつたものが、猿に再肉

体化され、その猿が再び人間に戻る事はあっても、その逆は断じて不可なのである。神は人間に自由を与えるために前世を忘れさせたのであり、この忘却のおかげで、人は懷疑の力を得、動物の持たぬ理智を得たのである。

*Et, pour que, dans son vol vers les cieux, rien ne lie*

*Sa conscience aigüe et de Dieu seul remplie,*

*Dieu, quand une âme éclat dans l'homme au bien poussé,*

*Casse en son souvenir le fil de son passé ;*

*L'homme est l'unique point de la création*

*Où, pour demeurer libre en se faisant meilleure,*

*L'âme doit oublier sa vie antérieure.*

[Ibid. v. 419—422 et v. 426—428]

〔大意〕 そして、天空目指しての飛翔の中で、翼をもち、神のみで満たされている良心を、何物も束縛しないようにするために、神は善の方に押しやられた人間の中に靈魂が開花する時、その記憶の中の過去の糸を切るのである。……人間は万物の中では類を絶する地点であり、そこに於いては、より良くなって自由でいるためには、靈魂は前世を忘れねばならないのである。

これに反し、動物には、前世の己れの罪の記憶が残っていて、しかも神を見る事も出来る能力が具わっている。神と己れの罪を凝視しながら生きねばならない。虎は己れの獍猛さをひそかに恐れながら、虐殺を続けるのであるが、その事によって罰せられる事はない。それが虎に与えられた天罰なのだからである。神を見ながら神に近づく事が出来ないように、その殺戮を繰返し行わねばならないのである。

*L'homme ne voit pas Dieu, mais peut aller à lui,*

*En suivant la clarté du bien, toujours présente ;*

*Le monstre, arbre, rocher ou bête rugissante,*

*Voit Dieu, c'est là sa peine, et reste enchaîné loin.*

[*Ibid.* v. 430—433]

〔大意〕人は神を見る事が出来ない。しかし、常に現存する善の光を追う事によって、神の許に行く事が出来る。木、岩、吼えている獣などという怪物は神を見ているが、これこそは罰であり、鎖に繋がれて近づく事が出来ないのだ。

この動物の時代の長い苦しみ、人は前世を忘れているとはいっても、人の心の中に直観という形式で残されるのである。

「我々の確信する所によれば、もし人の靈魂なるものが眼に見えるものであったならば、人間の各個人は各々の種類の動物の何かに相当するものであるという不思議な一事を、人は明かに知るであろう。そして蠅から鷲に至るまで、また豚から虎に至るまで、総ての動物が人のうちに存在し、各動物が各個人のうちに存在しているという、思索家が辛うじて覗き見得る真理を、人は容易に認め得るであろう。時としてはまた数匹の動物が一緒に一人の人間のうちに在るといふ事をも。

動物は皆、我々の善徳及び悪徳の表象であって、我々の眼前に彷徨し我々の靈魂の眼に見える幻影に外ならない。神は我々を反省せしめんがためにそれを我々に示すのである。<sup>(38)</sup>」

この神意を担う靈魂……これは神の細分された破片に他ならないが……をオリンポスの神々も知るべきである。

*Tout la force obscure et vague de la terre*

*Est dans la brute, larve auguste et solitaire ;*

.....

《Et maintenant, ô dieux ! écoutez ce mot : L'âme !  
Sous l'arbre qui bruit, près du monstre qui brame,  
Quelqu'un parle. C'est l'Âme. Elle sort du chaos.  
Sans elle, pas de vents, le miasme ; pas de flots,  
L'étang ; l'âme, en sortant du chaos, le dissipe ;  
Car il n'est que l'ébauche et l'âme est le principe.

[Le Noir. v. 411—428]

〔大意〕 大地の総てのはつきりとしなない、茫漠たる力は、動物即ち、嚴かな孤独なる幼虫の中に存在するのである。……

「さあ今や神々よ、この靈魂という言葉に耳を傾ける。さわめく木の下、啼いている怪物の近くで誰かが喋っている。それは靈魂である。それは渾沌の中から生れてくるのだ。靈魂がなければ風もなく、毒気が充満し、波もなく池だけになってしまう。靈魂は渾沌から出て、それを霧散せしめる。なぜなら、渾沌は粗書きにすぎず、靈魂が根本なのだから。

しかしして、人間というものは、始め神が宇宙を創造した時には、

*L'ange devient l'esprit, et l'esprit devient homme.*

〔大意〕 天使が精霊になり、そして精霊が人間になった。

のであるから、清らかな、まだ俵せな存在であったのに、悪の天使即ちオリンポスの神々の如き者に支配されるに至って、苦しみの中に沈んでしまったのである。

*L'Être est d'abord moitié brute et moitié forêt ;*

*Mais l'Air veut devenir l'Esprit, l'homme apparaît.*

*L'homme ? qu'est-ce que c'est que ce sphinx ? Il commence*

*En sagesse, ô mystère ! et finit en démente.*

O ciel qu'il a quitté, rends-lui son âge d'or !》

[Le Noir. v. 429—433]

〔大意〕 存在は、始め半ば禽獣、半ば森である。しかし大気が精霊になる事を望み、人が現れる。人間、このスフィンクスは一体何なのか？ 人は智として始まり、痴呆の状態に終る。おお、彼が離れた天よ！ 人間に黄金の時代を返してくれ。

原始の人が賢者であり、物質文明が進んで来ると、人は痴呆の状態になるのは、内在する神の隠蔽度が物質文明の進歩、即ち物質の増大によって高くなるからなのである。詩人は、中途半端な文明が唯物主義をはびこらせ、考える人を無くし、人を痴呆の状態に置きつつあるのだと考え、次に真の進歩とは如何なる物かを説き明すのである。

オリンポスの神々は半神獣の歌に魅了されて、彼に立琴を与え歌を続けさせる。

### 第三部 薄 明

Il chanta l'Homme. Il dit cette aventure sombre :

L'homme, le chiffre élu, tête auguste du nombre,

Effacé par sa faute, et, désastreux reflux,

Retombé dans la nuit de ce qu'on ne voit plus ;

[Le Sombre. v. 463—466]

〔大意〕 彼は人間を歌った。あの陰鬱な不意の出来事を語った。数の嚴かな頭、己れの罪によって消されてしまった選ばれた数字であった人間を、不幸な退却、もう見られなくなったものから闇の中に再び落ちた人間を。

人間は己れの罪によって闇の中に落ち込んだのであるが、それはいかなる罪によってであらうか？ ユゴは詩篇

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

「神」の中で、キリスト教のアダムの原罪を描いている。

*Il fit l'ame, et la mit dans l'homme, son autel.*

*L'homme seul reçut l'ame en l'univers visible.*

*Dieu créa pour Adam ce faite inaccessible.*

*Au dessous de l'homme, ame, intelligence, esprit*

*La matière roula dans la pierre, fleurit*

*Dans la plante, et hurta dans la bête, sans vivre.*

*Voyant qu'il avait seul une ame, Adam fut ivre,*

*Il voulut la science et déroba le fruit.*

*C'est pourquoi Dieu jeta les hommes dans la nuit.*

[Dieu. II. VI. Le Griffon : Le christianisme, p. 1058—1059 de *Pétition de la Piétade*]

〔大意〕 神は靈魂を作り、それを彼の祭壇である人間の中に置いた。人のみが可視の世界で靈魂を受取った。神はアダムのために、この近づき難い峯を創造した。靈魂、叡智、精霊である人の下では、物質が石の中で転げ廻り、植物の中では花と咲き、獸の中では吠えていたが、生命を得るには到らなかつた。自分だけが靈魂を持っているのを見て、アダムは喜びに酔い痴れた。アダムは智を手に入れんと欲して果実を盗んだ。それ故、神は人間共を闇の中に投げ入れたのである。

キリスト教を代表して語っているこの禱文は、しかし合理主義を象徴する天使に論破されてしまうのである。詩人がキリスト教徒でない事は、前に何回も述べた通りで、キリスト教の三位一体、即ち三体の神が、あるという事が詩人の考える唯一の神という觀念と一致しなかつたのである。がしかし、幼い頃からの聖書の読書が彼の思想の基礎であり、旧約聖書の神秘的な解釈をするユダヤの神秘教に強い影響を受けているのであるから、人間の原罪というものを漠然と考えていたには違いないのである。しかし、この罪が何であるかという事は遂に明かにしていない。



Or, la première faute

*Fut le premier poids.*

[*Les Contemplations. VI, XXVI, Bouche d'ombre. v. 68—69*]

〔大意〕 さて、初めの罪科が最初の重さになった。

これだけである。

半神獸は、まだ人間だけが靈魂を持ち、重ねる罪科によって人間が動物や植物や鉱物の中に落ちて行く前の幸福な時代を歌う。だが、人が罪科を重ねている間に、神の光に満ちた世界は闇の世界に変わり、靈魂の墜落が始まる。この闇の世界では、到る処に残酷、無慈悲が充滿している。ユゴは、この残酷という最高の悪を、悪の天使、即ち時には神々と呼ばれている暴君や諸王に結びつけるのである。暴君の支配、即ち自由の欠除が憎しみを生むのであり、しかも彼ら悪の天使を神と考える迷信が無慈悲を生み出したのである。

Tristes hommes ! ils ont vu le ciel se fermer.

En vain, pieux, ils ont commencé par s'aimer ;

En vain, frères, ils ont tué la Haine infâme,

Le monstre à l'aile onglée, aux sept gueules de flamme ;

Hélas ! comme Cadmus, ils ont bravé le sort ;

Ils ont semé les dents de la bête ; il en sort

Des spectres tournoyant comme la feuille morte,

Qui combattent, l'épée à la main, et qu'emporte

L'évanouissement du vent mystérieux.

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

Ces spectres sont les rois ; ces spectres sont les dieux.

Ils renaissent sans fin, ils reviennent sans cesse ;

L'antique égalité devient sous eux bassesse ;

Dracon donne la main à Busiris ; la Mort

Se fait code, et se met aux ordres du plus fort,

Et le dernier soupir libre et divin s'exhale

Sous la difformité de la loi colossale ;

.....

Et dans le chant du faune on entendait gronder

Tout l'essaim des fœaux furieux qui se lève.

Il dit la guerre ; il dit la trompette et le glaive ;

La mêlée en feu, l'homme égorgé sans remord,

La gloire, et dans la joie affreuse de la mort

Les plis voluptueux des bannières flottantes ;

[Le Sombre. v. 477—492, et v. 498—503]

〔大意〕 悲しき人間共よ！ 彼らは空が閉されるのを見た。敬虔にも、彼らはまず初めにお互に愛し合おうとしたが無駄であった。兄弟同胞として、穢わしい憎悪、爪のある翼と七つの炎の口をもった怪物を退治したが無駄であった。哀しいかな！ カドムス（軍神マルスが差し向けた竜を殺して、その歯を蒔き、運命に挑戦した）の如くに、運命に挑戦した。彼らは獣の歯を蒔いた。そこからは、枯葉のようにくるくる廻り、手に剣をもつて戦い、神秘的な風の消滅が消滅させる怪物が生れる。それらの怪物が王であり、これらの妖怪が神々である。彼らは果しなく生れかわり、絶えず返ってくる。古代の平等は彼らの支

配下では申しきものになる。ドラコン（非情な法律を作ったアテナイの立法者）はヒュジリス（人身御供を殺したエジプトの残酷な王）と手をつなぎ、死は法となつて、最強の者の命令に従っている。そして、自由な、神性の最後の溜息が巨大な法律の異形の下から立ち昇っている。……半神獣の歌の中では、立ち昇る猛り狂った災いの群が唸り声を上げているのが聞えていた。彼は戦争を語った。ラッパや剣を語った。火のような混戦を、悔もなく絞め殺された人を、誉れを、死の恐ろしい歓喜の中でひらめいている軍旗の淫らな驕を。

半神獣は、暴君の下に喘いでいる人々の悲惨を歌った。闇の中にいる人間に本当の愛はないのだ。

*l'amour qui le séduit*

*Est fils de l'Indigence et de l'Air de la nuit ;*

*Tous ses instincts sacrés à la fange aboutissent ;*

[Le Sombre. v. 525—527]

〔大意〕 人を誘惑する愛とは、靈魂の欠如と闇の大氣の息子である。人の聖なる本能はすべて泥になり終るのである。「泥と蒼空で出来た」半神獣は、事実己れの肉欲の激しさには強い嫌悪を感じていたのである。

*Oui, mon malheur irréparable,*

*C'est de pendre aux deux éléments,*

*C'est d'avoir en moi, misérable,*

*De la fange et des firmaments !*

*Hélas ! hélas ! c'est d'être un homme ;*

*C'est de songer que j'étais beau,*

*D'ignorer comment je me nomme,*

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉田）

*D'être un ciel et d'être un tombeau !*

*C'est d'être un forgeron qui promène*

*Son vil labeur sous le ciel bleu ;*

*C'est de porter la hotte humaine*

*Où j'avais vos ailes, mon Dieu !*

*C'est de traîner de la matière ;*

*C'est d'être plein, moi, fils du jour,*

*De la terre du cimetière,*

*Même quand je m'écrite : Amour !*

*[Les Contemplations. VI, XV, A celle qui est voilée. v. 101—116]*

〔大意〕そうなのです。私の取り返しのつかない不幸は二つの要素に吊り下っている事なのです。惨めな事に、私は自分の中に泥と天空とを持っているのです。

悲しいかな、哀れなるかな！これが人であるという事なのです。これが私が美しかったと夢見る事であり、いかに自分が名付けられるかを知らず、空であり墓である事なのです。

それは、青空の下に賤しい労苦を連れて歩く徒刑囚たる事であり、私が、おお神よ！あなたの翼を入れていた人間の負籠を背負っている事なのです。

それは物質を引きずって行く事であり、私が、愛、と叫ぶ時にすら、太陽の子である私が、墓場の土で一杯になる事なのです。

半神獣のこの啓示の歌に禽獣さえも耳を傾け、その傍にやうて来た。半神獣は更に続ける。

L'homme ébauché ne sort qu'à demi du chaos,

Et jusqu'à la ceinture il plonge dans la brute;

Tout le trahit ; parfois, il renonce à la lutte.

Où donc est l'espérance ? Elle a lâchement fui.

(Le Sombre. v. 554—557)

〔大意〕粗書きされた人間は、渾沌からやうと半分だけ出ているに過ぎないで、しかも腹帯の所までは禽獣の中に沈んでいるのだ。すゝてのものが人を裏切る。時として彼は鬭争をあきらめる。一体どこに希望があるというのだ。希望は卑怯にも逃げ去って行った。

だが、すべてが神から生れたものである以上、総てのものには赦される権利がある。人は、とにかく上半身だけは泥から抜け出しているのである。ユゴは科学の進歩に期待をかけていた。進歩……彼の頭にこびりついて離れないドグマであり、詩人の命取りの言葉である。

Misérable homme, fait pour la révolte sainte,

Ramperas-tu toujours parce que tu rampas ?

Qui sait si quelque jour on ne te verra pas,

Fier, suprême, ateler les forces de l'abîme,

Et, dérobant l'éclair à l'Inconnu sublime,

Lier ce char d'un autre à des chevaux à toi ?

[ Le Sombre. v. 584—589 ]

「大意 聖なる反抗のために作られた憐れな人間よ、お前は昔、地上を這っていたからといって、いつまでも這っているつもりなのか？ いつの日にか、お前が奈落の力を駕ぎとめ、至上の知られざる者（神）から光を盗み、お前の馬に他の人のあの車を、意気揚々と、崇高に結びつけるのが見られないかどうか、誰が知ろう？」

ユゴギ、まず喜ばせたのは蒸気機関車である。一八三七年、ジュリエットと恒例の夏の旅で、アンヴェールからブリュッセルまでの往復を始めて蒸気機関車に乗った時の驚きを、妻アデルに書き送っている。

一八三七年八月二十二日。アンヴェールにて。

「スピードは前代未聞です。鉄道の傍の花が花ではなくなってしまう、いくつかの汚点しみ、というより寧ろ赤や白の生垣になってしまふのです。点はなくなり、すべてが線になってしまいます。麦は大きな黄色の髪の毛となり、紫首ムラサキは緑色の長い編毛（一）なのです。」

Oui, peut-être on verra l'homme devenir loi,

Terrasser l'élément sous lui, saisir et tordre

Cette anarchie au point d'en faire jaillir l'ordre,

Le saint ordre de paix, d'amour et d'unité,

Dompter tout ce qui l'a jadis persécuté,

Se construire à lui-même une étrange monture

Avec toute la vie et toute la nature,

Seller la croupe en feu des souffles de l'enfer,

Et mette un frein de flamme à la gueule du fer!  
On le verra, vannant la braise dans son crible,  
Maître et palefrenier d'une bête terrible,  
Criant à toute chose: Obéis, germe, nais!  
Ajustant sur le bronze et l'acier un harnais  
Fait de tous les secrets que l'étude procure,  
Prenant aux mains du vent la grande bride obscure,  
Passer dans la lueur ainsi que les démons,  
Et traverser les bois, les fleuves et les monts,  
Beau, tenant une torche aux astres allumée,  
Sur une hydre d'airain, de foudre et de fumée !

[Le Sombre. v. 590—608]

〔大意〕 然り、おそらくは将来、人が法になり、自分の支配下にある要素を説き伏せ、この混乱を掴み捕え、ねじ曲げ、そこから遂には秩序を、平和、夢、一致の聖なる秩序を噴出させ、嘗て人を苦めた総てのものを馴化し、総ての生命と総ての自然とをもつて、見なれない乗馬を自らに造りあげ、地獄の息吹きのような背に鞍を置き、炎の馬銜を鉄の口にはめるのが見られるであろう。人が篩の中で総ての燄をふるい分け、恐るべき獣の主人、即ち馬丁になり、総てのものに向つて、「命令に従え。芽を出せ。生れろ。」と叫び、青銅と鋼鉄の上で研究の結果手に入ったあらゆる秘密で出来ている馬具を調整し、風の手から黒い大きな手綱をとり、悪魔のように光の中を通り過ぎ、星々をもつた燃えさかる松明（即ち、火の粉）を持ち、真鍮と電光と煙の怪蛇の上を、森や川や山を、美しく横切つて行くのが見られるであろう。

次は蒸気船である。

詩篇「半神獸」の背景と意義（杉山）

Qui sait si quelque jour, grandissant d'âge en âge,  
Il ne jettera pas son dragon à la nage,

Et ne franchira pas les mers, la flamme au front !

[Le Sombre. v. 611—613]

〔大意〕 いつの日か、人は年々大きくなり、自分の竜を泳がせ、炎を額にいただいて海を渡らないかどうか誰が知ろう。

最後は、空の征服、航空機である。詩人は一八五〇年から五一年にかけて、パタンが設計した操縦の出来る飛行船にひどく興味を唆られ、大空の征服も近い事だ、そうなれば国境が無くなり、従って戦争もなくなるものと信じ、詩想を掻き立てられて、詩篇「満天」<sup>(2)</sup>を「半神獸」と同じ時期に書き上げたのである。

Superbe, il plane, avec un hymne en ses agrès ;

Et l'on croit voir passer la strophe du progrès.

Il est la nef, il est le phare !

L'homme enfin prend son sceptre et jette son bâton.

Et l'on voit s'envoler le calcul de Newton

Monté sur l'ode de Pindare.

Le char haletant plonge et s'enfonce dans l'air,

Dans l'éblouissement impenétrable et clair,

Dans l'éther sans tache et sans ride ;

Il se perd sous le bleu des cieux démesurés ;

Les esprits de l'azur contemplant effarés



*Cet englouisement splendide.*

[*La Légende des Siècles : LVIII. II. Plein Ciel. t. II. p. 388, v. 76—87*]

〔大意〕 それ（空駆ける馬車）は装具の中の讃歌と共に美事飛翔する。すると、進歩の一節が通るのを見ているかのような気がする。それは小舟であり、燈台である。人は遂に自分の王杖をとり、棒切れを投げ棄てる。ピンダレスのオードの上に乗ったニュートンの計算が飛び去るのが見える。

その車は喘ぎながら昇り、大気の中に、貫く事の出来ぬ澄んだ眩暈の中に、汚れも皺もない精気の中に入り込んで行く。測り知られぬ天界の青の中に、消え去り、蒼穹の精霊が驚いて、この素晴らしい消滅を凝視している。

これが「光に向う果しなき上昇運動」<sup>(3)</sup>であり、進歩である。人間の罪科が人間に附与した重量を征服するのだ。

Qui sait si quelque jour, brisant l'antique affront,

Il ne lui dira pas : Envole-toi, matière !

S'il ne franchira point la tonnante frontière,

S'il n'arrachera pas de son corps brusquement

La pesanteur, peau vile, immonde vêtement

Que la fange hideuse à la pensée inflige,

De sorte qu'on verra tout à coup, ô prodige,

Ce yer de terre ouvrir ses ailes dans les cieux !

[*Le Sombre. v. 614—621*]

〔大意〕 一つの日にか、人が昔の恥辱を打ち破り、物質に「さあ飛んで行け！」と言わないかどうかを誰が知ろう。また雷鳴轟く境界線を突破しないかどうか、人が自分の身体から、その賤しい皮膚であり、見るのも不快な泥が思想に負わせる忌わし

い着物である重量を肉体から突然奪いとらないかどうかを誰が知ろう。そうすれば、おお奇蹟よ、この地上のうじ虫が天上に翼を開くのが見られるであらう。

栄ある青空に昇り、神に近づく事が、科学の進歩によって可能になるのだ。だとすれば、

Ramperas-tu toujours parce que tu rampas ?

[Le Sombre v. 585]

〔大意〕 お前は這っていたからと這っていつまでも這っているつもりなのか？

ぢぢあ、

Torse ailé, front divin, monte au jour, monte au trône,

Et dans la sombre nuit jette les pieds du faune !》

[Le Sombre. v. 635—636]

〔大意〕 翼を持てる胴体よ、神の顔よ、日の光の方に登って行け。王座に登れ、そして薄明の夜の中へ半神獸のその足を捨ててしまえ！

## 第四部 星 空

半神獸は、奔流の中から頭だけを上げて水面に顔を出した人のように深く息を吸い、一瞬歌を中止し、再び始める。

Dieux, vous ne savez pas ce que c'est que le monde ;

Dieux, vous avez vaincu, vous n'avez pas compris.

[L'Étoile. v. 644—645]

〔大意〕 神々よ、あなた方は世界の何たるかを知らない。神々よ、あなた方は征服をしたが理解しなかった。

詩人がナポレオン三世の事を念頭に置いている事は明らかである。暴君は力で征服する事は出来ても、人を、この世界を理解する事は出来ないのだ。オリンポスの神々も、征服し、信者を持つてはいる。だが失墜した悪の天使であるこれらの神々の上には、真の天使、万物の梯子の中で最も神に近い位置を占め、「神にとつては被造物であり、私達にとつては神々である」<sup>(1)</sup>首天使がいて、悪の天使を見下しているのである。

*Vous avez au-dessus de vous d'autres esprits,*

*Qui, dans le feu, la nue, et l'onde et la brume,*

*Songent en attendant votre immense ruine.*

[L'Épique. v. 646—648]

〔大意〕 あなた方の遙か上方には、他の精霊がいて、火、雲、波や霧雨の中で、あなた方の広大な崩壊を待ちながら夢想しているのだ。

オリンポスの山の上では、

…*Les dieux, ces parvenus, règnent, et, seuls debout,*

*Composent leur grandeur de la chute de tout.*

[La Légende des Siècles. IV. *Entre géants et dieux. IV. Le Titan 1. sur l'Olympe p. 66. (4. I.)*]

〔大意〕 神々、これらの成上り者が支配し、自分たちだけが立ち上り、すべてのものの墜落で自分達の偉大さを作り上げている。

しかし、真の神は無限であり、測り知れないものである。しかるに彼らは、肉体を持ち、人の目に見えるという限界を持つてゐる。それ故、本当の意味に於ける神とは縁遠い存在なのである。

Sachez ceci, tyrans de l'homme et de l'Érèbe,  
Dieux qui versez le sang, dieux dont on voit le fond,  
Nous nous sommes tous faits bandits sur ce grand mont  
Où la terre et le ciel semblent en équilibre,  
Mais vous pour être rois et moi pour être libre.

[L'Étoile. v. 652—656]

〔大意〕 次のような事を知れ、人と地獄の暴君よ、血を流し、奥底が見える神々よ、私達は天と地が均衡を保っているように見えるこの偉大なる山の上では、皆山賊になったのだ。だが、君達は王になるため、私は自由になるために。

神々が王になり、王であるために人々の自由を奪う山賊になったのとは反対に、この半神獸は下半身を泥の中から引き抜き、悪から解放されるために、自由を強奪する神々と斗う山賊となったのである。この半神獸は半ば動物であるために、かすかに神の姿を認め得るのである。だが普通の人は、前世の記憶の糸を切られているので、苦しみ悩みつつ贖罪を続けねばならないので、真の神の姿を見る事が出来ない。そこから偶像の崇拜、誤てる宗教が生れるのである。

Quelqu'un est.

Mais celui-là, jamais l'homme ne le connaît.  
L'humanité suppose, ébauche, essai, approche ;  
Elle façonne un marbre, elle taille une roche,  
Et fait une statue, et dit ; Ce sera lui.  
L'homme reste devant cette pierre ébloui ;

[L'Étoile. v. 664—670]

〔大意〕 誰かがいる。しかしその人を、人間は絶対に知る事はない。人類は想像し、描写し、いろいろ試み、近ずいて行く。大理石を細工し、岩を切り、一つの彫像を作り、「これこそは彼神」であろう。」という。人は、この石の前に出て、目も眩む思ふをしているのだ。

かくの如き偶像崇拜の対象であるオリンポスの神々は、必ず消滅する運命にあるのだ。

Car Delphe et Pise sont comme des chars qui roulent,

Et les choses pu'on crut éternelles s'écroutent

Avant qu'on ait le temps de compter jusqu'à vingt.》

[L'Étoile: v. 679—681]

〔大意〕 とくうのはデルフ（イポロンの神殿）とピズ（ジュピテルの聖堂）は転がり行く二輪馬車の如きものであり、永遠不滅と信ぜられたものは皆二十数える暇もなく崩壊しているのだ。

半神獣の身体は、こゝろ歌い終ると際限もなく大きくなり始めた、際限もなく……

Sa chevelure était une forêt ; des ondes,

Fleuves, lacs, ruisselaient de ses hanches profondes ;

Ses deux cornes semblaient le Caucase et l'Atlas ;

Les foudres l'entouraient avec de sourds éclats ;

Sur ses flancs palpitait des prés et des campagnes,

Et ses difformités s'étaient faites montagnes ;

Les animaux, qu'avaient attirés ses accords,

Daims et tigres, montaient tout le long de son corps ;

Des avrils tout en fleurs verdoyaient sur ses membres ;

Le pli de son aisselle abritait des décembres ;  
 Et des peuples errants demandaient leur chemin,  
 Perdus au carrefour des cinq doigts de sa main ;  
 Des aigles tournoyaient dans sa bouche béante ;  
 La lyre, devenue en le touchant géante,  
 Chantait, pleurait, grondait, tonnait, jetait des cris ;  
 Les ouragans étaient dans les sept cordes pris  
 Comme des moucheron dans de lugubres toiles ;  
 Sa poitrine terrible était pleine d'étoiles.

[L'Étoile, v. 691—708]

〔大意〕 彼の髪の毛は森となり、海、川、湖が奥深い腰部から流れ出ていた。二つの角はコカリス山や巨人アトラスのように見えた。雷火が鈍い爆発音と共に彼を取り囲んだ。脇腹の上では、牧場や田畑が鼓動し、その不恰好な形は山になっていた。彼の妙なる和音に恵き寄せられた動物、鹿や虎は身体にそって登っていた。花盛りの四月が四肢の上で緑色になり、腋の下の鬘は十二月を隠していた。手の五本の指の四辻で道を迷い、彷徨している人々が道を尋ねていた。鴛はパツくりと開けた彼の口の中で旋回していた。立琴は彼に触れていたために、巨大になり、歌い、泣き、唸り、雷鳴を轟かせ、叫び声を投げつけていた。大旋風は陰惨な布畏の中の羽虫のように、七本の絃の中に捕えられていた。彼の胸は星で一杯になっていた。

こうして巨大になった半神獸は、居並ぶ神々に向って、尚も彼らがいかに邪悪な神々であるかを教えるのである。眞の神は善であり、無限である。その反対概念の悪は制限、拘束であらねばならない。最も不吉なる制限は神についてゐる。このために邪教が生れ、人間は墮落する。これは人間の悪の起源であるばかりでなく、すべての悪の起源である。

Oh muitle l'effet en limitant la cause ;

Monde, tout le mal vient de la forme des dieux.

On fait du ténébreux avec le radieux ;

Pourquoi mettre au-dessus de l'Être, des fantômes ?

[L'Étoile. v. 712—715]

〔大意〕 人々は根源を制限して結果の手足をもぎとっている。世界よ！すべての悪は神々の形から生れるのだ。人は闇を作るに輝かしきものをもつてする。何故、神の上に幽霊を置くのか？

人間がこれらの邪悪な神々から解放されるという事は、より下等なものの解放でもあるのだ。というのは禽獣は、懲罰のために動物の肉体に閉じ込められた人間に過ぎないからである。人間の再生は、動物の残酷さ、そして万物の残酷さの解放であり、終末である。

L'azur du ciel sera l'apaisement des loups.

[L'Étoile. v. 725]

〔大意〕 天の青は狼の鎮静となるであろう。

この半神獣こそは詩人自身である。ユダヤの神秘教徒アレキサンドル・ウエイルが、ユゴに対して、エホバの前で無に帰すると同じ態度で接した事は前述の通りである。

「ユゴは、自分が神から靈感を受けていると思うだけでは充分ではないのだ。彼は自分が神と同じものであり、彼の言葉がエホバのそれと同じように創造するのではなくてはならないのである。彼は闇に向つていう、『光あれ！』と。彼は光が世界を照らすために己れの前で闇を追い払うのを自分の目で見た事であろう。これは思い上がりであろうか？ 或いは詩的幻覚であろうか？ これは文学の歴史の中でも類例のない意力の現象である。」<sup>(3)</sup>

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

ジュリエットの絶対的崇拜と服従が詩人を益々大胆にした。一八四一年二月九日の愛の手紙の中で、彼女はこう書いている。

「……何故かといえは、あなたの天性は神のようで、あなたは神様と同じ位善いお方なのですもの。」<sup>(4)</sup>

彼女は手紙の中で「私の神様」という呼びかけを一八三七年には既に使っている。<sup>(5)</sup> ユゴの家族の態度も、ジュリエットとほぼ同じであり、息子シャルルが自分の恋人オズィを父に譲ったのも、<sup>(6)</sup> この父の絶対権力の表われである。

詩人は己れの内にある神が、宇宙の神秘を語り、詩を書くのだと信じていたので、詩句を書いていると入神の状態になり、自己意識が消え、後になって、自分が神であったとしか意識されないような恍惚の状態<sup>(7)</sup>で神秘の入口に立ち、詩句を書き続けて行ったのである。

半神獸は歌う事により、意識の中で自己の肉体が無限に膨張し、万物そのものに自己同化を成し遂げたのである。

Place à Tout ! Je suis Pan ; Jupiter ! à genoux.》

[L'Étoile, v. 726]

〔大意〕 全に席を譲れ！ 我こそは総て（パンはギリシャ語で「すべて」の意味であり、しかもサチール、フォーヌ等と同言語のパン神、即ち半神獸でもある。）である。ジュピテル！ 膝まずけ！

## 詩の魔力

ドゥニ・ソーラが指摘しているように<sup>(1)</sup>、ユゴの如き異常な心の持主の場合、判断を下す事は理解する事とはならな



い。ユゴは、太古の偉大なる宗教創始者であり、神に接した経験のある偉大なる原始の神秘主義者であって、断じて文明人ではないのである。それを我々文明の世の者が、裁き、批判をする事が出来るであろうか？ 神が常に眼前にいるという、あまりにも個人的な、あまりにも強力な直観は遂には個性というものを破壊してしまう。我々が測り知れぬ思い上りと感じているものは自我の感覚の喪失から来ているのである。ユゴの自我は他と切り離された実存として存在する事をやめ、宇宙や神に同化してしまうのである。こういう状態で詩人が「私」という時、話しをしているのはもはやユゴでなく、宇宙であり神である。彼は「廻転テーブル」をして話させているという意識を全く持っていない。彼の没自我は此の時に於いて完全無欠である。

宗教に於いて、彼はあらゆるドグマを徹底的に破壊した。カトリックをも。

*Monde I tout le mal vient de la forme des dieux.*

世界よ！ 繪の悪は神々の形から生れるのだ。

だが、ドグマこそは彼自身に最も近いものだったのである。

詩人の論理を裁き、そこに矛盾を見出す事は極めて容易である。

彼は、神は孤独でないために創造をしたという。だが神は始め己れの孤独をいかにして知り得たというのか？ 神のみが存在するという事は存在しないと同じ事なのに。

また、天使の或る者が神に反抗をして、そのために創造がなされたという。しかし、全き善の神の分身である天使が、いかなる理由で、反抗をしたのか？ これに対する解答は、何処を探しても見出せない……「亡霊の口の語りし事」にも「神」にも「悪魔の最後」にも。

フェルナン・グレッグは此のような矛盾をつき、

詩篇「半神獣」の背景と意義（杉山）

「……それ(ユゴの哲学)は体系も首尾一貫した所もない。ユゴは『半神獣』の中では汎神論者として登場する(Place à Tout! je suis Pan; Jupiter! à genoux)にも拘らず、しかもその同じ詩の中で一体の人格的な神を肯定し続けている。彼は“Quel'un est.”と半神獣に宣言させているのだ。」<sup>(2)</sup>

と論じているが、この事は、前述の如く、詩人にとっては矛盾ではあり得なかつたのである。

グレッグは更に、ユゴの偉大さは、『哲学』とは、いわば正反対の立場にある『言葉』の中、描写の中に<sup>(3)</sup>あるのだと論じている。彼の説に耳を傾けよう。

「詩の冒頭、半神獣の紹介の部分は、男らしく簡明な力に満ち、いうならば荘嚴な、非常に威嚴のある詩想に満ちてゐる。

Un satyre habitait l'Olympe, retiré

Dans le grand bois sauvage au pied du mont sacré ;

Il vivait là, chassant, rêvant, parmi les branches ;

Nuit et jour, poursuivant les vagues formes blanches,

Il tenait à l'affût les douze ou quinze sens

Où'un faune peut braquer sur les plaisirs passants.

そして、エルキュールが神々の集まりの前に此の半神獣の耳を掴んで連れて来た後の、太陽の馬のくだりほど美しい詩句がフランス語に存在するであろうか？

Faune ayant de la terre encore à ses sabots,

Il frissonnait devant les cieus serrens et beaux ;

Quoique à peine fut-il au seuil de la caverne  
De rayons et d'éclairs que Jupiter gouverne,  
Il contemplait l'azur, des pléiades voisin ;  
Béant, il regardait passer, comme un essaim

*De molles nudités sans fin continuées,*

*Toutes ces déités que nous nommons nuées.*

(又又した體の韻律と「e」の繰返しによつて空中に夫々同じような形で次々と現れる雲を摸した素晴らしい二行の詩句)

C'était l'heure où sortaient les chevaux du soleil ;

Le ciel, tout frémissant du glorieux réveil,

Ouvrait les deux battants de sa porte sonore ;

Blancs, ils apparaissaient formidables d'aurore ;

Derrière eux, comme un orbe effrayant, couvert d'yeux,

Éclatait la rondeur du grand char radieux ;

On distinguait le bras du dieu qui les dirige ;

Aguilon achevait d'atteler le quadrigé ;

Les quatre ardents chevaux dressaient leur poitrail d'or ;

Faisant leurs premiers pas, ils se cabraient encor

Entre la zone obscure et la zone enflammée ;

De leurs crins, d'où semblait sortir une fumée

De perles, de saphirs, d'onyx, de diamants,

Dispersée et fuyante au fond des éléments,  
Les trois premiers, l'œil fer, la narine embrasée,  
Secouaient dans le jour des gouttes de rosée ;  
Le dernier secouait des astres dans la nuit.

これ程見事にフランス語に描写させた人は未だ一人として存在しなかった。ここにあるのは言葉で書かれた広大な絵画であり、巨大なルーベンスの言葉への転位である。ここでは華麗さの中に何か英雄的なものが含まれ、人の目をもった馬が勇み立ち、朱に染った鼻がテオフィール・ドゥ・ヴィオーの思い切った、美しい詩句を借りれば、「世界の光を嘶きと共に嘔き出し」<sup>(5)</sup>ているのであり、その傍に居並ぶ神々のトルソの縮図が、輝き亘る光線の中に見られるのである。一言でいうならば、それは最高の高度に駈け登り、他を睥睨しているのである。

ここでは、ユゴは芸術の偉大な、雄々しい担い手であり、一世紀にやっと二・三人現れるかどうかという、天下に人間の偉大さを証明するために、時代から時代へと鎖の如く続いているダンテ、ミケランジェロ、ルーベンス、レンブラント、ピュジェ、ベートーヴェン、ワグネル、ロダンの如き、美の造化の神の一人である事を自ら証明しているのである。この「半神獸」の中で、ユゴは丁度ミケランジェロとルーベンスの中間に位置しているのである。

また、これとは対照的に、少し先のヴィーナスの出現は、何と強烈な夾かさを呼吸していることであろう。

Cypris, sur la blancheur d'une écume qui fond,  
Reposait mollement, nue et surnaturelle,  
Ceinte du flamboioient des yeux fixés sur elle,  
Et, par moments, avec l'encens, les cœurs, les vœux,

Toute la mer semblait flotter dans ses cheveux :

すゞこの後にシユポテルが現れる。ユゴは此のポートルトを欠かす事は出来なかつた。というのは、彼の天上に於ける兄弟であり、ユゴは言葉のゼウスなのであるから。

Jupiter aux trois yeux songeait, un pied sur l'aigle ;

Son sceptre était un arbre ayant pour fleur la règle ;

On voyait dans ses yeux le monde commencé ;

Et dans l'un le présent, dans l'autre le passé ;

Dans le troisième errait l'avenir comme un songe ;

... Selon qu'ils s'écartaient ou s'approchaient, au gré

De ses décisions élémentes ou funèbres,

Son pouce et son index faisaient dans les ténèbres

S'ouvrir ou se fermer les ciseaux d'Atropos ;

La radieuse paix naissait de son repos,

Et la guerre sortait d'un pli de sa narine ;

Il méditait, avec Thémis dans sa poitrine,

Calme, et si patient que les sœurs d'Arachné,

Entre le froid conseil de Minerve émané

Et l'ordre redoutable attendu par Mercure,

Filaient leur toile au fond de sa pensée obscure.

これらギリシヤ風な詩句は、ギリシヤ語を殆んど知らなかつたユゴからすれば、驚くべきといつてもよい詩句である——とはいつても、この偉大な芸術家は己れの欲する事をしただけの事なのであるが——これらのギリシヤ風の詩句は素晴らしい子孫を得たのである。それは多くのバルナツシヤンに、特に生れつきその一人であつたマラルメに美しい詩句の靈感を授けたのである。「半神獸の午後」の半神獸は、ユゴの

…Chassant, rêvant, parmi les branches ;

Nuit et jour poursuivant les vagues formes blanches,

(木の枝に取り囲まれて狩をし、夢想し、日夜、漠たる白い姿を追い求めている)

半神獸、言葉少なに描かれ、暗示的で——しかも放縦な半神獸でなくて何であらうか？

半神獸の出現を眼のあたりに見た神々の目を眩まさんばかりの爆笑は、

Et l'Hiver se tenait les côtes sur le pôle.

の如き、また特に、

Le tonnerre n'y put tenir, il éclata ;

の如き、かなり疑わしい趣つかの詩句で美観を損ねているので、言及しない事にしよう。

しかし、もっと先の森羅万象を解き明す半神獸の歌は、フランス語に、最も華麗なフランス語に翻譯された「牧歌」や「農耕詩」のエピソードの如きものである。ヴェルギリウスばかりでなく、ここでは、「第五の本」のルクレチウスも「仕事と日々」のヘシオドスも、「モイーズ」のヴィニイと共に「諸世紀の伝説」全体の源泉にあたる「盲人」のシェニエと手をつないでいるのである。

II enchaînait de tout les semences fécondes,

Les principes du feu, les eaux, la terre et l'air,  
Les fleuves descendus du sein de Jupiter, etc...

さて、天才といわれる人々の信じ難い出会いなのであるが、ユゴはシェニエを通して、ヴェルギリウス、ヘンオドス、ルクレチウスを想い起させ、その後で、ワグネルの予告をしている。第二部の歌の冒頭で、実際、彼はその細部に到るまで「ラインの黄金」の前奏曲を予知していたかのように見えるのである。

Le satyre chanta la terre monstrueuse.

L'eau, perfide sur mer, dans les champs tortueuse,

Sembla dans son prélude errer comme à travers

Les sables, les graviers, l'herbe et les roseaux verts ;

曲りくねっている水、葦の中のその流浪、すべてがそこにある——前奏曲という単語まで、そして、「ラインの黄金」の中で基調となる変ホ調<sup>(8)</sup>から、常により豊かな、よりよく響く紺碧のハーモニーを少しづつ引き出して行くクレッチェン、の《効果》に至るまで。

Puis il dit l'Océan, typhon couvert de baves,

Puis la Terre lugubre avec toutes ses caves,

Son dessous effrayant, ses trous, ses entonnoirs,

Où l'ombre se fait onde, où vont des fleuves noirs...

……また、「転身賦」のオヴィディウスといえども、半神獣の「転身」の中の、ユゴの力や生々しさの四分の一にも及ばない。

Tout en parlant ainsi, le satyre devint  
Démesuré ; plus grand d'abord que Polyphème,  
Puis plus grand que Typhon qui hurle et qui blasphème,  
Et qui heurte ses poings ainsi que des marteaux,  
Puis plus grand que Titan, puis plus grand que l'Athos ; ...  
Sur ses flancs palpitaient des prés et des campagnes,  
Et ses difformités s'étaient faites montagnes ;  
Les animaux, qu'avaient attirés ses accords,  
Daims et tigres, montaient tout le long de son corps ;  
Des avrils tout en fleurs verdoyaient sur ses membres ;  
Le pli de son aisselle abritait des décombres ;  
Et des peuples errants demandaient leur chemin,  
Perdus au carrefour des cinq doigts de sa main ;  
Des aigles tournoyaient dans sa bouche béante ;  
La lyre, devenue en le touchant géante,  
Chantait, pleurait, grondait, tonnait, jetait des cris ;  
Les ouragans étaient dans les sept cordes pris  
Comme des mouchoirs dans de lugubres toiles ;  
Sa poitrine terrible était pleine d'étoiles.

半神遊の「偉大なパン(すべこ)そのもの中への此の膨張は、巧妙な、又同時に荘嚴な理念である。更めて



告白すると、私は終結の部分の哲学はあまり好きではない。半神獣は、ここでは、あまりにも立派な予言者である。すべてを予言し、鉄道、蒸気船、操縦可能な気球を予告する。いかに半神であるとはいえ、それはあんまりだ。

半神獣は歌によって、ただ歌う事のみによって限りなく巨大になり、オリンポスの神々を前にして、「ジュピテルよ、膝まづけ！」と叫び得たのであり、グレッグの説はその点に於いて全く正当である。

更に言葉の面から此の詩を詳しく分析し、純粋詩という観点に立つて、この詩にユゴの詩法を見出しているアルフレッド・グラウザー<sup>10</sup>の説を次に紹介しよう。

この詩にあつては、総てが増大である。まず「哀れな田舎者」から「すべて」(Pan)になって、その前でジュピテルが膝まづく半神獣の肉体的な増大。この肉体の増大に詩人の増大、即ち、靈感のどん底から出発し、ゆっくりと詩的解放に向つて道を切り拓いて進む詩人の苦しい上昇が対応している。彼は、まず、びくびくしながら「全然使えなくなつてしまつた野笛」の事を哀れっぽく歌い始める。彼はメルキュールが微笑みながら渡してくれたフリユートに、暫くの間、助けられるが、間もなくそれを投げうって、歌い、泣き、唸り声をあげ、雷鳴を轟かせる巨大な立琴をとる。彼は常に歌によつて神々の注意を引き止めるのである。ヴィナスすら急に彼を美しいと思う。「すべて」になる此の半神獣こそは神々から自らを解放する詩人で、自ら神になり、靈感を思いの儘に支配し、外からの靈感が無くても一向に平気で、何か不可能な力の勝利としてではなく、天才の所有と創造として、己れの「水晶の魂」の最も小さい動きにも従う靈感を内に持っている。その靈感は自分自身の内からの不可

思議な贈物なのである。ユゴはもはやミューズの神を認めない。彼自身がミューズなのである。自分の奇蹟的な上昇の中で、彼にとっては総てが可能になる。彼は常々、神の力を借りない事には慣れている。クロードルのいう処によれば、単語という収穫したブドウをそこで踏みつける言葉の醸造桶から、ただでは出て来ない詩人なのである。「それを入れるべき骨壺は永遠に空しき」マラルメの「夕べの夢」<sup>(10)</sup>とは反対に、ここでは、あらゆるものが、不死鳥の奇蹟が果しなく、常に繰返されている壺の中に納められているのである。

\* \* \*

世界の最初の時の神秘的絵画である「暗黒」は靈感の迷宮の中にいる詩人の最初の努力である。詩人は創世紀の半ば闇の中であつて彷彿している。彼は闇が何を差し出すかも知らぬ儘に前進する。それは此の世の第一歩の如くに苦しく、混沌としている。ゆっくりと一つの声が生れ、岩穴から出て来るかの如くに低く、詩人の困難を歌う。重苦しく、同じ子音が積重ねられ、同じ母音が繰返された曲りくねった詩句を、その音の水液が意味の水液と同じように満たしてしまふ。詩の内容は、ここでは地上の物質と同じ位に熱くなる。母なるテーマ——自然は母である——も又、詩の靈感と同じ高度に存在する。詩の各々の動きは、闇の中で形成され、遂には光の中に立ち上る一つの存在の手足である。詩的存在でなくて、いかなる存在が地下の此の幻想を持ち得たであろうか？ 万物の歌が湧き上る。というのは、詩は己れの存在に恋心を抱いているからである。詩は己れの疾走に酔い、そこで詩人を引きずって行く運動に興味を抱く。詩人はここでは、最も暗い鉱山の中にいるのだ。彼は題材として、総てが始まる処女なる此の時を選ぶ。彼も又、木の枝の創造的な動きをすべて利用するであろう。彼の枝は響きのある木になり、地平線を後退させるであろう。何でも食べてしまふ此の恐しい森は靈感であつて、貧食で、荒々しく、眼前にはこれから貧り食べようとする宇宙を持つて、立ち昇つて来る。それも又、植物の段階——詩の黎

明の短かい数時間——を経て、木の段階——正午の栄光に満ちた時の中で葉を掀げる詩——へと成長する。「砂、粘土、砂岩を必要とする」「その力強い生長の中ですべてのものを変形し」飽く事を知らない木は、総てのものから詩の可能性をむしり取る詩人の隠密の兄弟である。

半神獸は、歌の最初の時には、繰返された子音の激しい鼓動に酔い、疊韻法の絆きずなの中で脚をもつれさせているようであった。彼は言葉の内容の中に夢中で入り込んで行く。大地の不安げな水液は固く結びつけられた絡み合いの詩句の中を循環している。

Tout l'abîme est sous l'arbre énorme comme une urne,  
La terre sous la plante ouvre son puits nocturne……

水液は、呼吸に適さない、句切りの短かい、計画された、執拗に何物かを求める根のような詩句の中で動いている。

Prends, sapins ! — La forêt surgit ; l'arbre superbe  
Fouille le globe avec une hydre sous ses pieds ;

半神獸の詩人が、その探究者の動きの中で根を思い浮べる時、その根の代りに、これも又酔い痴れて大きくならん事を願っている他の根、水液に充滿している地中で叫び声を放ち、言葉を見出して感動する根にその役を果させるのは容易である。

La racine effrayante aux longs couds repliés,  
Aux mille becs béants dans la profondeur noire,  
Descend, plonge, atteint l'ombre et tâche de la boire.

疊韻法が斯くも強烈で、斯くも力強くかくもその秘密を明らかにするような事は嘗てなかった。それが此程までに創造的な機能を持っていた事も嘗てなかった事である。ここでは、音が不安な恋人達のように、お互を追い求めている。それらは互に掴み合い、お互を見失しなうが、空気の通らない混乱した堆積の中でも、詩人が引きずっているので、全く相まみえなくなる訳ではない。「宗教的な発情」(Le rut religieux)は——ここでも又同じ子音を重ねられた抱擁の中で、体と心をこれ以上大胆に調和させる事が出来るであろうか？——樫の木が発情と同じ位詩人のそれでもある。「騒がしい南風」(l'autan tumultueux)は山をうるさからせもするが、詩人をも同じ位うるさからせてゐる。

Le sylvain raconta Dodone et Cithéron,

Et tout ce qu'aux bas-fonds d'Hémus, sur l'Érymanthe,

Sur l'Hymète, l'autan tumultueux tourmente ;……

Le rut religieux du grand cèdre cynique,

Et, dans l'âcre épaisseur des branchages flottants,

La palpitation sauvage du printemps.

\* \* \*

この詩は、靈感の時に於ける詩人の果しない魂の最も清らかな、最も真実な証言であるから、夢の大きさ以外のものは持ち得なかつたのである。靄の中を、辛うじて軽く触れる束の間の幻影が通って行く。そこでは総てが、その幻影の通過を包み、隠し、乱し、印象派の絵を作り出すキャンパスの、たゆたう一つの世界の中で混じり合っている。換言すれば、半神獸は「朝がその爽やかな星をその下に滑り込ませる偉大な幕を己れの前に持って」進んで行くのである。すべては「溶ける水泡の白さ」の密度を持っている。マラルメの半神獸のように、

La naiade, qu'on voit radieuse sous l'eau

Comme une étoile ayant la forme d'une femme ;

(水の下に、女体の形をもつ星のように輝いているのが見える水の精)

を自分が見ているかどうか、抱きしめているかどうか、夢見ているかどうかも知らずに彷徨っている。

半神獣は「魔法のアルファベット」をゆつくりと読む。彼は「岩穴の不動の目」であり、あらゆる被造物は、自分の前では、類似の兄弟のような手を差し伸べる。即ち、自然は人間の外観を持っているのである。岩々は「眉をしかめ」、「千の頭をもつ植物」は鳥を水夫として持っている一種の海である。塊の群は「無情な横顔」であり、岩々は顔である。

幻影を見る詩人の目には、半神獣の詩人と地球との間には非常に深い絆きずなが存在し、彼は大地そのものになるのである。彼の髪の毛は森になり、腰部の上では、波、川、湖が流れている。脇腹の上では牧場や田畑が鼓動している。突然彼は魅力ある変身の場になる。即ち彼の胸は星辰で一杯になる。それは詩人の栄光である。彼は万物に溶け合ってしまう。彼は事物が自分のものになってしまう程多くの言を費して事物を語る。彼は喜びのために口ごもる。その廻りでは、すべてがイメージの流れであり、リズムの口ごもりである。彼はその瞬間に、自身自身でありながら何か自分の外にあるものを、彼が余儀なくそうさせられている地上の此の存在よりも更に多く創り出した事を知るのである。彼から生れた此の超自然を前にしての感動は、性愛と満足の領域に属している。彼の幻想は、その時、怪物のように大きくなる。

詩人は狂気の如くになり、詩の分捕品を捨て去る前に、幻想の中で疲れ果ててしまう。彼は、そこで、所有欲を満たし、辛辣な、不安な声、

Des avrils tout en fleurs verdoyaient sur ses membres ;

Le pli de son aisselle abritait des décembres ;……

をそこから生み出すために、現実の首を絞め上げようと望んでいる。

露、微光、曙を約束する縹渺とした幾筋かの尾をひいているもの、これらが遠景となり、響きのよい煙がその上に登ってゆく。しかし又、朝の偉大なる光もきらきら光っているのである。それは、夜明けから、立ったままで机に向っている詩人の内部の光の姉妹である。言語作用に活気を与え、詩人に刺戟を与える此の喜びは「日の光の中では露の滴くを」、「闇の中では星辰を」揺がす「曙の光を浴びて恐ろしげ」に、天空のさなかに立ち上る馬を彼に再び創造させる。途中で、ユゴは、半神獸という此の象徴的な巨大な人物の中に落ち込んでしまう事に満足出来ず、曙を飲むこれら血気にはやった者共の兄弟になる事に成功したのである。

\* \* \*

ユゴは完全であろうと常に心懸け、森羅万象のあらゆる部分に同時に存在しようという欲望を抱かせる詩的遍在の才能を持っているので、同じ詩的標高に長い間止まっている事が殆んど出来ないのである。彼が恍惚境に一時間いるとすれば、流暢の悪魔、疲労の悪魔、宣伝の悪魔、余計な事を添加する悪魔にすぐに唆かされてしまう。詩篇「半神獸」が純粹詩の隠れ場であるなら、それは又純粹詩の一種の分解の場ともなるのであり、ユゴが何をなし得るかが判り、彼が一であり、一つの立琴しか持っていないとは、少くとも信じられなくなる。事実、「薄明」の中では、抒情強度は弱くなっている。神秘の結び目がほぐれるのである。詩は一層あけっぴろげになり、一部は散文に還元し得る題材に一層満たされてしまう。それは未だ、おそらくは動き全体であり、上昇、増大である題材ではあるが、そこには、その時代に生きた生身のユゴ、ナポレオン三世も、致命的な「進歩」もまだ忘

れていないユゴが再び姿を見せる。始めユゴが自分の外部に創った半神獸が——というのは冒頭に見られるのはオリンポスの訪門者であるからなのだが——再びユゴ、人類の悪が涙をさそい、その目から涙を流している人道主義者のユゴ、諸王の敵、戦争の敵であるユゴに再び帰るのは、正に此の時なのである。詩句は穢きたならしくなってくる。題材の不純さに詩の不純さが突然呼応するのである。暴君等の腐敗した世界と同様、詩の世界に於いても、「清らかな芳香は鼻むけならぬ毒気になる。」

「進歩」のテーマというものは、現在の新鮮な幻想を涸らしてしまつた後、未来に新しい叫びを投げつけるために、その処女なる小径に飛び込んで行くテーマを待望しないものはないのである。声は膨れ上り、破裂し、題材よりも更に大きくなってしまふ。予言者、又人道主義者としての詩人は「すべてを再生させ、すべてを征服し、花崗岩を磁石に変えるであろう巨大な時」を待望し、それと平行して、言葉を再生させ、現実を詩に変える時をも待ち望んでいる。

Torse ailé, front divin, monte au jour, monte au trône,  
Et dans la sombre nuit jette les pieds du faune !

この詩の中で、詩人の肉欲はあらゆるジャンルに拡がった時にしか満されないのである。即ち可憐な抒情味、激した抒情味、神々の気違いじみた洪笑を再現するためのばらばらな詩句、威厳を損なわぬように神々を王座に位させるための、擲置シユエもなく、静かで荘厳で直線的な詩句、答への山が追いかけて来る言訳的な質問——この半神獸は何か？——という質問しかしらない神々の訊問の中の貧欲な詩句、そして例の金床の上で、あの治金グエルカンの神が震え動いて響きを発する美しい金属を打っている。その金属とは大部分、彼が作り出し、不確定の魅力を有する名詩の極く些細な意味であるが、それは、しかし完全な音楽でもある。稀有な詩人、マラルメが、その中で始め

て彼の貴重な「ptyx」を聞いたかも知れなかった響きのよい連続である。

On connaissait Stulcas, faune de Pallantyre,

.....on entendais Chrysis,

Sylvain du Ptyx que l'homme appelle Janicule,

Qui jouait de la flûte au fond du crépuscule.

そこには朗々と誦するに足りる大げさな詩句も見出される——というのは、此の作者の罪は「誰はばからず放蕩に熱中して」いる事であるのだから。「虎に似た模様の豹の皮の如き」ジュピテルの夢想にも似た他の色とりどりの詩句、繰返し現われる《a》を華かに響かせる豪華な音楽のどっしりとした詩句。

Et même la clameur du triste lac Strymphale,

Partie horrible et rauque, arrivait triomphale.

更に神々の洪笑の場に於いては劇作家の詩句も見られる。そこに現れるのは、山上に集まり、特徴を抽出され、単純化され、この山上の舞台上に生き生きと置かれた人物で、体をねじ曲げて笑っている。物語作家の詩句、哲学者の詩句、人道主義詩人の詩句、熱狂者の詩句、純粹詩人の詩句、すべてが此の巨大な壺の中で沸騰している。この春の詩はあらゆるユゴの邂逅の場であった。何故なら、当時彼はいかなる風にも怖れず、いかなる小舟にも止められない詩の舟の舵をとっていたからである。これだけの事が判ったあとで、この詩がいかにして「諸世紀の伝説」の中に入ったかを考える事が何の役に立とう？ そこに入るのに狡猾な手口でも用いたのだろうか？ 詩人は、或る日この偉大なる熔岩の詩を書き上げた後で、半神獸は異教の怒り狂うルネッサンスの代表者であるので、彼の「伝説」に入れるために此の詩を取り上げたのであろう。或いは、彼には「ルネッサンス」、「偶像教」



という看板が必要だったので、ユゴ自身この詩の道の中に押し込められてしまったのであろうか。それも有り得る事である。当時彼は色々な記憶を呼び覚したのであろう。半神獣も又、すべての物の元始を歌っているのである以上、その祖先であるかも知れない例の森の神のヴェルギリウスの第六の牧歌やシェニエの「盲人」やシェリーの「プロメテ」を想い出した事であろう。だがそんな事はどうでもいい事なのである。すべての枠からはみ出してしまったのだ。半神獣は素早く幾世紀をも飛び越えてユゴになり、善へ向う存在の進化を信じているユゴ、或は少くともそれを希望しているユゴの哲学を表明している。おそらく、以上のすべてであらう。しかし特に、この春の日に、書く事が自由になし得るようになった事、書きたいという欲望、書く喜び、抒情の飛翔の中で自分自身を完全に所有しているという恍惚を馴化し、歌いあげ、体験している己れを見る驚きが真の理由であらう。

かくの如く、ユゴの一切合切が混入している此の詩に於いて、特に注意しなければならないのは言葉である。ポードレールは、

「彼は明白に表現し、明らかな、はっきりした文字を文字通りに訳出するばかりでなく、あいまいな事、おぼろげに顯示されているものは、必要欠くべからざる曖昧さをもって表現する。」

と、ユゴの非凡な才能を見抜いた。だがユゴ自身、己れの言葉については、並々ならぬ自信を持っていたのである。彼は批評家が「ミユッセの詩の中に偉大なる面を」見出そうとしているのに驚いていた。

「私は彼に与えられた、バイロン嬢という定義が、可愛らしいと思うし又そう思う気持と同じ位正当であると思います。……彼はラマルチーナより大部劣っています。……今世紀では、古典作家といわれる者は一人しかいません。たった一人、お判りですか？ それは私ですよ。私は現代にあって、最もよくフランス語を知っている人

間なのです。……」

## その後

青春時代から感性の錯乱に落ち入り易かった詩人は、ジェルセイ島以後は聴覚及び視覚の奇妙な錯覚に落ち入る一種の精神錯乱を断続的に続けたりしく、最後の日まで迷信家で、常に何らかの不安を覚え、前兆や虫の知らせといったものに敏感であり、しかも偉大なる詩人であり続けた。詩人の肉体は一向に衰えを見せず、要求の多い肉欲に自制する事なく従っていた此の太古の神秘家は苦行者の何物をも有してはいなかった。

ジェルセイ島やゲルヌゼイ島に於いては、ルツに取り囲まれたボアズであった。勿論、ルツの前で聖なる感動に身を振るわせるボアズではなく、傍のルツを、彼の手帖にスペイン語で書いてある通り「*todo*」<sup>1</sup>「すべて」所有しなればならぬボアズで、その中の何人かはプラトニックな、などという想像は此の詩人に関しては許されないのである……その生涯に於いてたった二人の例外を除いては。その一人は、エレヌ・ドゥ・メ克蘭ブル、即ちオルレアン公妃であり、他の一人は貧しい娘ルイズ・ミシエル<sup>2</sup>であった。

一八七〇年、亡命生活を終えパリ市民の歓呼に迎えられてパリに帰ってからも相変わらず半神獸の生活が続いた。そして、パリ・コミュニティンの間のブリュッセル滞在中に詩人を頼って来た、コミュニティン戦士の若く美しい寡婦、ヴィアンドン<sup>3</sup>の「水の精」マリ・メルシエ、一八七二年から一年もの間、ジュリエットが余りにも無邪気に女家令及び秘書として彼の傍に置いたブランシュ・ランヴァン、即ち「アルバ」、カチュール・マンデスの妻でゴーチエの娘、ジュディト・ゴーチエ、「リュイ・ブラス」再演の際の女王役、サラ・ベルナル、それにジャンヌ・エスレル、ウジェニ・

ギノー、ゼリ・ロベール、アルベルティヌ・セラシ、アデル・ガロワ、ジュリエットが皮肉たつぷりに「問題の御婦人はお金を要求しないので、有利に、ほんの僅かばかりのお金で私の跡目にするのによい機会……」と書いている女流詩人レオニイ・ドゥ・ヴィトラック……この他にも、どれだけの行きずりの女、未だ判明していない女、どれだけの《total》の連続があつた事だろう。彼の肉体は一八八五年四月五日に、やっと衰えが来たようである。<sup>(3)</sup>

彼はその深さを測っている神秘の底に沈んでしまはしないかという怖れから、肉体に取りすがつて難を逃れて来た神秘の探究者である事は一生変らなかつた。肉体は、彼にとっては精神をかき乱す妄想から逃れる唯一の道であつた。しかし肉体は最後には滅びてしまふ。そこで彼は、死ぬまで彼岸の存在と靈魂の不滅を信じていた。一八五五年以来、詩人は一年の最後の何時間かが彼に永遠の年を夢想させていたので、ジュリエットに次のように書き送つた。

「……死と呼ばれている生命に入る日に、私達の肉体は葬られる事になるでしょう。そして肉体と一緒に、過失も、汚点も、影も、苦しみも。残るのはただ靈魂だけです。そなたの靈魂と私の靈魂とが入り混じり、結婚し、抱きあい、溶け合つて一つのものになり、同じものに混ざり合つて、神様の目から出る一条の糸を作るのです。」<sup>(5)</sup>

一八七二年十月以来、テオフィール・ゴチェと共に、一八三〇年の偉大なるロマン派の世代は彼岸に逝き終つたかの如くに思われているが、オート・ヴィル・ハウスの巨人は只一人直立したまま此の世に残り、華麗な嘆声を投げていた。

… Oh ! quel farouche bruit font dans le crépuscule  
Les chênes qu'on abat pour le bûcher d'Hercule !<sup>(6)</sup>

ああ、何と猛々しい音か？ 薄闇の中で、ヘラクレスの火葬の薪のために切り倒している樫の木が立てている音は。

そして、詩人も又、遠からぬ自らの消滅を告げている。

... Je vois mon profond soir vaguement s'étoiler ; (7)

Voici l'heure où je vais aussi, moi, m'en aller, .....

私の深遠な夜が茫漠と星に満ちて行くのが見える。さあ、私も又去り行く時が来たのだ。

詩人の息子、シェクスピアの翻譯者フランソワ・ヴィクトルは一八七三年の終りに漸進性結核のため彼に先立つた。それより先、一八六八年にはヴィタトル・ユゴ夫人がレオポルディーヌの後を追ひ、孫のジョルジュは脳膜炎で幼い生命の火を消した。一八七一年には息子シャルルもボルドーで急死してしまつていた。詩人にはもはや、二人の孫ジュルジュとジャンヌとその母親、シャルル・ユゴ夫人しか残されていなかった。確かに詩人より生きのびた娘のアデールはいた。しかし、サント・ブーヴが名付け親だつた此の娘は、恋人である英国陸軍中尉ピンソンとの結婚を父親の盲目的な愛国主義に妨げられ、オート・ヴィル・ハウスを出奔してアメリカまで彼の後を追いかけて行つてしまつたが、アメリカで見付けたピンソンには既に妻も子もあり、あまりの事に精神に打撃をうけて発狂してしまつた。一八七二年、黒人のセリヌ・アルヴァレス・バア夫人に詩人の許に連れ戻されたのである。その精神錯乱は、より穩かなものではあつたが、ヴィクトルとアデルの結婚式の夜に、ウヂェーヌを襲つたものと同じ性質のものであつた。この悲しみに、至高の死、忠実な献身に身体をすりへらし、娘クレールの後を追つたジュリエット・ドゥルエ夫人の死が加えられた。

このようにユゴは、二人の孫と狂気の娘を除いてはたった一人此の世に残されてしまつたが、年令と栄光の重さによく堪え、最後の日々をポール・ムリスが手に入れてくれたコー地方のヴル・レ・ローズのノルマンディ海岸の住居に、それでもさすが悲しげな様子で、一人海を凝視し、瞑想に耽りながら過していた。

一八八五年、八十三才の高令で、あの不安な世紀に於いて最も気高い、崇高な魂の灯し火が静かに消えて行つた。その最後の苦しみの最中にも詩人である事を忘れず、意識に上つた一行の詩句を苦しげな口許からこぼれさせたのである。

C'est ici le combat du jour et de la nuit.

こゝでは昼と夜が斗っている。

「終」

## 註 解

創作まで

(1) 当時の二万五千フランは一九五二年では、四百五十万フランに相当する。Raymond Escholier : Un Amant de Génie, p. 361.

(2) *Tables tournantes*. 日本に於ける「くりくりさん」の如きものであるが、その事については、Maurice Levaillant : *La crise mystique de Victor Hugo, d'après des documents inédits*. の六七頁から六八頁にかけて詳しく出ているので、左にその訳文を載せる。

「テーブルをなさつてらして？」奇妙な、少しばかり神秘的な質問だが、これが第二帝政の最初の年、一八五三年の春から夏にかけての頃、パリのブルヴァールやサロンに、ひそひそと流れていたのである。それを口に出す人々は、一種の身ぶるいのするような好奇心を、あまり隠そうとはしなかつた。

二・三年前から、あちこちで、雑誌に、新聞に、降霊術の事が語られていた。その学説に関する知識はまだ漠然たるものであつたが、輿儀に達した人から民衆の中まで下りて来ていたのである。——しかも何と早い足どりで。一八五三年春には、どんな卑俗な媒体によつたのか正確には知れないままに、降霊術は流行の波に乗る見込みが立つように思われた。二・三の

詩篇「半神獣」の背景と意義 (杉山)

サロンでは、それが半ば秘密に包まれているので、それだけ熱狂的に、「実験と応用の会議」と一部の人に呼ばれているものが開かれていた。バイロンのミューズであり、ラマルチーナが嘗て言っていたように、

Celle qu'il appelait alors sa Guiccioli!

(当時卿が私のグイチオリと呼んでいた女)

であるボワシ侯爵夫人は最も熱心な大家の一人であった。選んだ何人かの友達に「招待状」——しかし、間もなく会員の方でそれを欲しがったが——を送り、疑いを抱く一人々の会話を純な信者の熱狂とを惹き起した。六月に入ると、降霊術は「一般的な熱狂」となり、正統派の歴史家の一人が「それは今年の特徴を表わす事件になる。」と断言している。皆、多かれ少かれ、巧みに「テーブルをする」事を研究しようと思っていたのである。即ち「テーブルをする」という事は、つないだ多くの手を置くだけの事で、テーブルを動かして、向きを変えさせ、廻転させ、跳ね廻らせる事を意味するのである。しかも、テーブルが、トントンとノックをする事で、喋らせる事すらしようとする。というより主に喋らせる、という事なのである。人々はそれに驚歎し、怖がった。というのは、動くにしろ又話すにしろ、精霊が、純粋な精霊か又は昔の人類が、テーブルを活動させるのに同意をするという事だからなのである。が降りて来るテーブルによって、生者と死者の間の意志の疎通が可能になるのであり、一つの扉が永遠の神秘の上に開かれるのである。

(3) cf. André Maurois : *Olympio ou la vie de Victor Hugo*, p. 421.

(4) これは、国立印刷所版 *Édition de l'Imprimerie Nationale* に引かれてあるポール・オリエンタル版 *Paul Ollendorff* 後にエドモン・ミッシェル版 *Albin Michel* の四十五冊よりの「*Victor Hugo : Histoire de la Légende des Siècles*, p. 614 (*La Légende des Siècles*, Tome I) に拠る。

尚、当論文中に於いて「*サントナル・デュ*」の作品よりの引用は、特に断わっていない限り、この版に拠るものである。

(5) *Victor Hugo : La Légende des Siècles (Extrait)*, II, avec une Notice biographique, une Notice historique et littéraire, des Notes explicatives, des jugements, un Questionnaire sur les extraits et des Sujets de devoir, par J. Passeron, p. 5. (Paris, Larousse, 1949)

(6) A. Maurois : *Olympio ou la vie de Victor Hugo*, p. 430

- (7) Victor Hugo : Historique de la Légende des Siècles, p. 527 (La Légende des Siècles, Tome II, Notes de l'éditeur.)  
 (8) V. Hugo : Les Manuscrits de La Légende des Siècles, Notes explicatives, p. 423. (La Légende des Siècles, Tome II)

### フロローン

- (1) 「半神歌」の中の詩句は、その標題や、詩句の行数のみならず、  
 (2) Victor Hugo : La Légende des Siècles, II, avec une chronologie, une notice littéraire et des notes explicatives par Philippe Van Tieghem, professeur agrégé au Lycée Pasteur, p. 57, Note 1, [Paris, Hachette, 1951]  
 (3) Victor Hugo raconté par un témoin de sa vie, Tome I, p. p. 31—32.  
 (4) この詩は、直譯ローム嬢を敬ったものではないが、半神歌の詩を作る時に、一首節の名称を探し、ローム嬢の事を想い出し、  
 cf. Victor Hugo : Les Contemplations, avec Avant-propos et Notes par André Dumas, Note, 120, p. 370, [Paris, Garnier, 1950]  
 (5) Victor Hugo : Pyrénées (En voyage, t. II.) p. 298.  
 但、cf. Victor Hugo raconté par un témoin de sa vie, chap. XVI, Une idylle à Bayonne.  
 (6) A. Maurois : Olympio ou la vie de Victor Hugo, p. 54.  
 (7) ラマルチーヌがデュ夫人から贈られた詩集「観想」の上に一八二二年十月十二日の結婚の日を、三十五年後に想起して書いた詩句の一節。  
 cf. Roymond Escholier : Victor Hugo, cet inconnu, p. 94. [Paris, Plon, 1950]  
 (8) cf. Henri Guillemin : Hugo et la sexualité, p. 17. [Paris, n. r. f. 1954] André Billy : Sainte-Beuve, t. I, p. 184 [Flammarion, 1952]  
 (9) Opus. cit. p. 22. ジュリーとは、妻アデルの妹で、当時、ポール・シュネイ夫人としてゲルヌゼイ島で詩人の世話をしつた。





ある。

(20) ユゴがビアール夫人を征服した日については、四月中である事は、殆んどの伝記作家に於いて認められている。

まず第一に、ルイ・ガンボイであるが、この点の研究家は Louis Guimbaud : Victor Hugo et Madame Biard, d'après documents inédits (Paris, Auguste Blazot, 1927) の古典的な著書の第五章、Leo Victor victus Leena. (八十七頁より九十頁) に於いて、四月中である事を明らかにしている。レイモン・エスコリエによれば、(Raymond Escholier : Victor Hugo, cet inconnu, p. 227) このルイ・ガンボイの「ヴィクトル・ユゴとビアール夫人」の新版が出るそうである。それに未発表の書籍が加えられるとの事である。たのしみになっているが、まだ出版されていないようである。

レイモン・エスコリエの Un amant de génie, Victor Hugo (Librairie Arthème Fayard, 1953) によれば、

Oh ! ce fut une heure sacrée,

T'en souvient-il !

Que cette première soirée

Du mois d'avril !

[Dernière Gerbe, LXX, août 1944, v. 1—4]

という詩句を取り上げ、それは、四月一日なり、と断定してゐる。(三三四頁より三三五頁) マンドン・モロワも、その著書、Olympio ou la vie de Victor Hugo (Hachette, 1954) で、前記の詩、及び本文中の「立派のすて」の中の詩句を引用し、まず四月中であると認めてゐる。(三二二頁より三二三頁)。

マソリ・ギューマンも、その Hugo et la sexualité, (n.r.f. 1954) 第四章に於いて、四月中なる事を未発表の手紙によつて証明している。(四九頁から六三頁まで。特に、五〇頁参照)。

(21) ジュリエットとジャム・ブラディエ (James Pradier) という彫刻家の間に出来た娘で、ブラディエは自分の姓を名乗る事を許していなかったが、普通、タレール・ブラディエと呼ばれてゐる。

cf. Louis Guimbaud : Victor Hugo et Juliette Drouet, d'après les lettres inédites de Juliette Drouet à Victor Hugo et avec un choix de lettres, (Paris, Auguste Blazot, 1954), Chap. V. Claire Pradier.

詩篇「半神戯」の背景と意義 (終三)

- (23) Juliette Drouet : Mille et une lettres d'amour à Victor Hugo (Paris, Gallimard, 1951) p. 173.
- (23) cf. Paul Souchon : Les Deux Femmes de Victor Hugo (avec des lettres inédites) [Paris, Tallandier, 1948] Chap. XI, Un mariage mystique.
- (24) 一八三三年五月二十八日付の「ジュリエット宛の手紙の追伸の中で、トコは、「……しかし、トムシキ・ト・マケ(ヴィクトル)の愛称で、自分の替)は、自分の子として、あの子に接吻したり、世話をするために、特に手許においておきたいと思っております。」と書いてくる。それ故、トコのタレールに対する愛情は早へから目覚めようたのであつて、一八三九年の神秘的な結婚にまでつ、タレールを「神秘的な養子縁組をしたのである。」 cf. Louis Guimbaud : Victor Hugo et Juliette Drouet. p. 139.
- (25) cf. Paul Souchon : Les Deux Femmes de Victor Hugo. chap. XX. Une autre année funeste. X cf. Victor Hugo : Les Contemplations, Liv. IV, XI.
- (26) André Maurois : Olympio ou la vie de Victor Hugo. p. 340.
- (27) Victor Hugo : D'après nature. (Choses vues, t. II. p. 28) 前日の日附は、一八四九年の二月三日から四日の夜。となつてくるが、「この夜の日付【見聞録】の初期の諸版には、今日まで不正確に印刷されてくる)は、一八五〇年九月一日号の「メルクユール・ノランヌ」誌に発表された「マクタル・ニコトマリス・オズ」による論文の中で「アンリ・ギエイマンに与へたまひ後出された。」の「ヤロロ」を誤記してある。 André Maurois : Olympio ou la vie de Victor Hugo, p. 340 Note 3.
- (28) Victor Hugo : D'après nature. (Choses vues. t. II. p. 28)
- (28) André Maurois : Olympio ou la vie de Victor Hugo. p. 368.
- 脚「種々の女型」の「Raymond Escholier : Un amant de Génie. Chap. IV, Alice, et Chap. VI, Thérèse. の註釈を参照せよ。
- (29) Raymond Escholier : Un amant de Génie. Victor Hugo. p. 356.

- (1) Ferrand Gregh : Victor Hugo, sa vie-son oeuvre (Paris, Flammarion, 1954). p.p.325—326.
- (2) この「テレーズ家の冥」についてはその靈感を与えた女性が、ジュリエットであるか、レオニ・ドネであるかについての果しない議論が交わされている。詳述すると、これまた果しない事になるが、ルイ・ガンボーは、レオニでありとし、これに、P・スーションが反論をして、ジュリエットであるとし、その後は、スーションの意見が認められ、M・ルヴァイヤン、J・ヴィアネ、A・デュヤ、P・ヴァン・ティゲム、などがこれに同意しているが、R・エスロリヒは新たな理由によつて、再びこれに反論を加えて、ガンボー説のレオニが正しいとし、J・バレル、A・モロワは中立の立場をとつてゐるように思われる。この事については、機会があり、更に多くの資料が集まつたら、更めて論じたいと思ふ。

## 第二節 暗 黒

- (1) Victor Hugo : Le Dernier Jour d'un Condamné, p. 681.
- (2) 以下にある「老いた僧」というのは、ラ・リヴィエール氏が、当時、サン・ジャック街で近所の労働者の子供などのために小學校を開いていた。ユムは、このラ・リヴィエール氏がオラトワール教会員で、大革命の時に遺俗したと信じていたが、実は、全然オラトワール教会に所属してゐた事はなかつた。Cf. Pierre Flottes : L'Éveil de Victor Hugo, 1802—1822. [Paris, Gallinard, 1957] p. 46~47.
- (3) Victor Hugo : William Shakespeare, Reliquat : promontorium somnii. p. 302—304.
- (4) Opus. cit. p. 305.
- (5) Opus. cit. p. 310.
- (6) Opus. cit. p. 311.
- (7) Chateaubriand : René (Œuvres complètes de Chateaubriand, suivies d'une notice sur la vie et les ouvrages de l'auteur. Nouvelle édition illustrée de soixante-trois gravures sur acier et d'un plan de Jérusalem, Tome 1<sup>er</sup> p. 82.) [Paris, Administration des Publications pittoresques.]
- (8) Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo. p. 190.

- (9) Victor Hugo : Les Feuilles d'Autonne : V. Ce qu'on entend sur la montagne.
- (10) Op. cit. : XXIX. La pente de la rêverie.
- (11) Maurice Levaillant : Victor Hugo, Juliette Drouet et "Tristesse d'Olympio", d'après des documents inédits. [Paris, De-lagrave, 1945] p. 44.
- (12) Victor Hugo raconté par un témoin de sa vie. の事でユゴ全集に入れられているが、ユゴ夫人の筆になるもの。しかし、ユゴ自身が手を入れているのは勿論の事である。
- (13) Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo, p. 19.
- (14) Maurice Levaillant : Victor Hugo, Juliette Drouet et "Tristesse d'Olympio" p. 35.
- (15) Opus. cit. p. 42.
- (16) Denis Saurat : Victor Hugo et les dieux du peuple. [Paris, La Colombe, 1948] p. 22.
- (17) この詩は、Les Chansons du Cépuseule. XXXIII. Dans l'église de……を指している。一八三四年の十月、メッスの小部落に滞在していたジュリエットと、レ・ロシュに滞在していたヴィクトル・ユゴは、約四軒ばかり歩いて、森の中で毎日逢っていた。十月二十五日、夜の帳りが二人を包み始めた頃、二人はビィエーヴルを見下す丘の上にいた。夕べの祈りの鐘に答えて、二人の恋人は村に下り、夕べの祈りが終わったばかりの古い教会に二人だけで行った。オルガンの音が鎮まり、村人達は広場を横切つて、生きる欲びを歌いながら帰つて行くと、ジュリエットは、深く頭を垂れ、神に救いを求め、己れの弱さを告白した。詩人は彼女が涙を流しているのを見て、希望と信仰の言葉を彼女に囁いた。八月の危機(三八六—三八七頁参照)の後で、ジュリエットにはこの夕の教会での事が、まるで結婚式の夕べのように嬉しく、四十六年後の手紙で、この詩の一節を引用して、この事を想起している。(Juliette Drouet : Mille et une lettres d'amour, p. 789)
- (18) フロロードの註(17)を参照せよ。
- (19) これは、詩人がレオポルディーヌの死に直面して、内心の苦悩を次々と断片的な詩句で綴つていった。後の詩集「観想」の母体となるものである。以下暫く引用する詩句は、皆これに属し、すなわち、Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo. によるものである。上掲書、四〇頁。

- (20) Opus. cit. p. 40.
- (21) Opus. cit. p. 40.
- (22) Opus. cit. p. 41.
- (23) Opus. cit. p. 42.
- (24) Opus cit. p. 24.
- (25) Victor Hugo : Pyrénées. (En voyage, t. II. p. 438). Note de l'édition Hetzel-Quantin.
- (26) cf. Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo. Première Partie, chap. II.
- (27) Opus. cit. p. 45.
- (28) Victor Hugo : Correspondance, I. 1815—1835. p. 614.
- (29) Opus. cit. p. 617.
- (30) Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo, p. 51. 聖書上の神話の歴史をめぐって  
 no° Ébauche en prose d'un vers futur et non un vers de treize pieds.
- (31) cf. Opus. cit. p. 56—57.
- (32) 神作神作 神(2) 神參照中。
- cf. Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo. chap. 1er. 3. La visite de Mme de Girardin, p. 74~76.
- (33) Pascal : Pensée. 481. p. 1222 de l'édition de la Pléiade.
- (34) Victor Hugo : Les Misérables, 7e part., Livre I : La guerre entre quatre murs. chap. 16. p. 58.
- (35) Opus. cit. Première part. Livre I. Un juste. chap. 10. p. 49.
- (36) Denis Saurat : Victor Hugo et les dieux du peuple. p. 73. Victor Hugo : Les Misérables. IVe part., Livre IV. La maison de la rue Plumet. chap. 3. p. 178.
- (37) Victor Hugo : L'épopée du vers (La Légende des Siècles. XIII.)
- (38) Victor Hugo : Les Misérables. 1ère part., Livre V : La descente. chap. 4. p. 178.

第三節 華 明

- (1) Victor Hugo : Belgique. (En voyage, t. II, p. 93, Anvers, 22 août)
- (2) Victor Hugo : La Légende des Siècles. LVIII. Vingtième Siècle. II. Plein Ciel. Juin 1858—3 avril 1859. Victor Hugo : La Légendes des Siècle : Préface (t. 1<sup>er</sup>, p. 5)

第四節 聖 臣

- (1) Victor Hugo : Plein Ciel (La Légende des Siècles, LVIII. II.) v. 353.  
尚本論、四〇六頁を参照せよ。
- (2) 本論四二六頁より四二七頁参照。
- (3) Alexandre Weill : Introductions à mes Mémoires, [Paris, 1890] p. 113. 同上の引用を、Denis Saurat : Victor Hugo et les dieux du peuple, p. 23 以下参照。
- (4) Juliette Drouet : Mille et une lettres d'amour à Victor Hugo, p. 362.
- (5) Opus. cit. p. 117. Dans la lettre datée '6 avril, jeudi après midi, 3h. 1/2."
- (6) 本論三六六頁参照。

詩の魔力

- (1) Denis Saurat : Victor Hugo et les dieux du peuple, p. 158.
- (2) Fernand Gregh : Victor Hugo. Sa vie-son oeuvre, p. 324. [Flammariion, 1954]
- (3) Opus. cit. p. 325.
- (4) 原註<sup>1)</sup>の《formidables d'aurore》は大胆であり、我々には、近頃の流行で formidable という単語が頻繁に使われるの

で、今日では安易のように見える。が此の形容詞をこの詩が作られた時代に置いて考えねばならない。しかし私はそれが気

も狂わんばかりに好きだとは云い兼ねる。それは、幾分かは調子の外れた勢いなのだ。しかしこの表現は、最近でこそ月並みになつてゐるものの、當時は月並ではなかつた。

(5) Theophile de Viau : Le matin. Ode. v. 8. (Recueil de 1621)

(6) Lucrétius : De rerum natura. ルクレチウス著「物の本性について」の第五卷である。

(7) André Chénier : Bucoliques. XXVI, L'Aveugle, p. 46 de l'édition de la Pléiade.

(8) ワグネルの四部作、(1)ライーンの黄金、(2)ワルキューレ、(3)ジューグフリート、(4)神々の黄昏、の中の全体の序曲をなす「ライーンの黄金」で、始めの一三六小節ほどが全部交ホの長三和音の上に構成され、ピアノシモから始まり、段々楽器が加わつてクルンツェンドの効果を挙げてゐる荘大な楽曲である。この和音は「自然の要素の元始」を表現している。(尚このワグネルについての註は、笹森猛正教授の懇切な御教示によるものである。)

(9) Fernand Gregh : Victor Hugo. Sa vie-son oeuvre. pp. 325—329.

(10) Alfred Glauser はフランス人ではなへ、米国の University of Wisconsin, Madison. に於けるユートン研究家である。

(11) これはマラルメの「——高々と純らかなの爪もて猷ぐる縞瑪瑙……」というソネの、夫々第三行及び第四行の詩句である。左に全篇を引用する。

Ses purs ongles très haut dédiant leur onyx,

L'Angoisse, ce minuit, soutient, lampadophore,

Maint rêve vespéral brûlé par le Phénix

Que ne recueille pas de cinéraire amphore

Sur les crédençes, au salon vide : nul pyx,

Aboli biblelot d'inanité sonore,

(Car le Maître est allé puiser des pleurs au Styx

詩篇「半神獸」の背景と意義(杉山)

Avec ce seul objet dont le Néant s'honore.)

Mais proche la croisée au nord vacante, un or

Agonise selon peut-être le décor

Des licornes ruant du feu contre une nixe,

Elle, défunte nue en le miroir, encor

Que, dans l'oubli fermé par le cadre, se fixe

De scintillations sitôt le septuor.

- (11) マルセルは此の「ptyx」を「ネロ」の使った山もしくは丘の名前の意味の個有名詞として使ったのではなく、そのギリシヤ語の語源のまま湖のあり「螺貝」即ち耳にあてて海の騒めきをきくのに使った貝の意味で使っている。それは純粋な虚無を表わしている。

cf. Mallarmé : *Œuvres complètes* (Édition de la Pléiade.) p. p. 1490—1491.

- (12) Alfred Glauser : Hugo et la poésie pure. pp. 31—38. [Librairie Droz et Librairie Minard, 1957]

- (13) Charles Baudelaire : Victor Hugo (*L'Art romantique*, XIX : *Réflexions en quelques-uns de mes contemporains*) p. 520 de l'édition de la Pléiade.

- (14) André Maurois : *Olympio ou la vie de Victor Hugo*. p. 468.

### その後

- (1) 「ネロ」は手帖の中にどういふも関係した女性の名や田附などを書きとめておいたが、主にジュリエットに知られないうちに「ネロ」を「ネロ」語に替はつた。cf. Henri Guillemin : *Hugo et la sexualité*, chap. VI et VII.



- (2) ベルク・マンナンドロフ Raymond Escholier : Un amant de génie. 小説家 Louise Michel の小説。
- (3) Juliette Drouet : Mille et une lettres d'amour à Victor Hugo. p. 793.
- (4) cf. Henri Guillemin : Victor Hugo par lui-même. p. 58
- (5) Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo. p. 269.
- (6) Victor Hugo : A Théophile Gautier. v. 69—70. (Toute la lyre. IV. L'art., XXXIV.)
- (7) Opus. cit. v. 59—60

ホキキエドリス

この使用したホキキエドリス

L'édition Ollendorff-Albin Michel (dite «de l'Imprimerie Nationale») en 45 volumes, publiée par Paul Meurice (1904—1905), et poursuivie par Gustave Simon (1905—1914), puis par Mme Cécile Daubray (1933—1952).

に拠った。

その他

La Légende des siècles. La Fin de Satan. Dieu : édition de la Pléiade, Gallimard. 1950.

が参考になった。

但し Les Feuilles d'automne. Les Chants du crépuscule. Les Voix intérieures. Les Rayons et les Ombres. Les Contemplations. La Légende des Siècles. などほんまに André Dumas の「挿話」や「註」などにたいしては Classique Garnier 版が参考になった。

註の解釈の助けとするために使用した参考書は次の通りである。

- (1) L'Œuvre de Victor Hugo, Poésie, Prose, Théâtre. Choix, notices et notes critique de M. Levaillant (Delagrave. 1952)
- (2) La série spéciale des œuvres de Victor Hugo, en 15 vol, une chronologie, une notice littéraire et des notes explicatives par

註者「半井瀧」の背景と意図 (後中)

Philippe van Thieghem (Les Classiques illustrés Vaubourditte. Librairie Hachette.)

- ㉔ La série des oeuvres de Victor Hugo, en 14 vol. avec une notice biographique, une Notice historique et littéraire, des Notes explicatives, des Jugements, un Questionnaire sur les extraits et des Sujets de devoirs. [Classiques Larousses. Librairie Larousse]

- ㉕ Victor Hugo : Poésies, en 2 vol. avec les notes de M. Henri Chabrol. [Collection du Flambeau. Hachette.]

参事御回覧

- 1) 外題空返記。

- ㉖ André Maurois : Olympio ou la vie de Victor Hugo. [Paris. Hachette. 1954]

- ㉗ Raymond Escholier : Victor Hugo, cet inconnu [Paris, Plon, 1951]

- ㉘ Raymond Escholier : Un amant de génie [Paris, Arthème Fayard 1953]

- ㉙ Henri Guillemin : Victor Hugo par lui même. [Édition du Seuil, Collection «Écrivains de toujours.», 1951]

- ㉚ 返題空の空返記

- ㉛ Jean-Bertrand Barrère : Hugo, l'homme et l'oeuvre [Paris, Boivin et Cie, 1952]

- ㉜ Fernand Gregh : Victor Hugo. Sa vie-son oeuvre. [Paris, Flammarion. Collection «Les Grandes Biographies»1954]

- ㉝ 参事御回覧

- ㉞ Pierre Flutes : L'Éveil de Victor Hugo. 1802—1822. [Paris, Gallimard. «Vocations, V. Collection dirigé par Henri Mondor de l'Académie Française» 1957]

- ㉟ Gerand Venac : Les premiers maîtres de Victor Hugo [Paris, Bloud & Gay. «Travaux de l'Institut catholique de Paris, 2.» 1955]

- ㊱ Louis Guimbaud : Victor Hugo et Juliette Drouet, [Paris, Auguste Blazot, 1914]

- ㊲ Paul Souchon : Les Deux Femmes de Victor Hugo. [Paris, Tallandier, 1948]

- Ⓒ Juliette Drouet : Mille et une lettres d'amour à Victor Hugo, choix, préface et notes par Paul Souchon (Paris, Gallimard, 1945)
- Ⓕ Maurice Levaillant : Victor Hugo, Juliette Drouet et "Tristesse d'Olympio" (Paris, Delagrave, 1945)
- Ⓖ Louis Guimbaud : Victor Hugo et Madame Biard. (Paris, Auguste Blaugot, 1927)
- Ⓕ Maurice Levaillant : La crise mystique de Victor Hugo (1846—1845) (Paris, José Corti, 1954)
- Ⓙ Henri Guillemin : Hugo et la sexualité (Paris, Gallimard, [1954])
- Ⓙ Denis Saurat : Victor Hugo et les dieux du peuple (Paris, La Calombe. Collection «Neptune» 1948)
- Ⓚ Jean-Bertrand Barrère : La Fantaisie de Victor Hugo 1802—1851 (Paris, José Corti, 1949)
- Ⓛ Jean-Bertrand Barrère : La Fantaisie de Victor Hugo, thèmes et motifs (Paris, José Corti, 1950)
- Ⓜ Marcel Raymond : Génies de la France. (La Baconnière, Neufchâtel, 1942)
- Ⓜ «Europe» 74—75, Numéro spécial de février-mars 1952. «Victor Hugo a cent-cinquante ans.»
- Ⓞ Alfred Glauser : Hugo et la poésie pure (Librairie E. Droz et Librairie Minard, 1957)